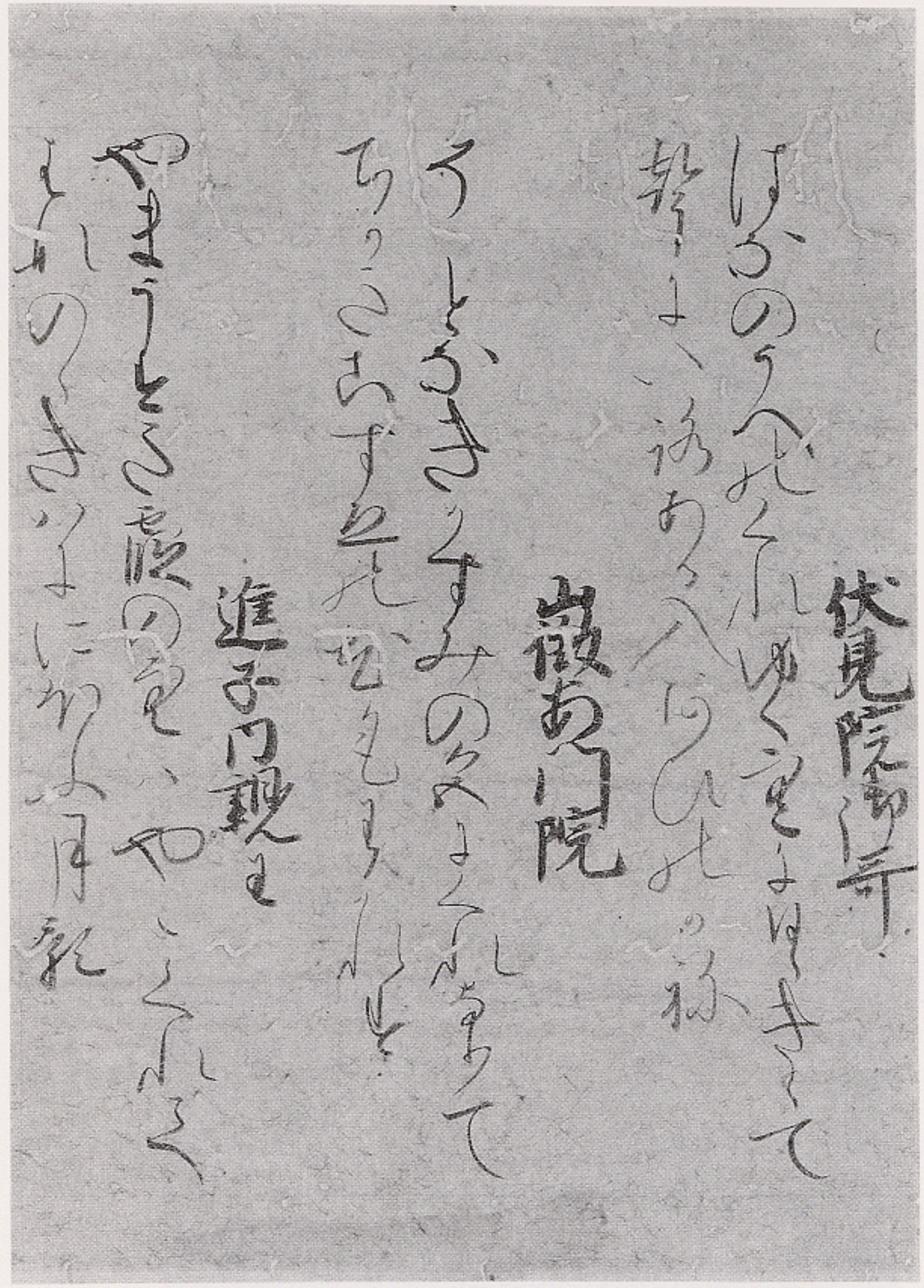
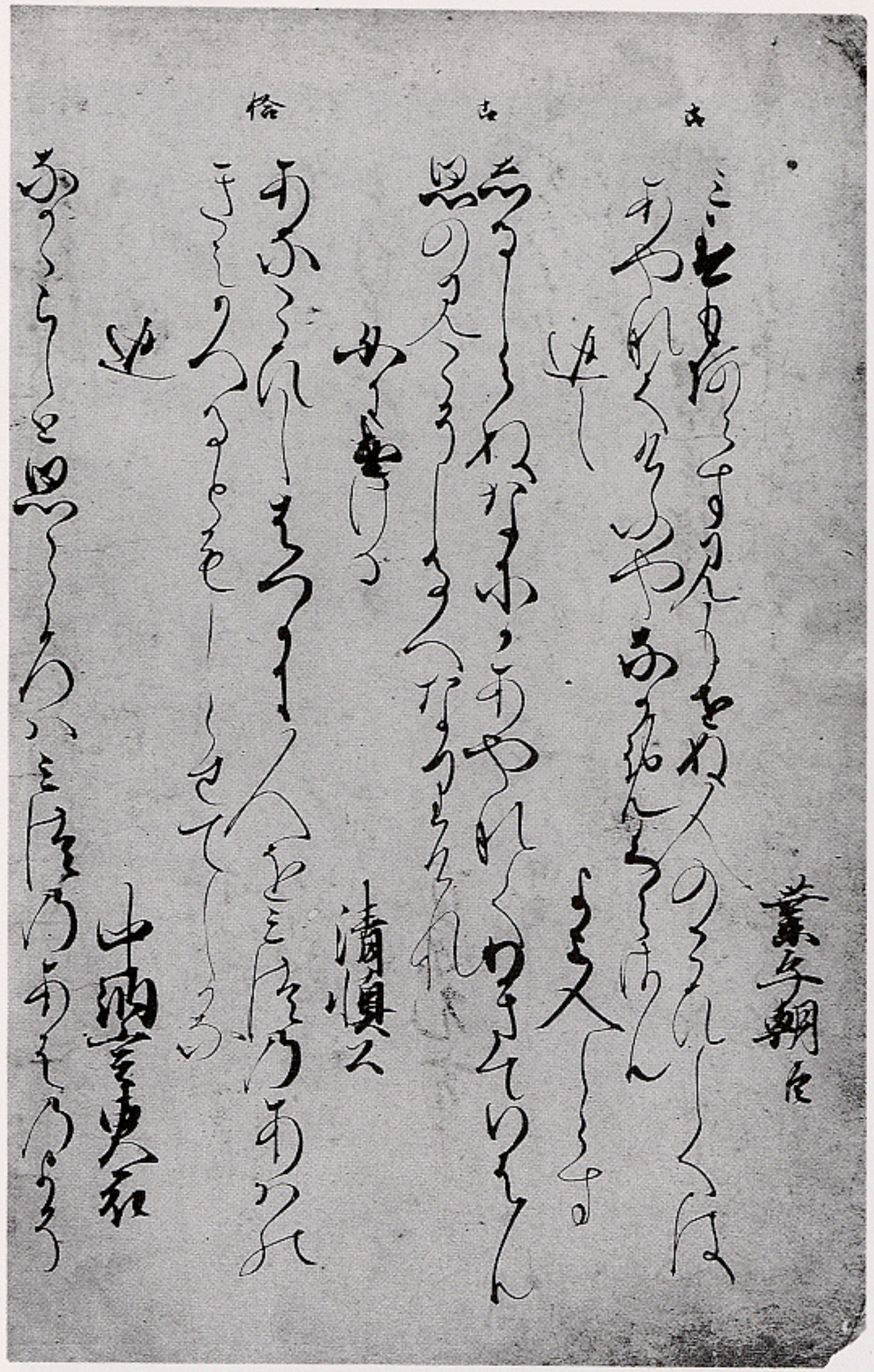
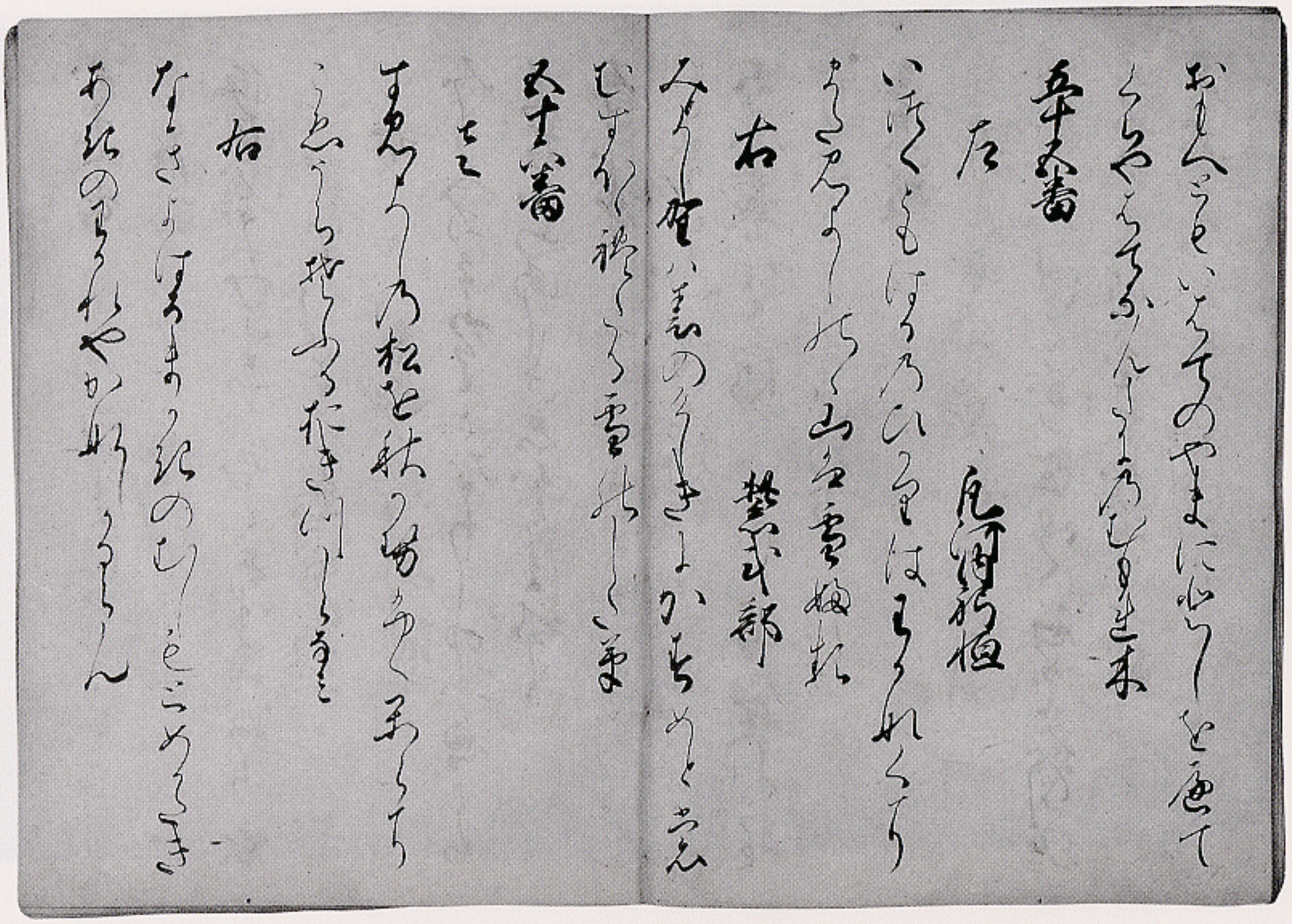


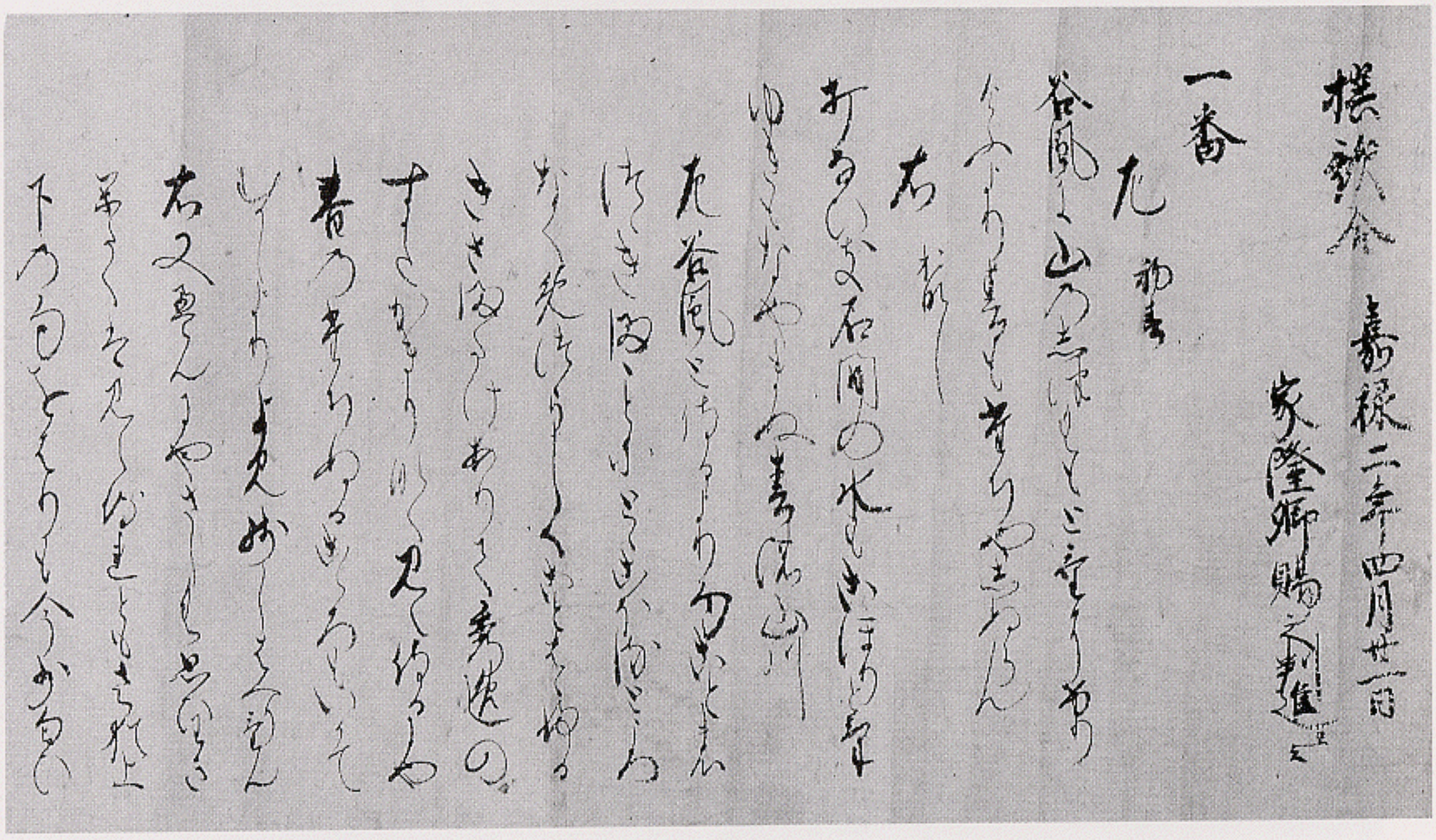
24　風雅和歌集断簡



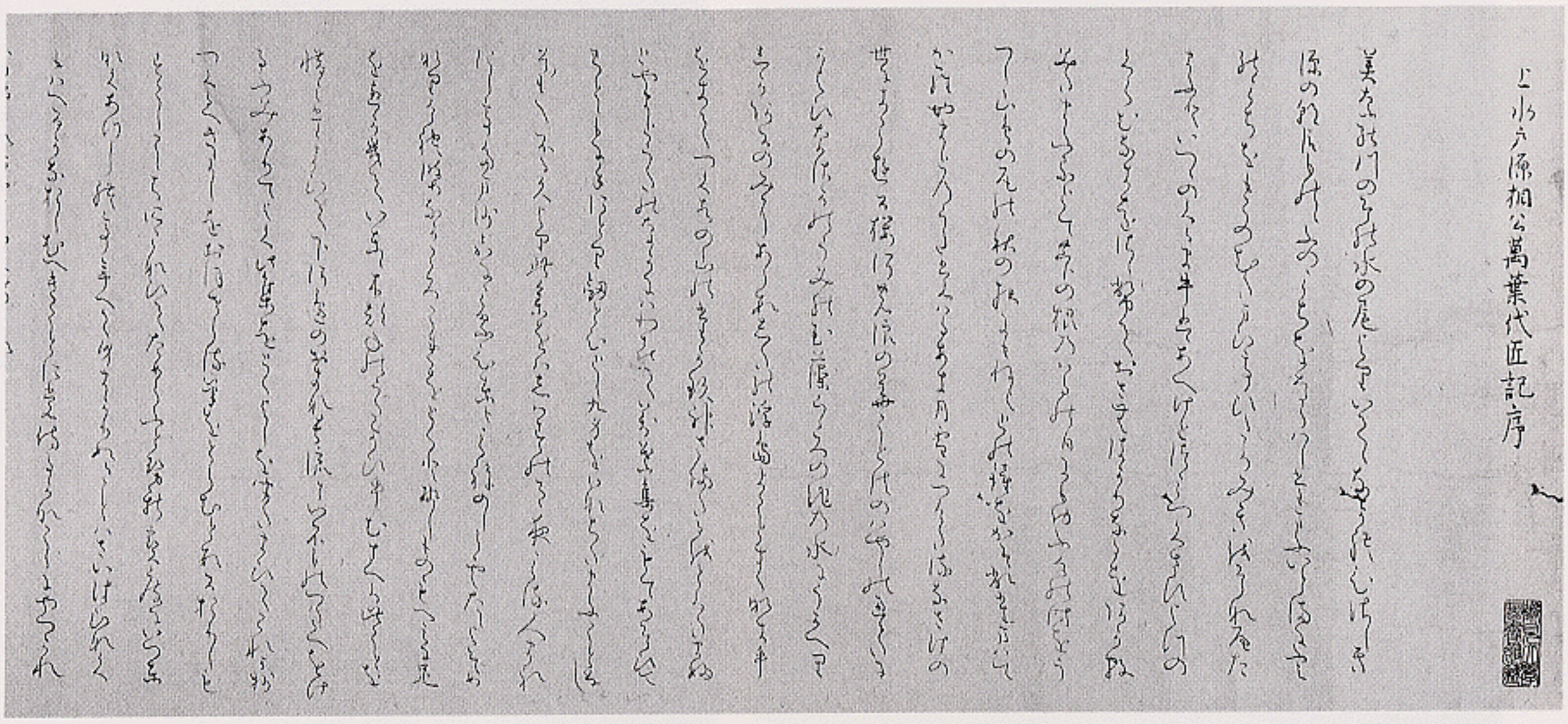
25　定家八代抄断簡（伝藤原為家筆）



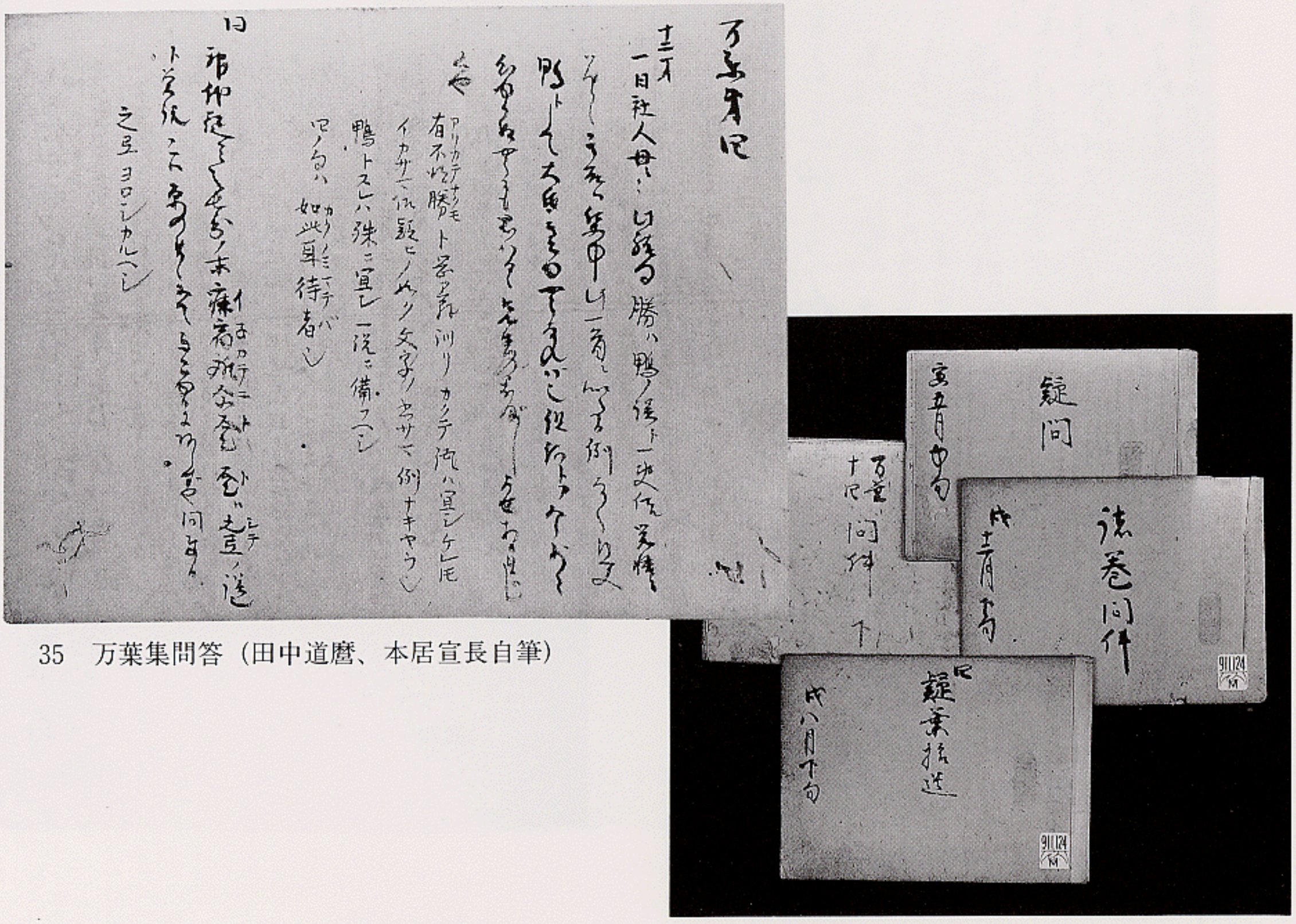
28　時代不同歌合



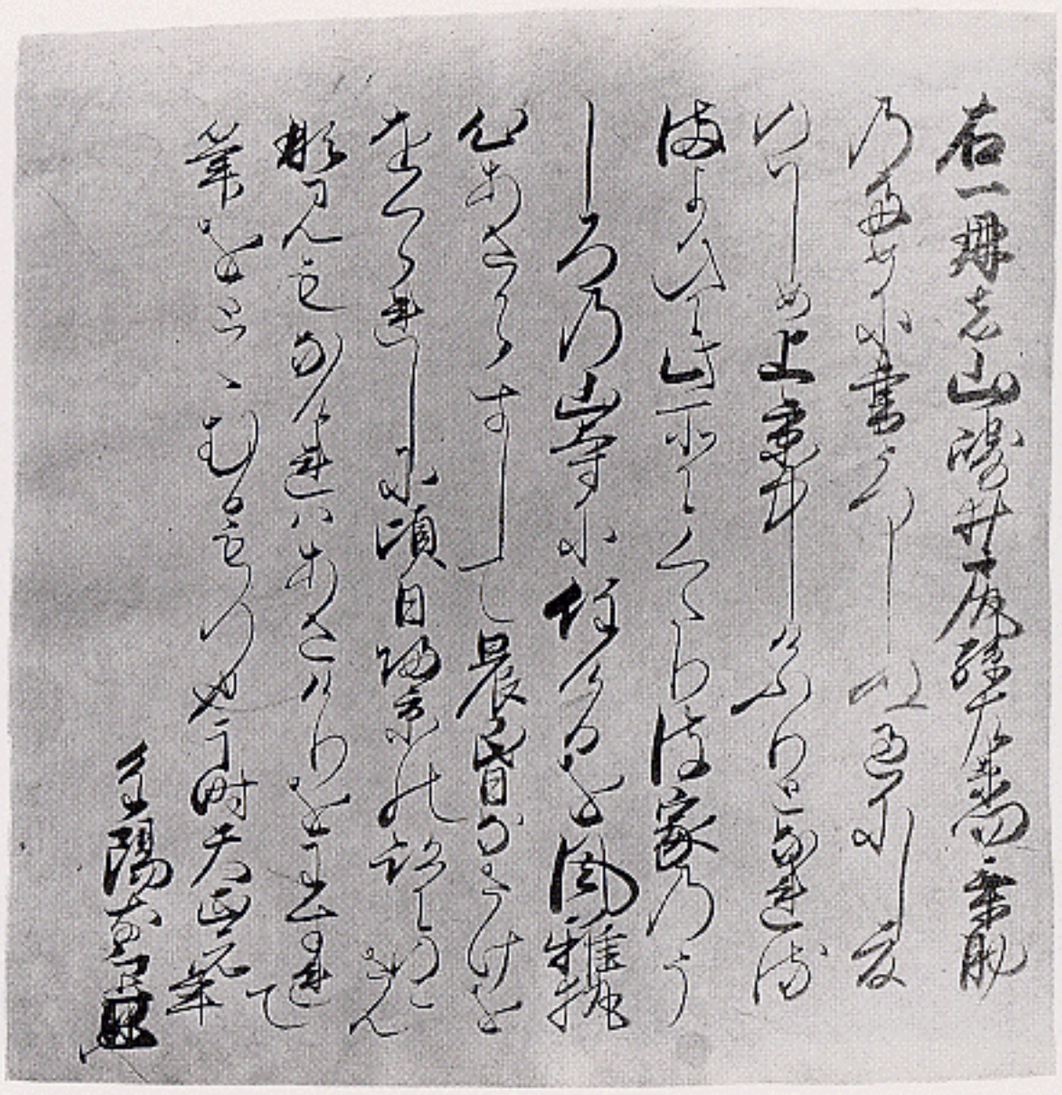
29　〔後鳥羽院御自歌合〕



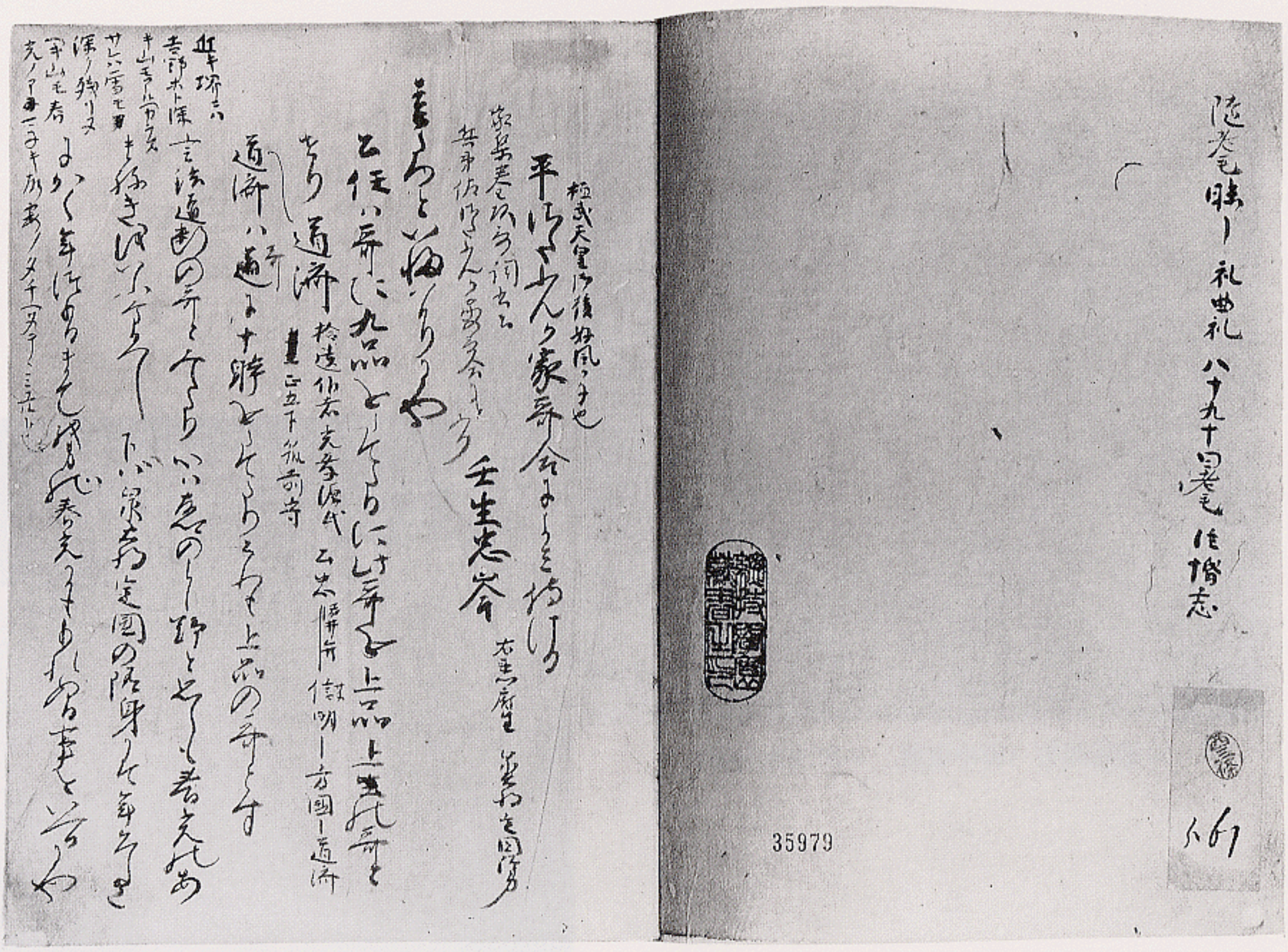
34　万葉代匠記序（契沖自筆）



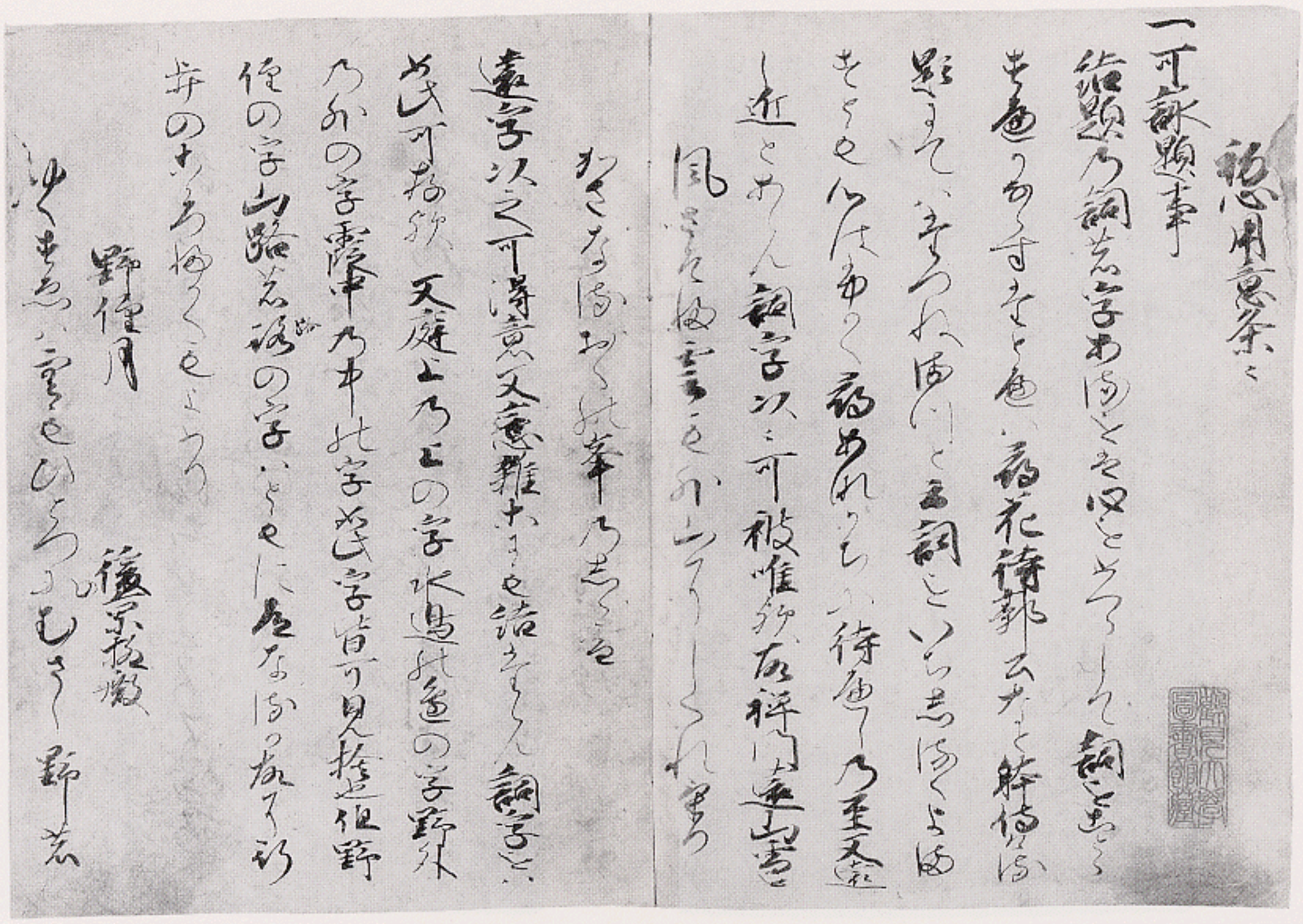
35　万葉集問答（田中道麿、本居宣長自筆）



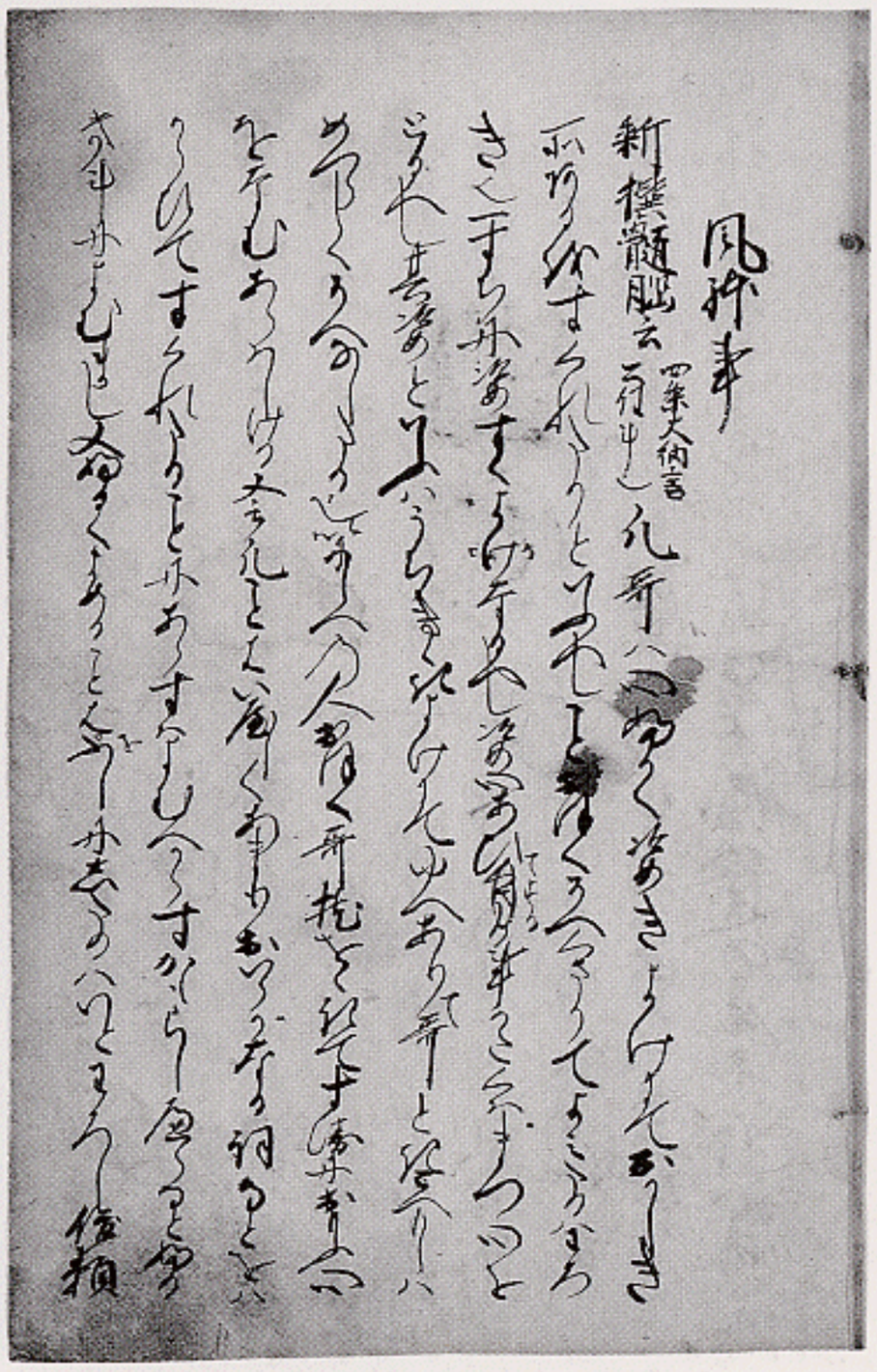
36　詠歌大概（紹巴筆）



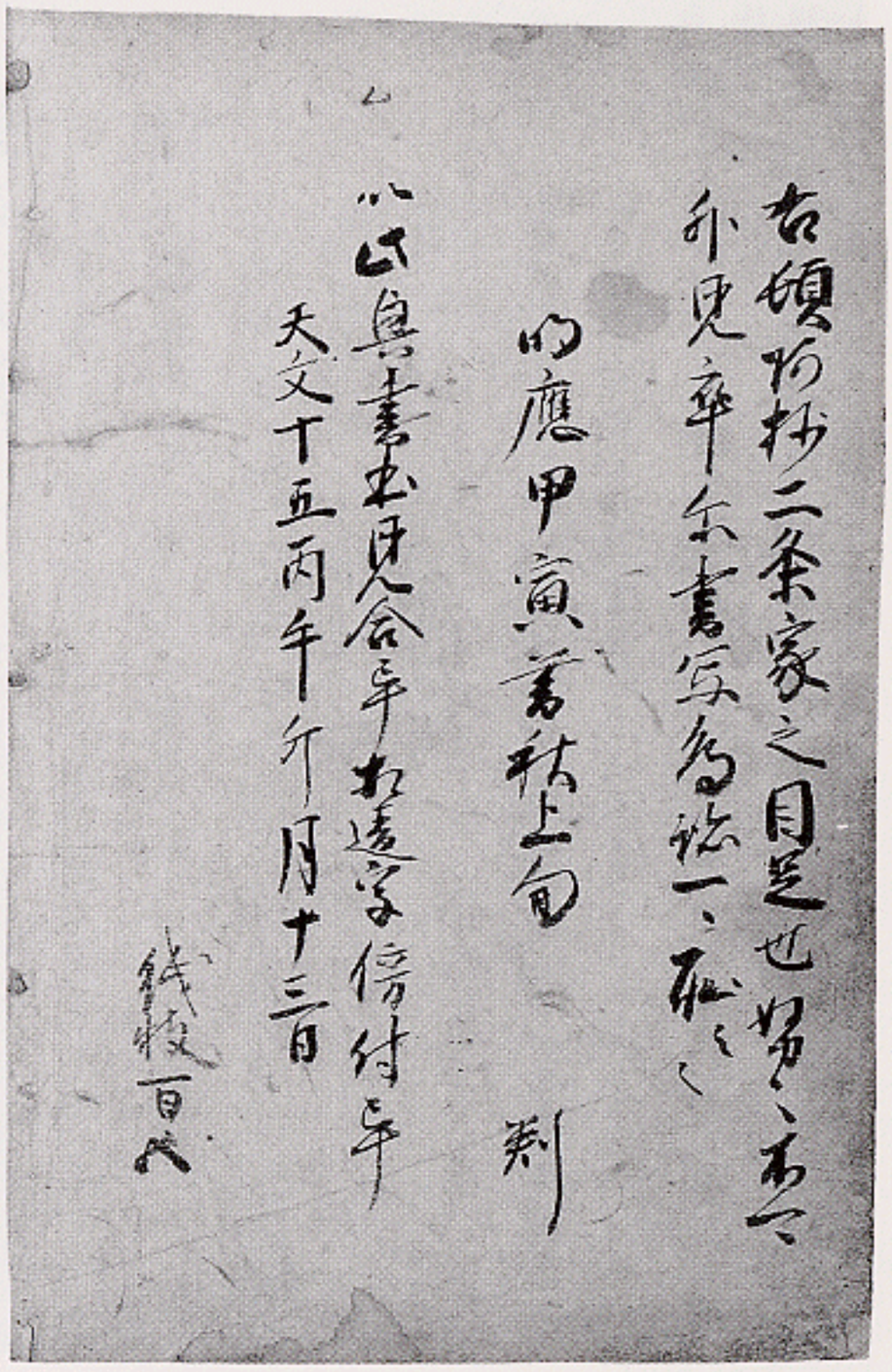
37　〔秀歌之体大略注〕（伝三条西実隆筆）



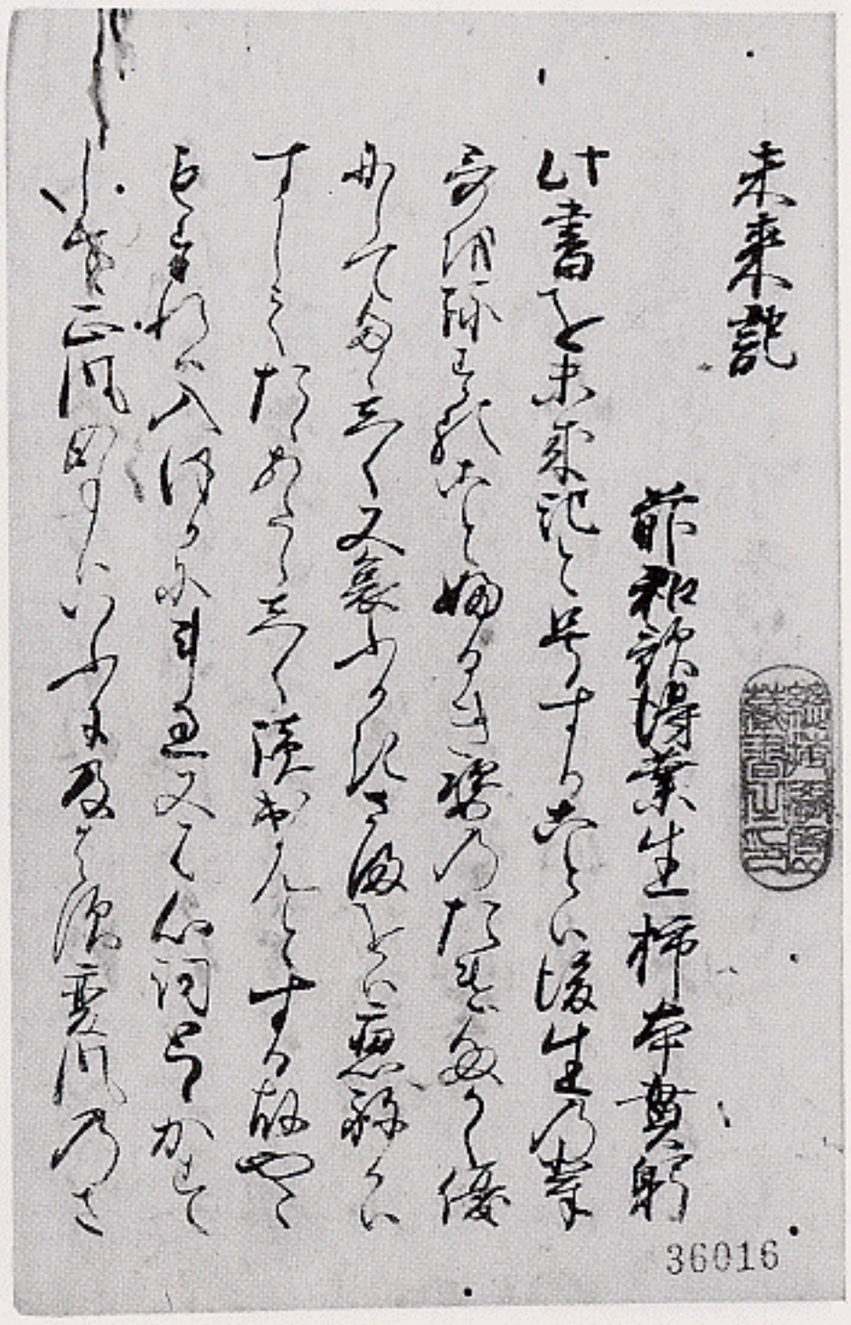
38　初心用意条々（伝二条為重筆）



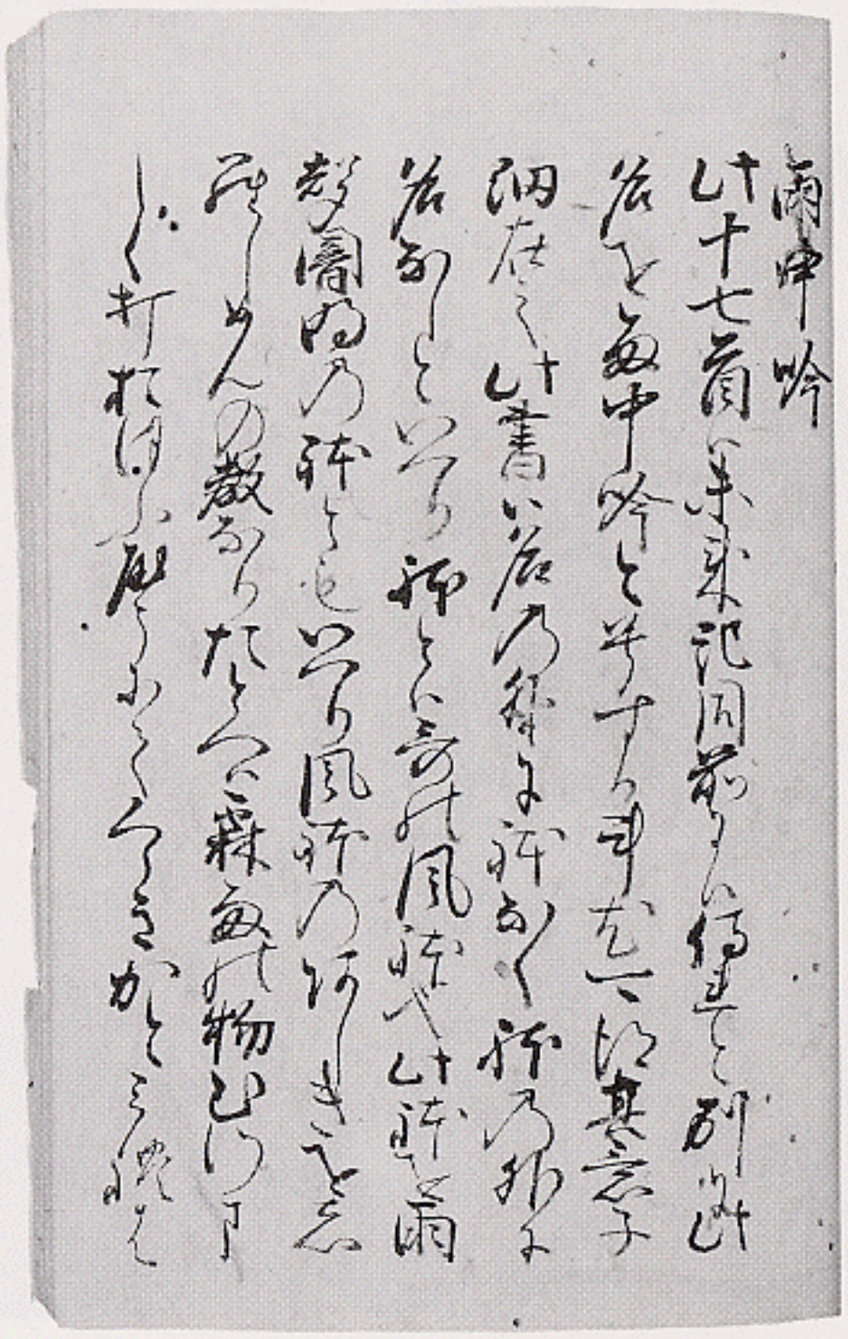
39-1　井蛙抄



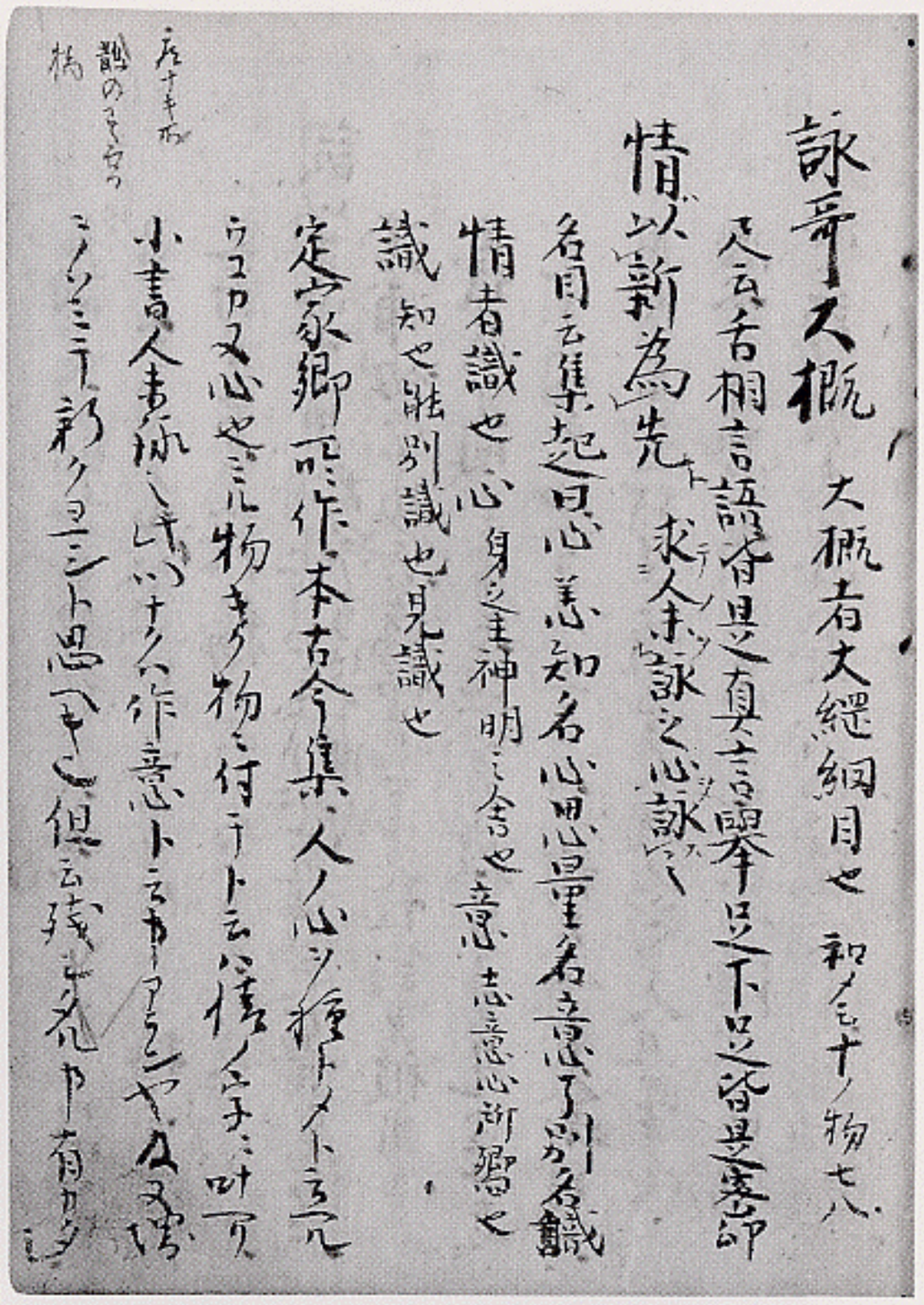
39-2　井蛙抄



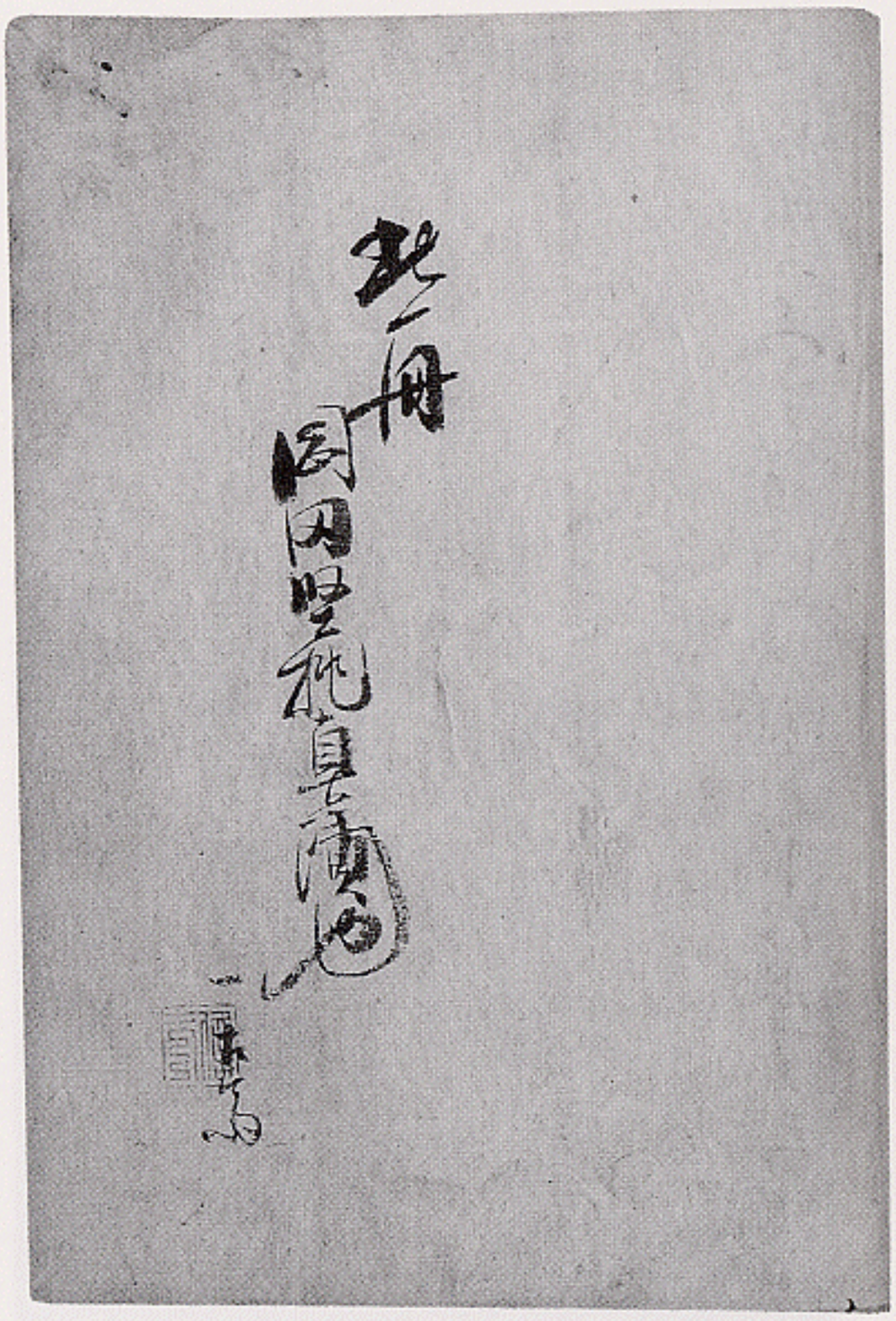
40-1 〔未来記雨中吟抄〕(山科言経筆)



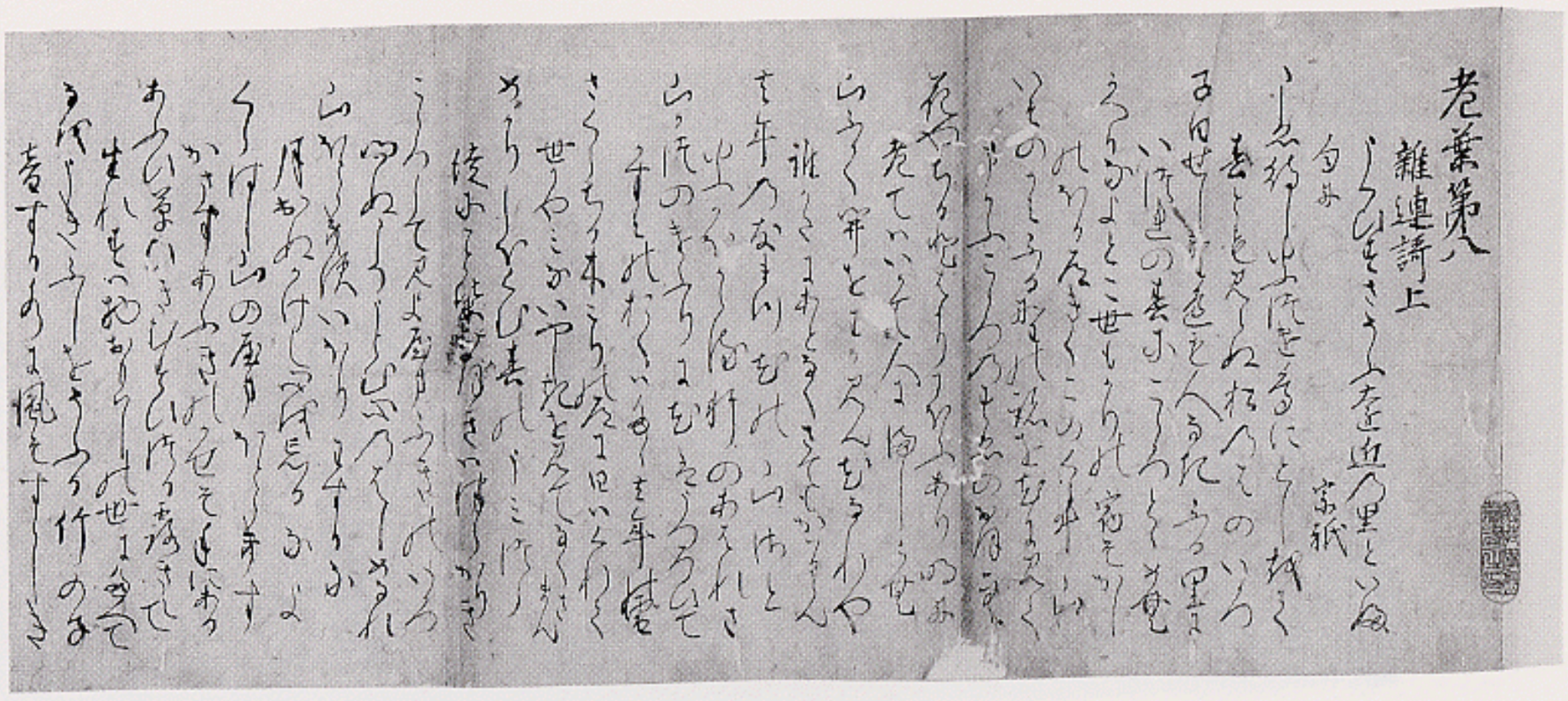
40-2 〔未来記雨中吟抄〕

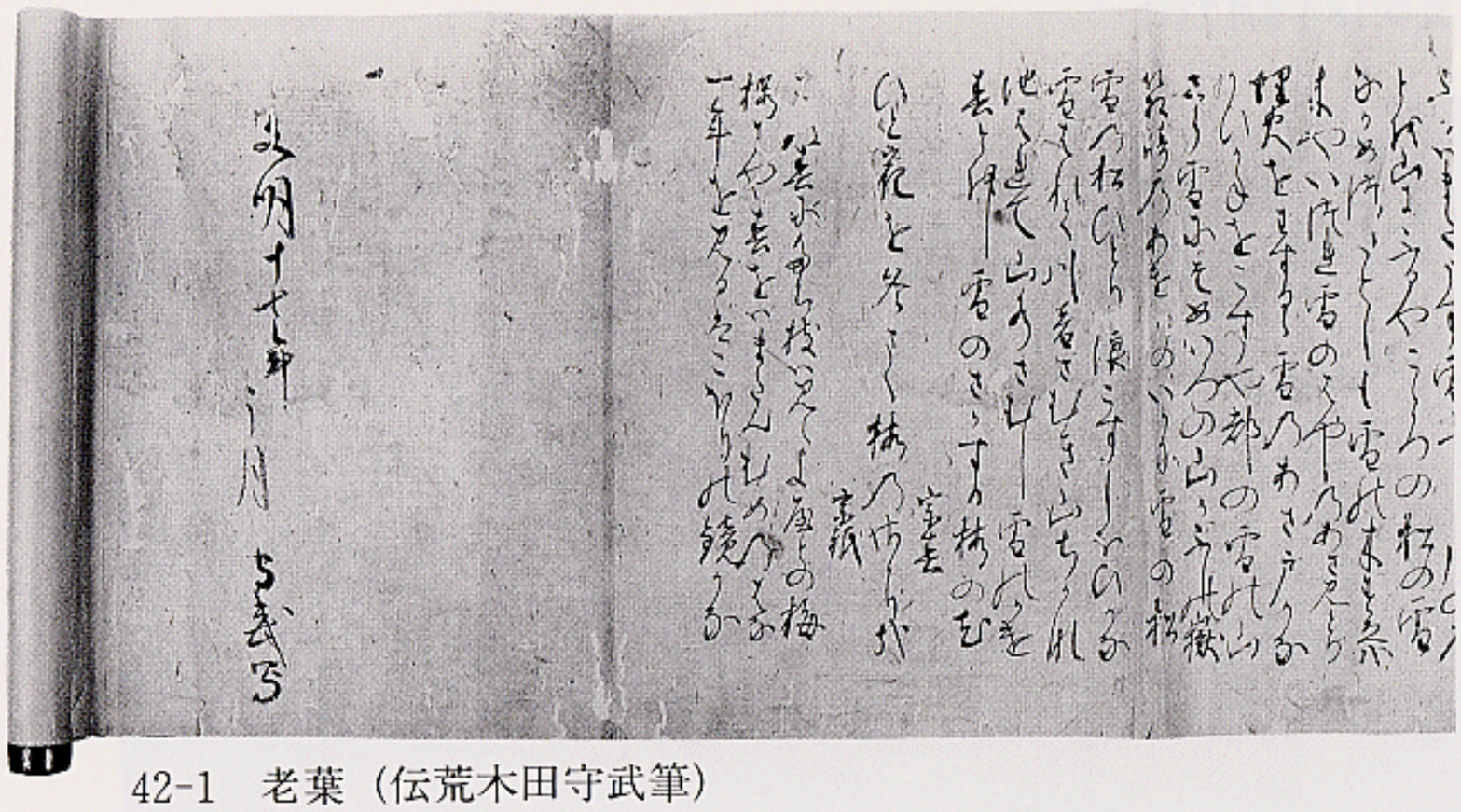


41-1 詠歌大概〔聞書〕(岡田賢桃筆)

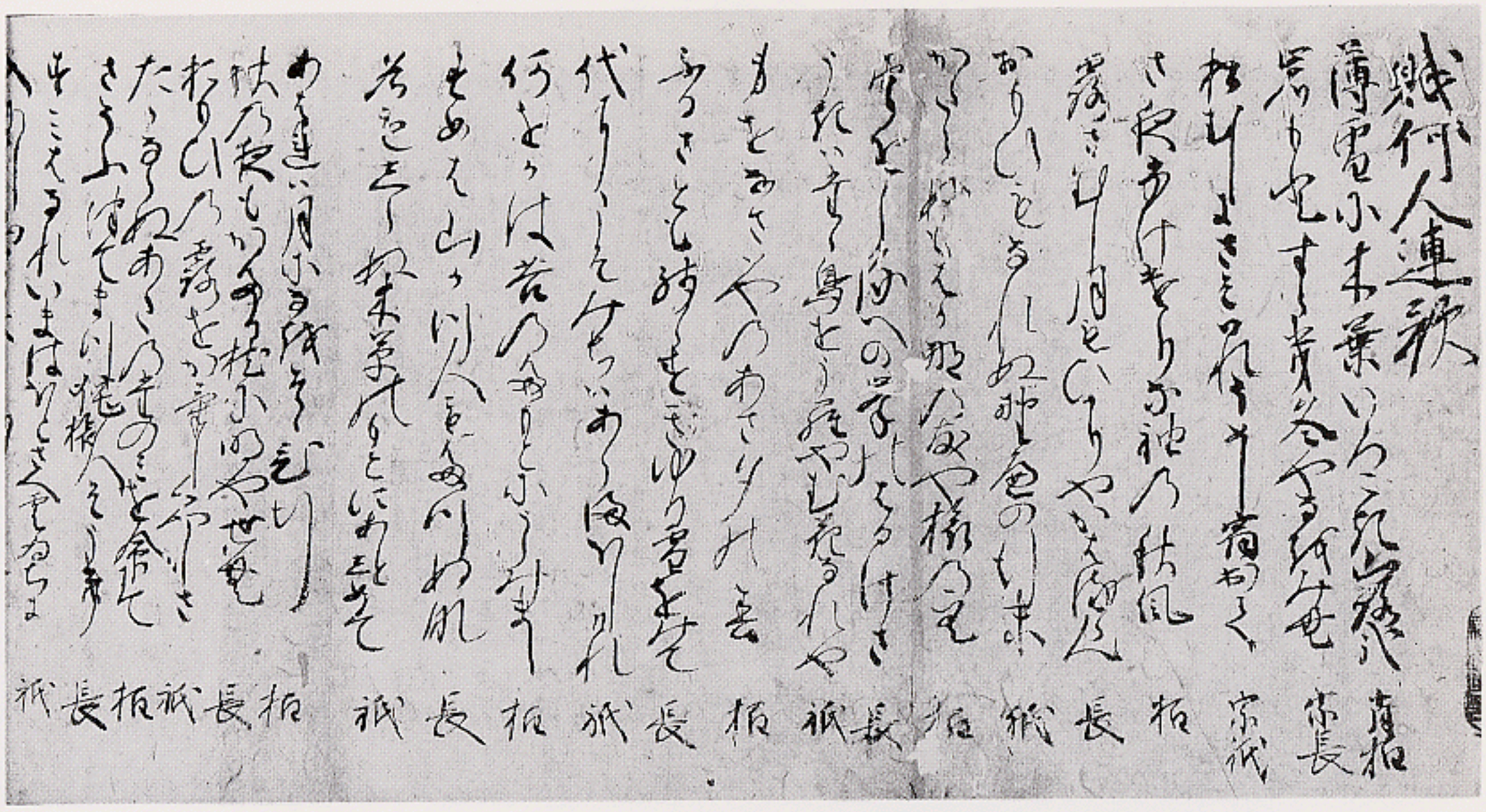


41-2 詠歌大概〔聞書〕

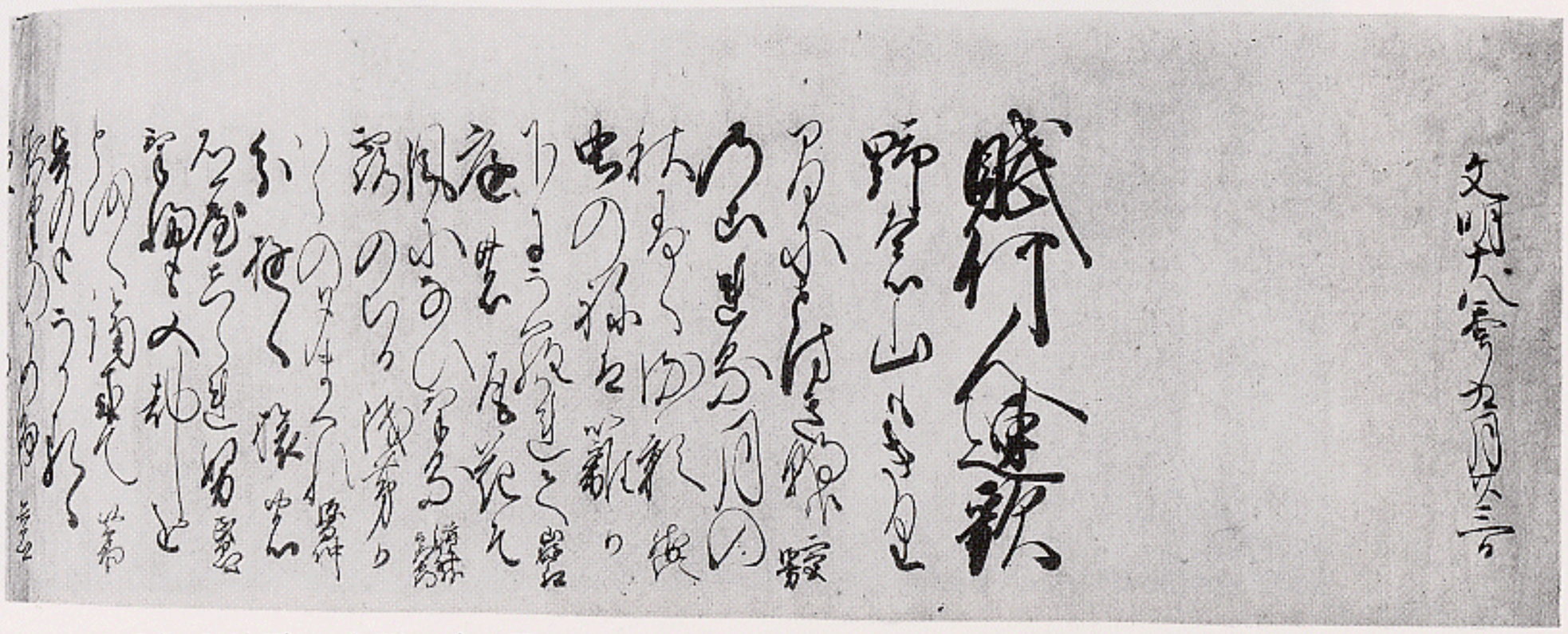




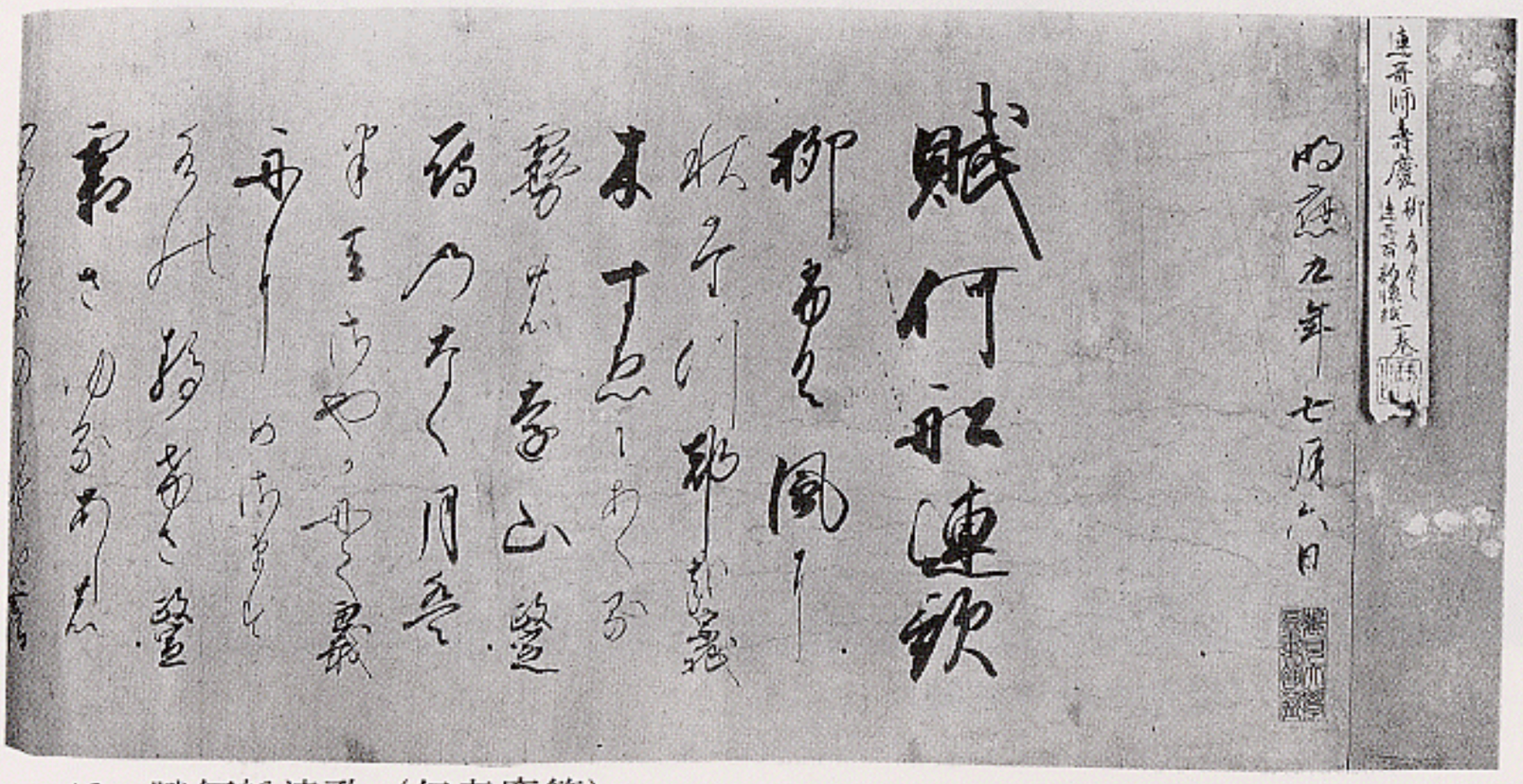
42-1　老葉（伝荒木田守武筆）



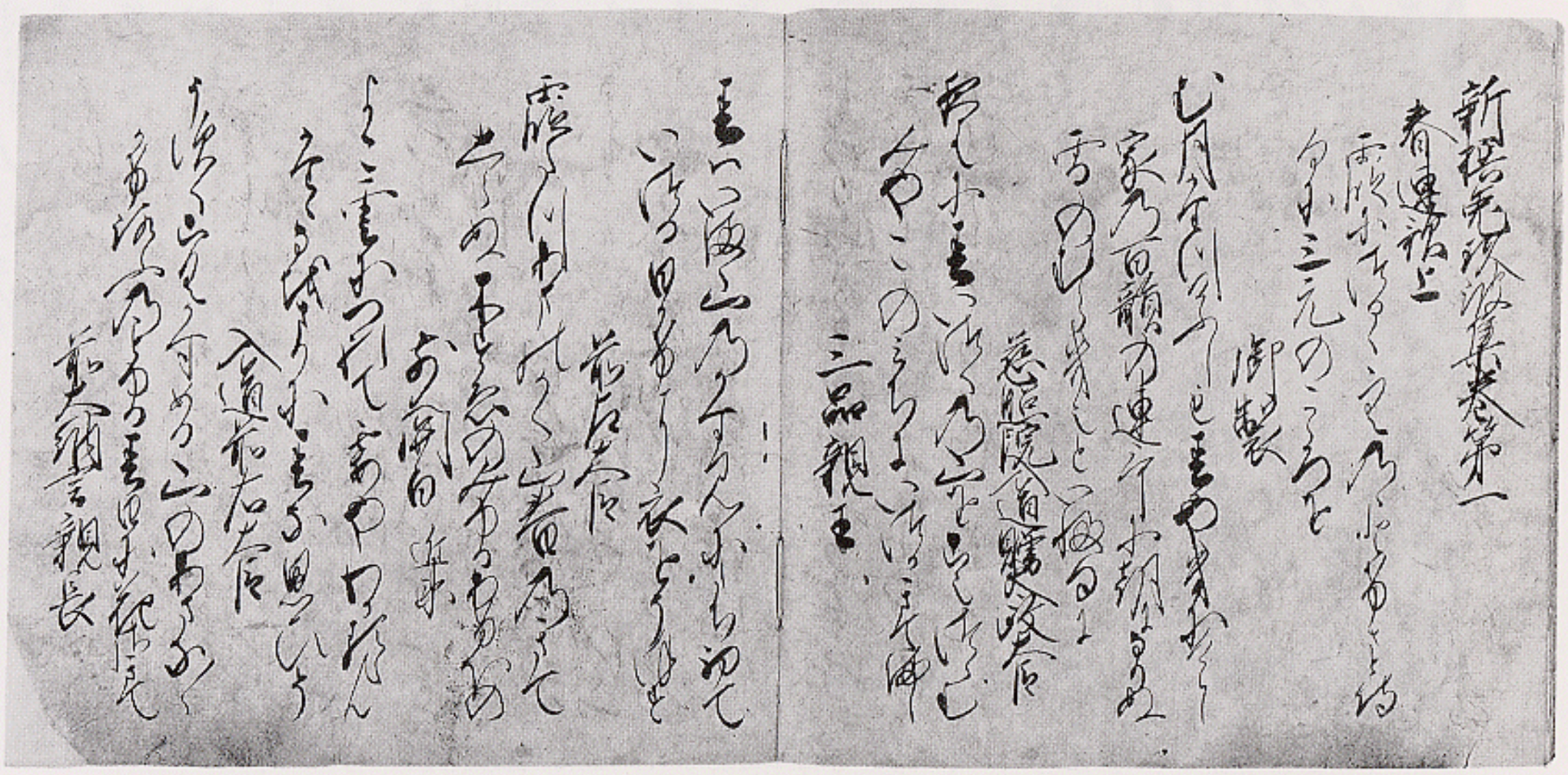
42-2　湯山三吟



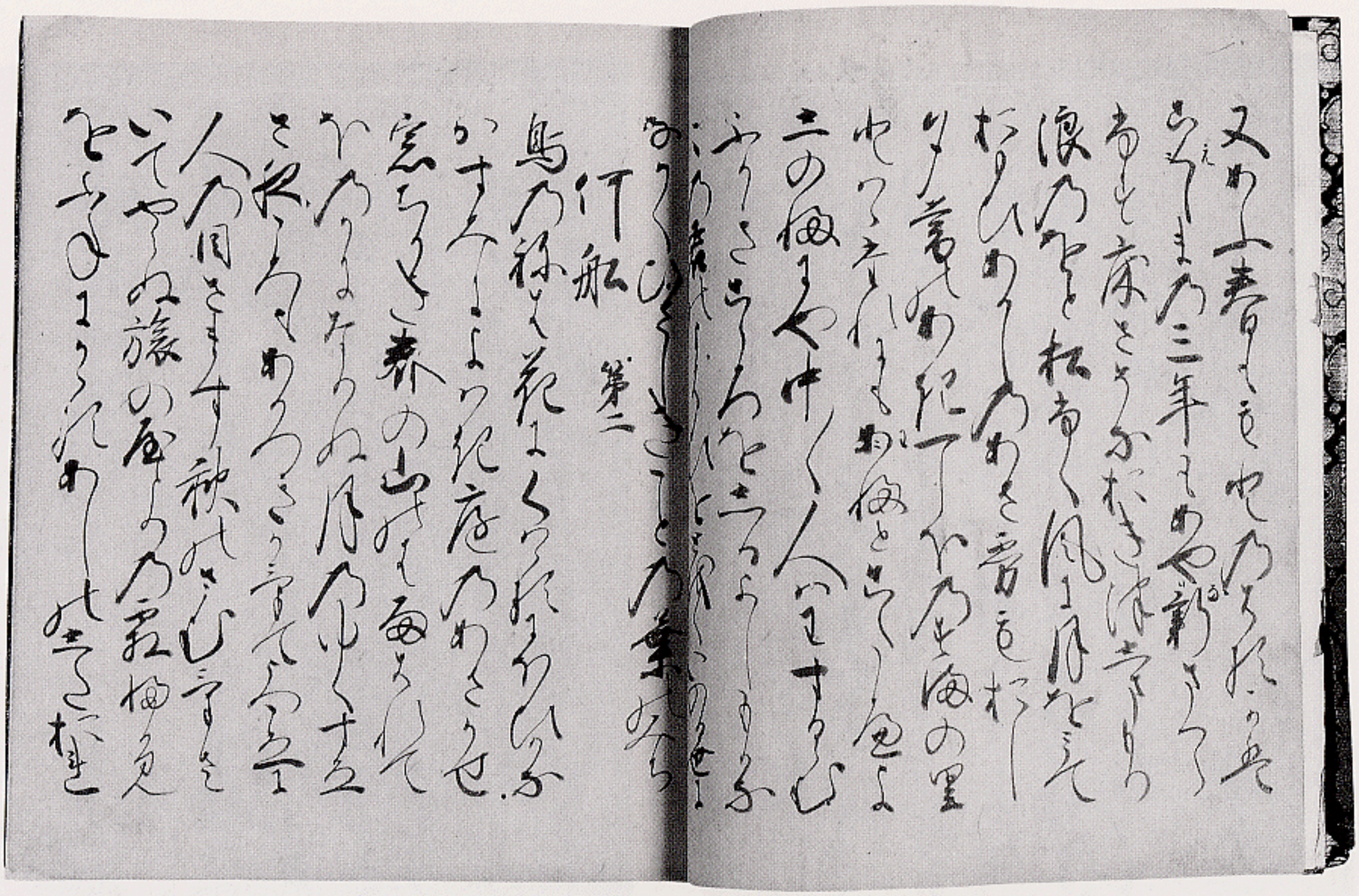
43　賦何人連歌　文明18年9月23日



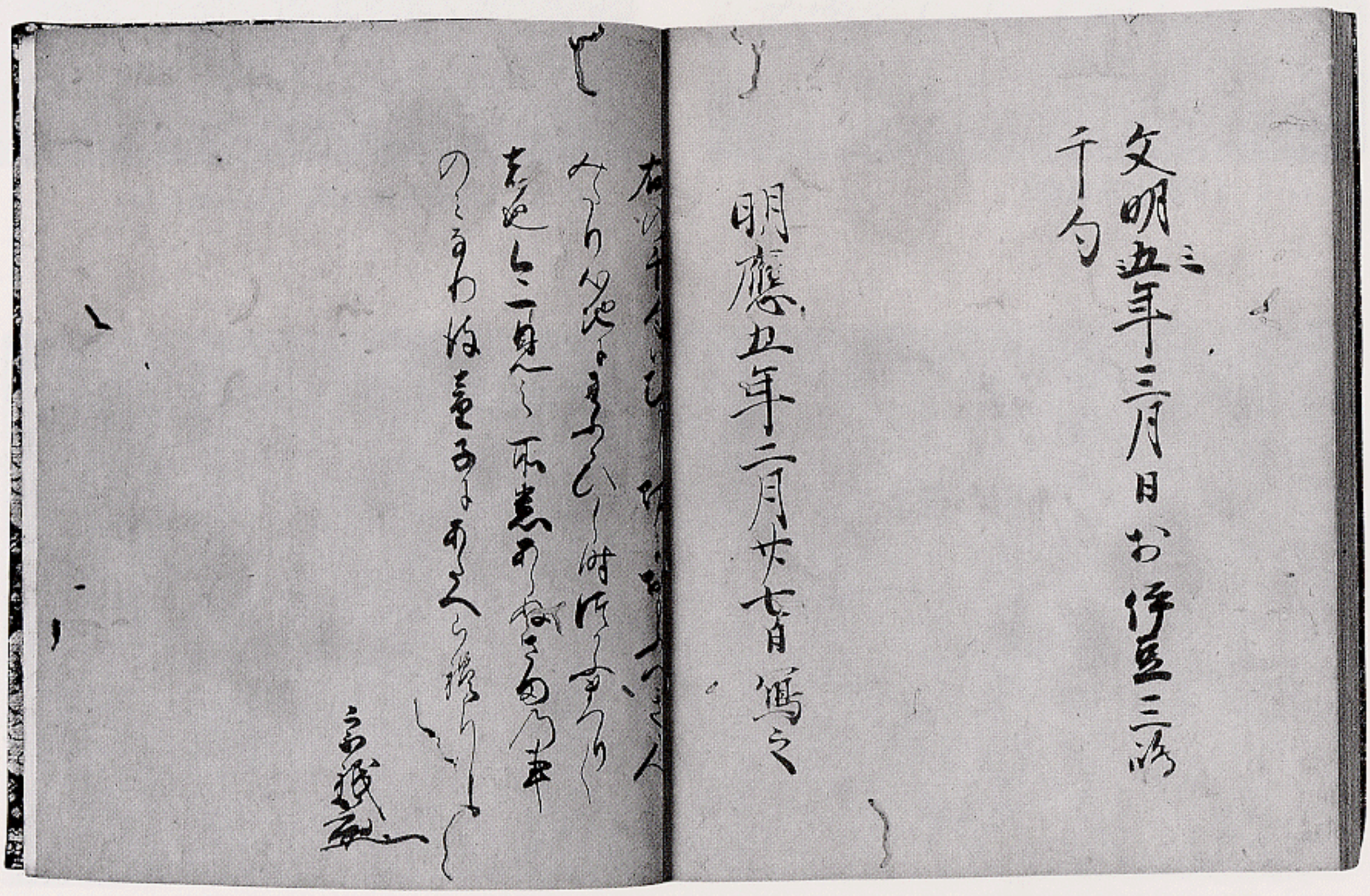
46　賦何船連歌（伝寿慶筆）



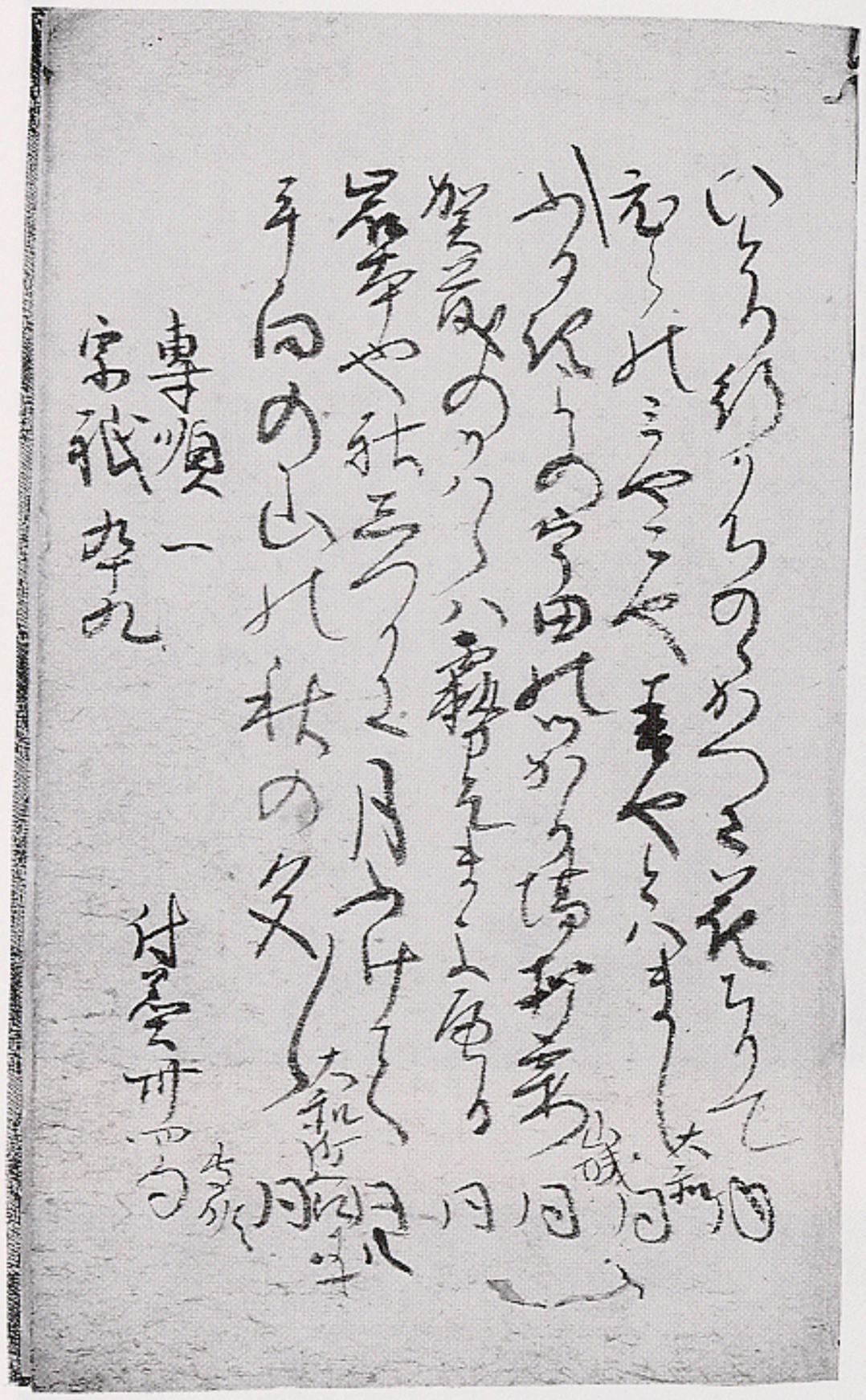
44　新撰菟玖波集（伝飛鳥井雅康、大内政弘筆）



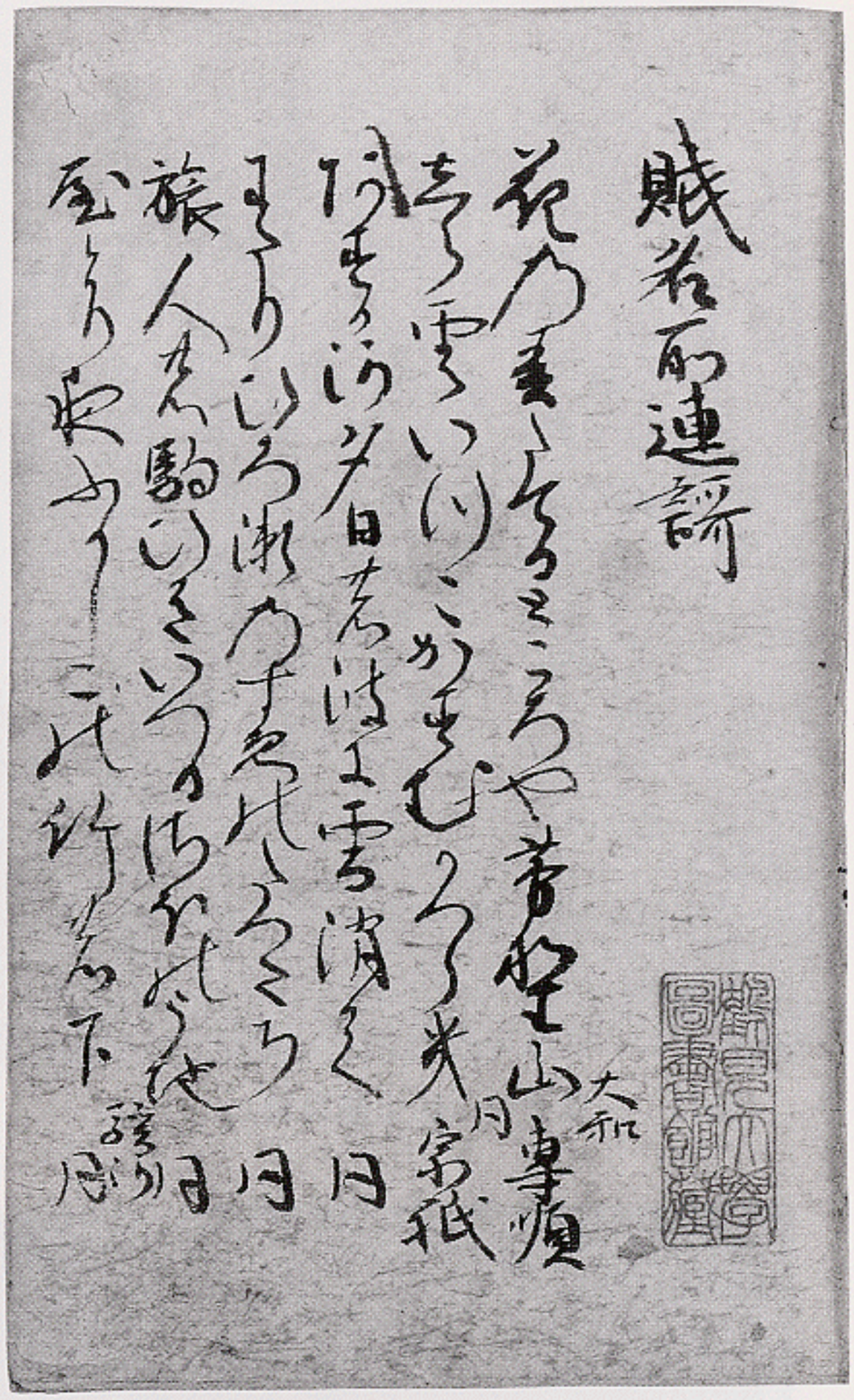
45-1　三島千句（伝宗祇自筆）



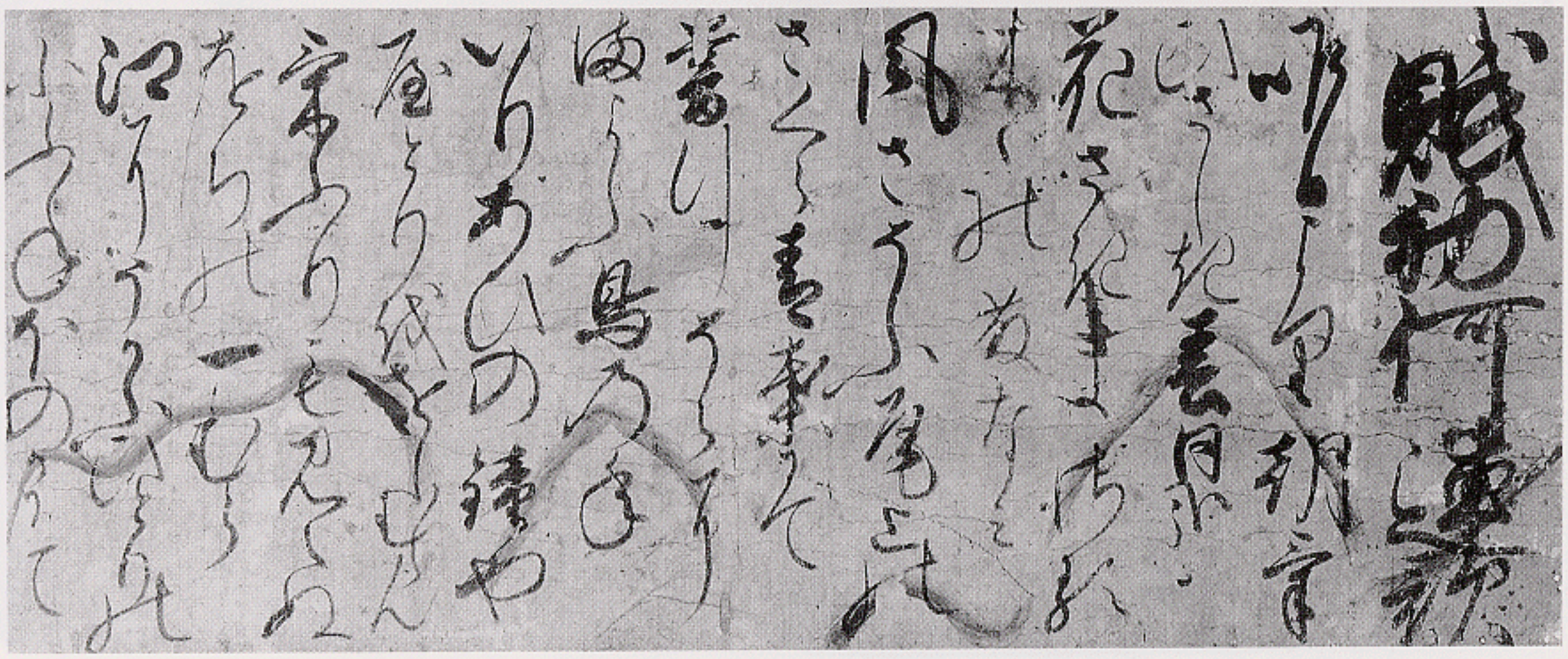
45-2　三島千句



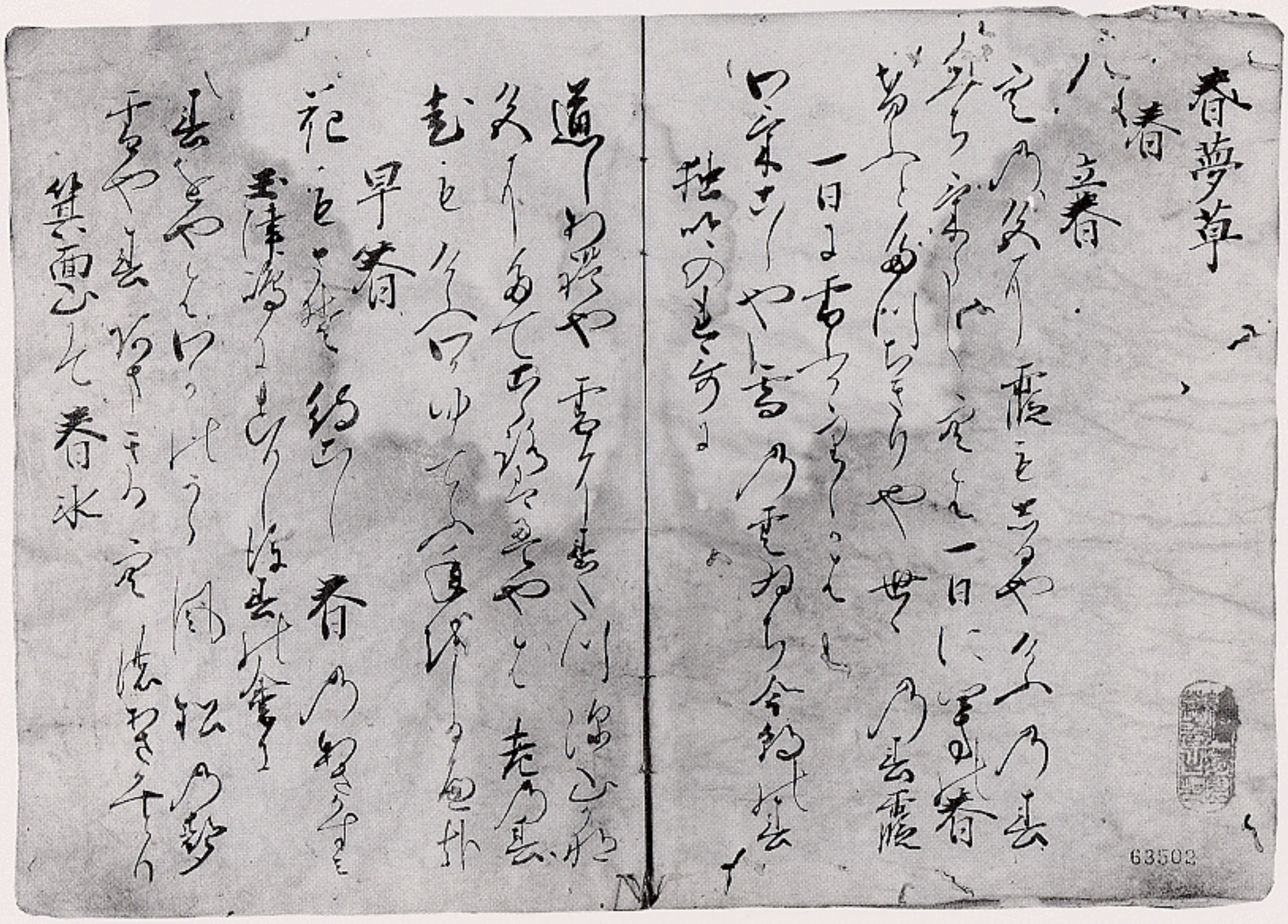
47-2 〔宗祇名所百韻〕



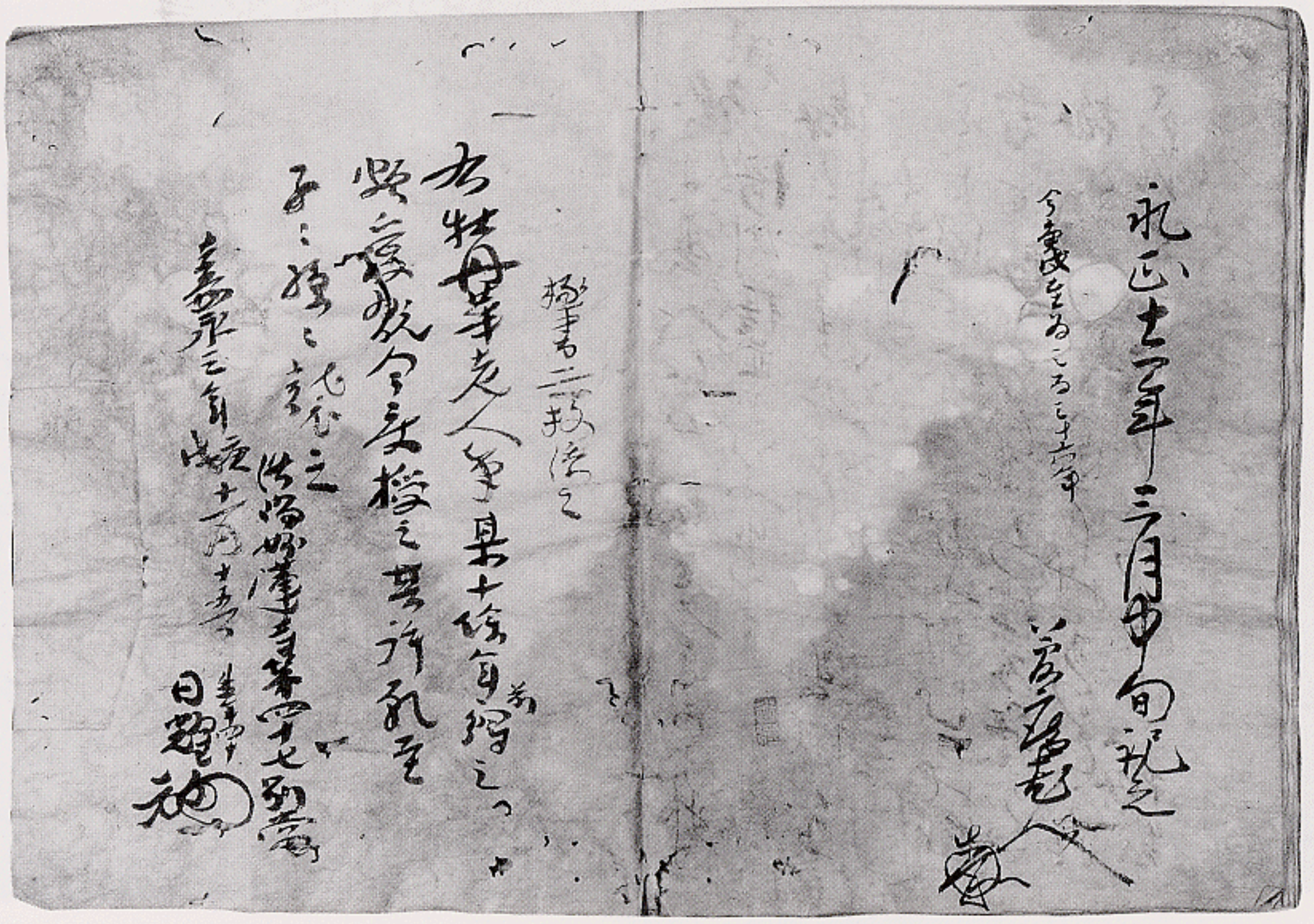
47-1 〔宗祇名所百韻〕(伝宗祇自筆)



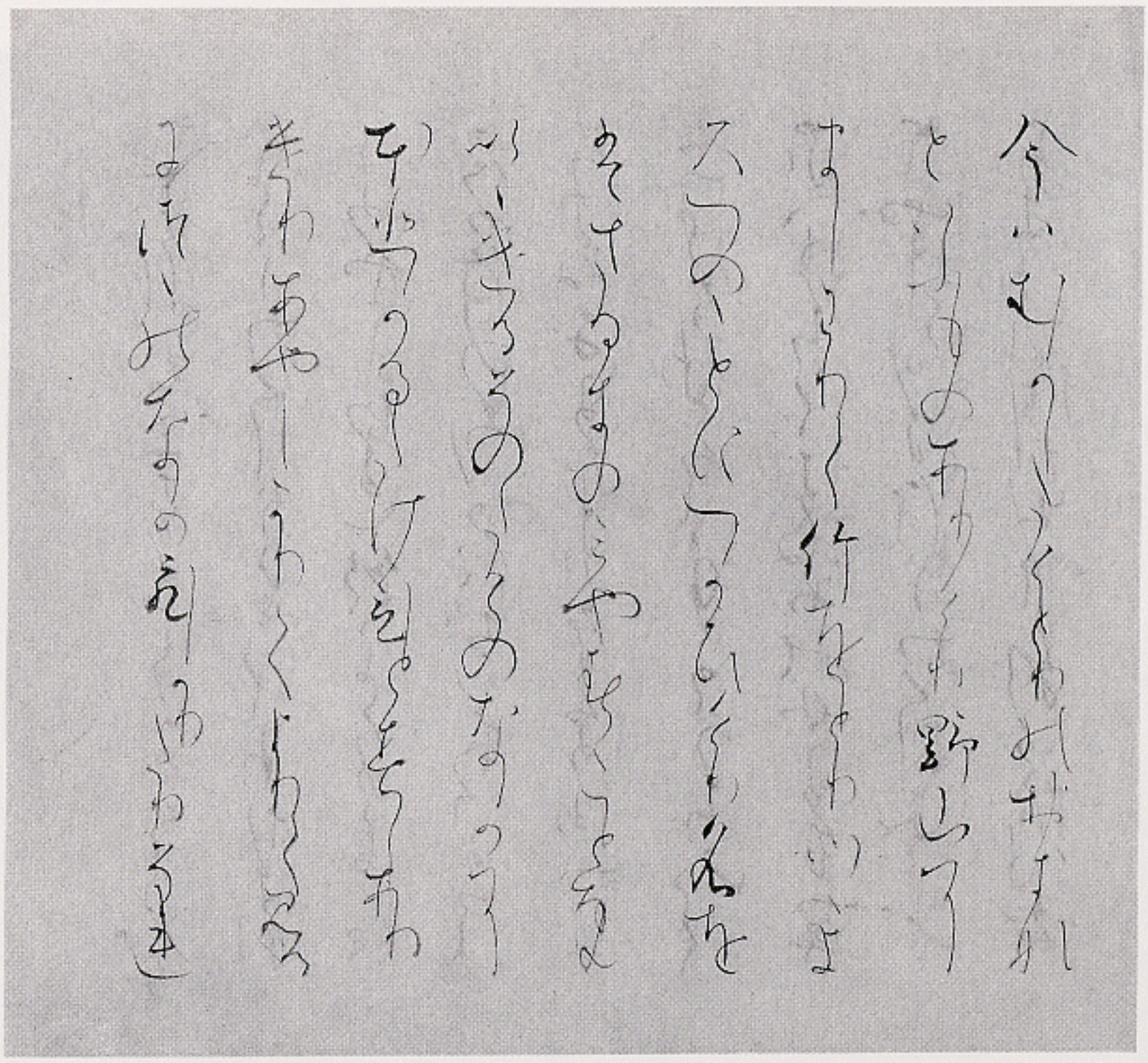
49 〔聖廟法楽千句〕断簡



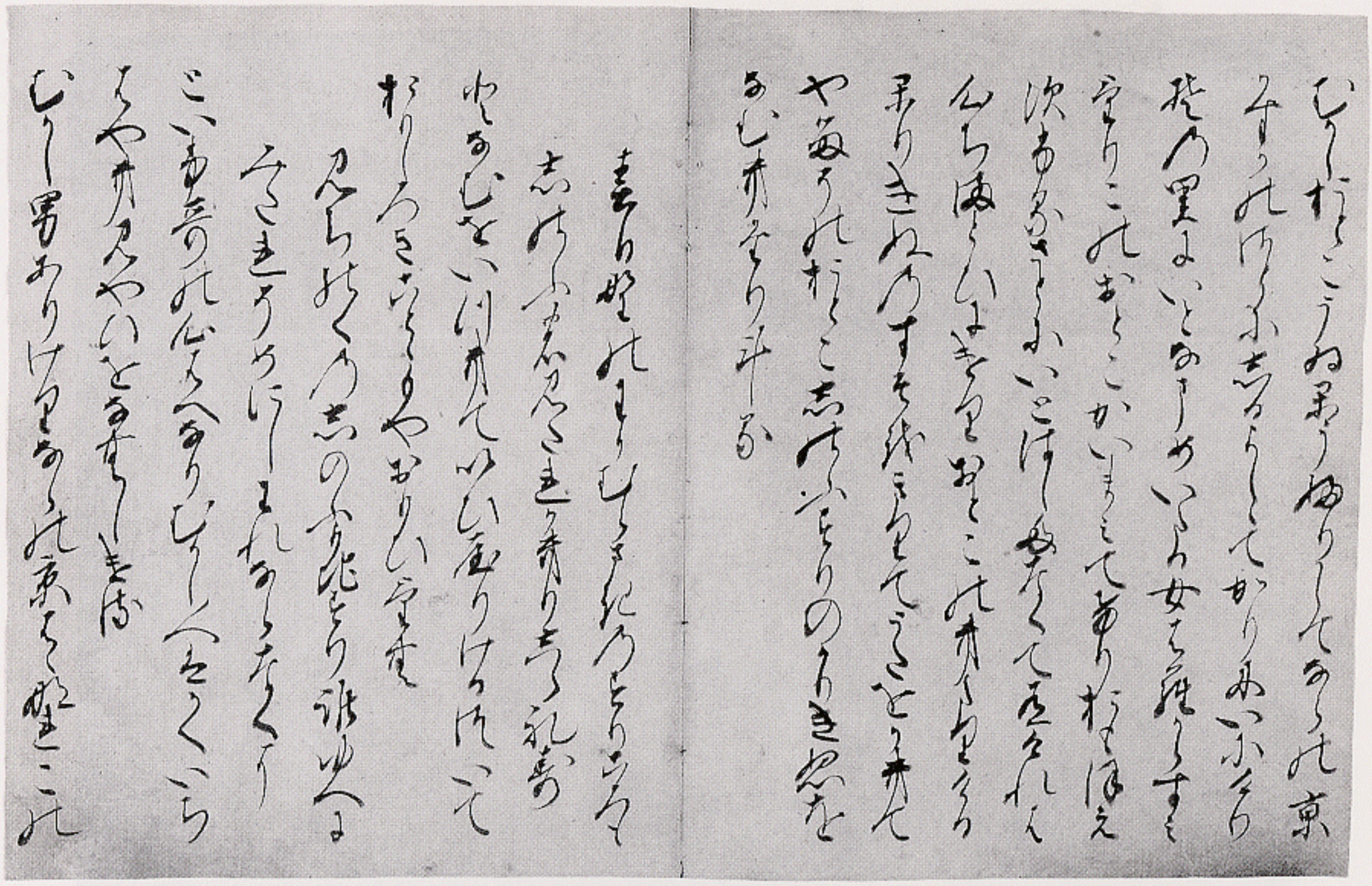
48-1　春夢草（肖柏自筆）



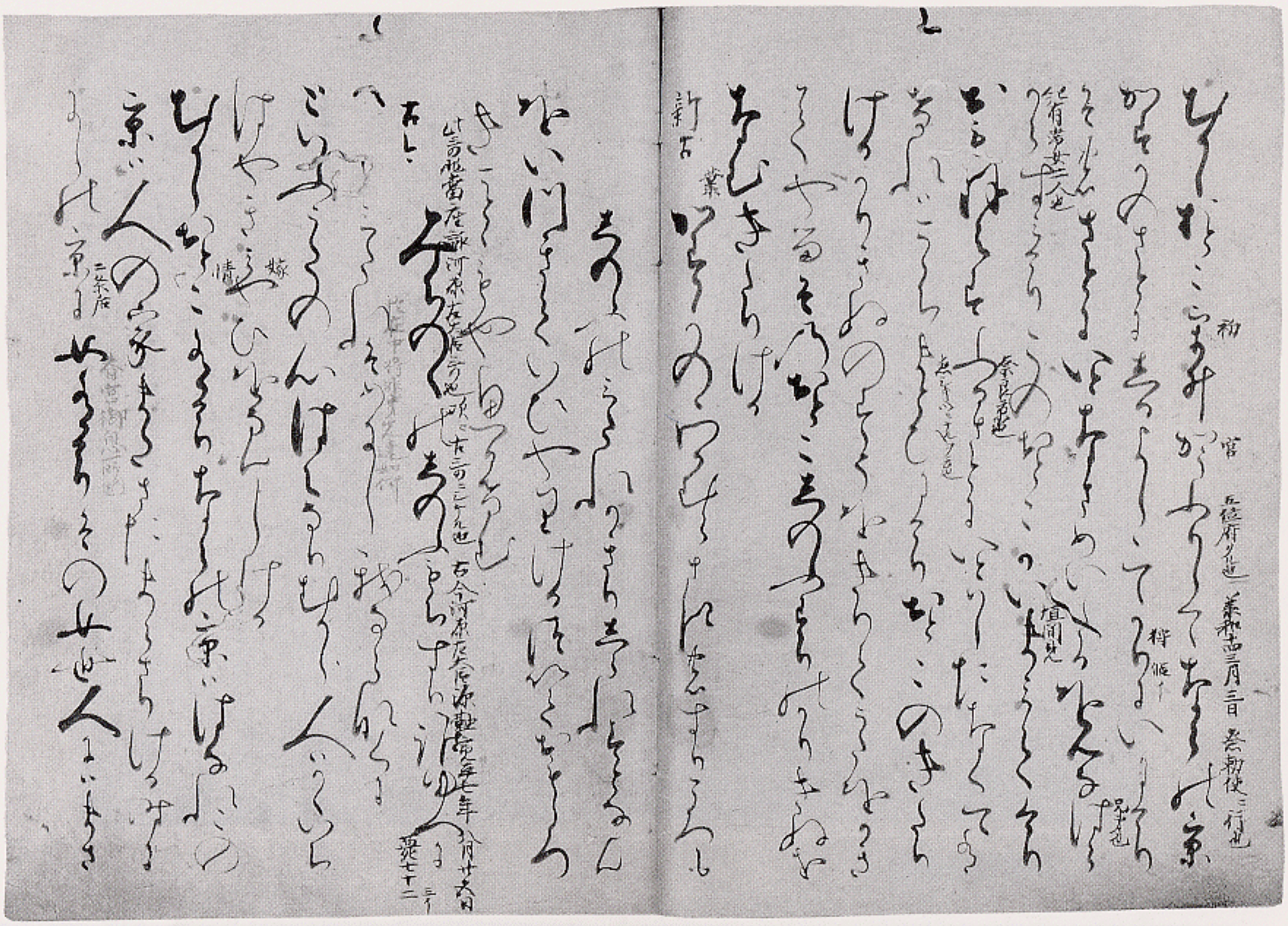
48-2　春夢草



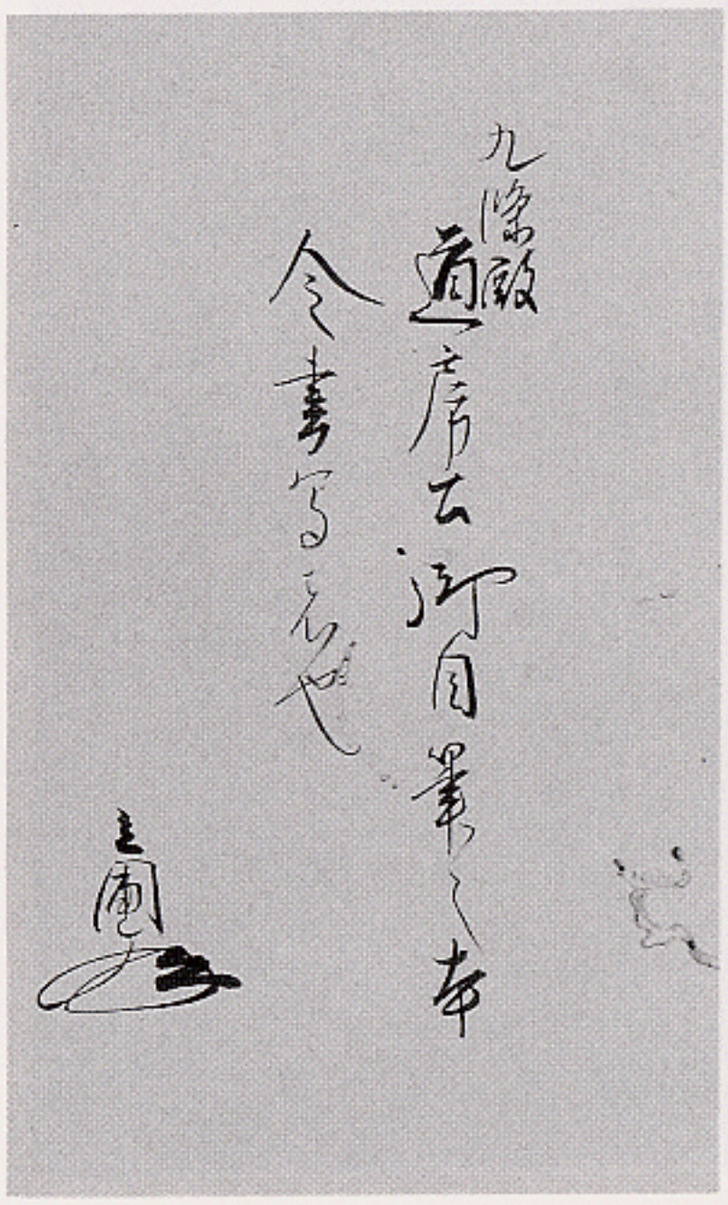
50　竹取物語



52　伊勢物語（伝姉小路済継筆）



56-1　伊勢物語（野々口立圃筆）

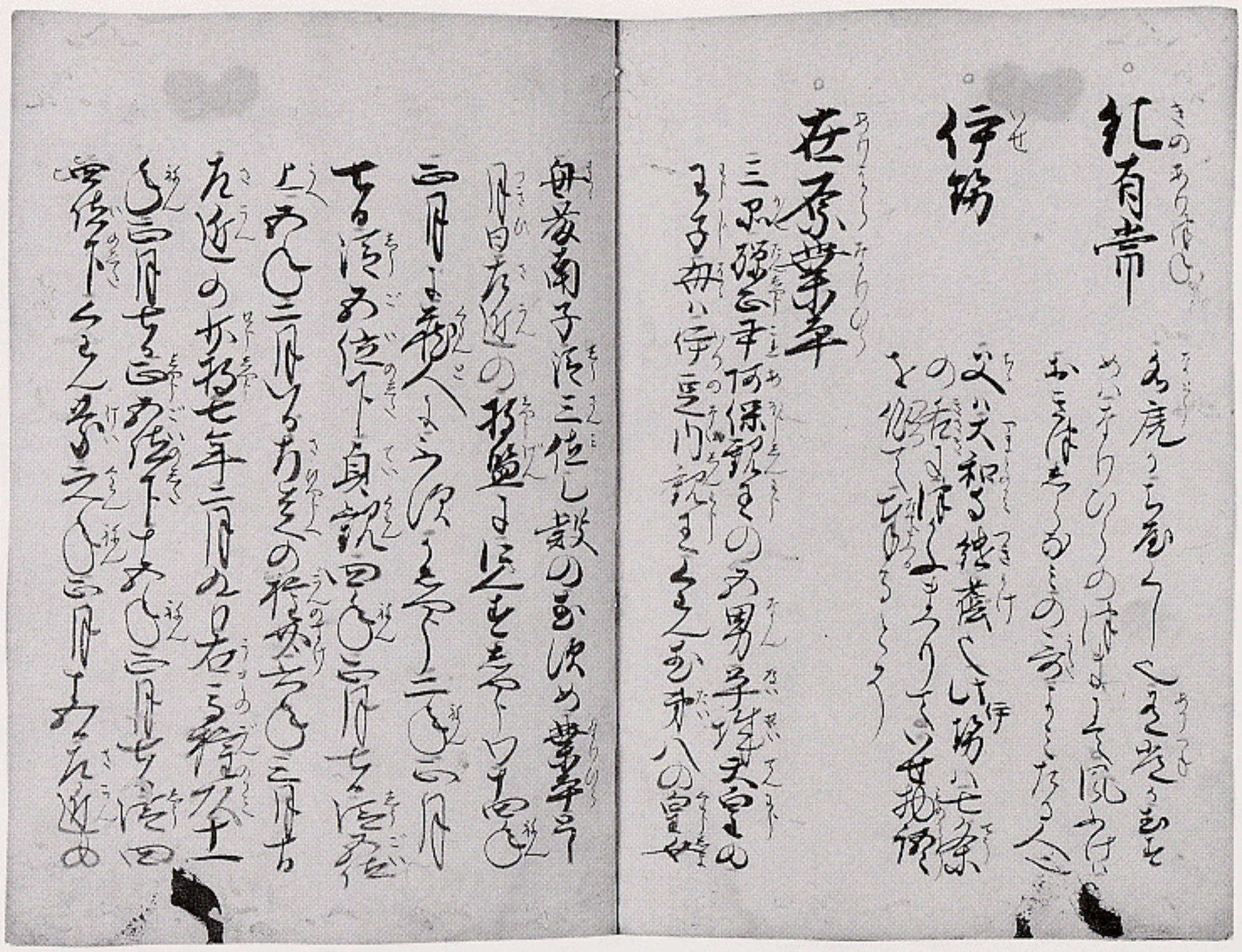


56-2　伊勢物語

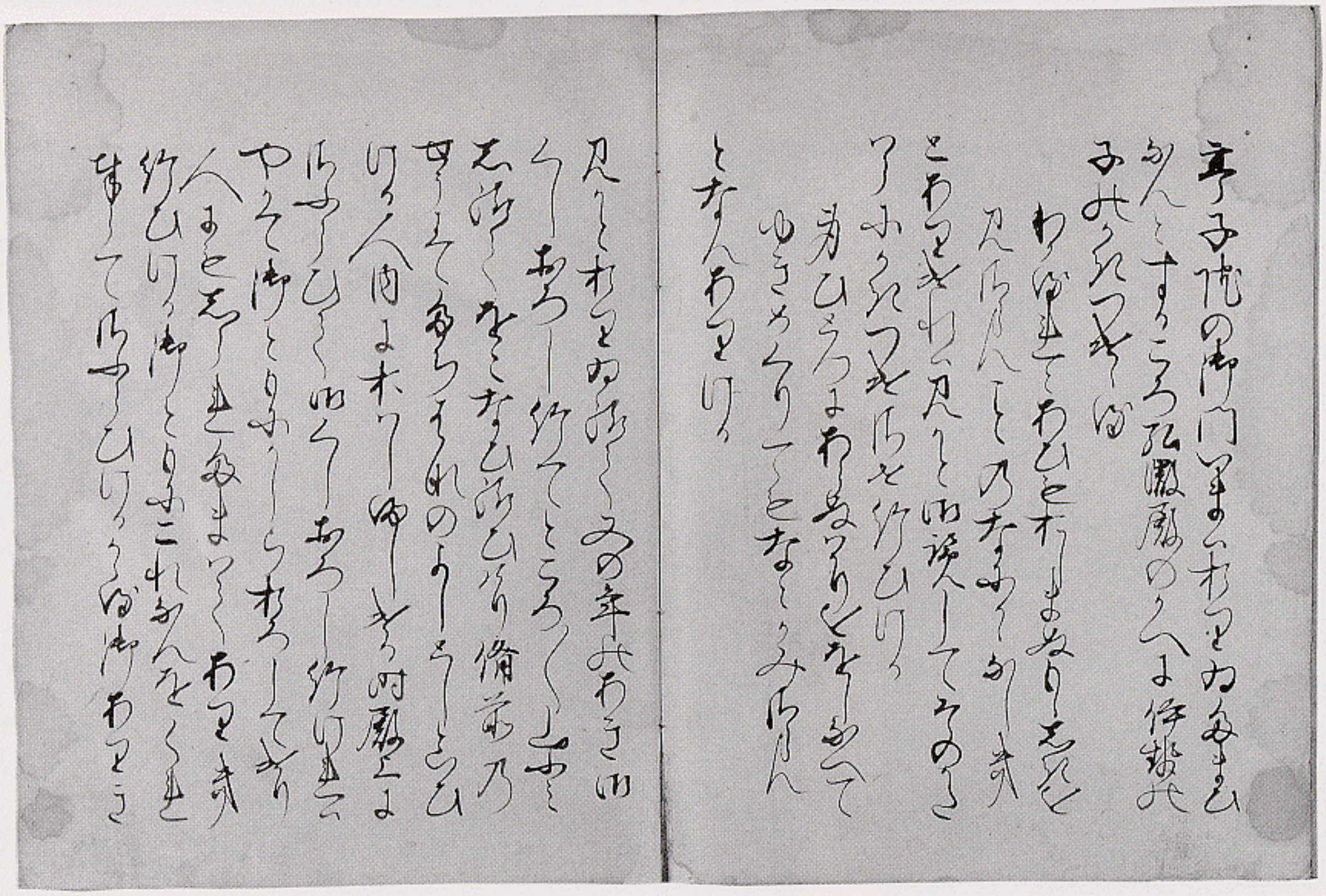
紀有常

伊勢

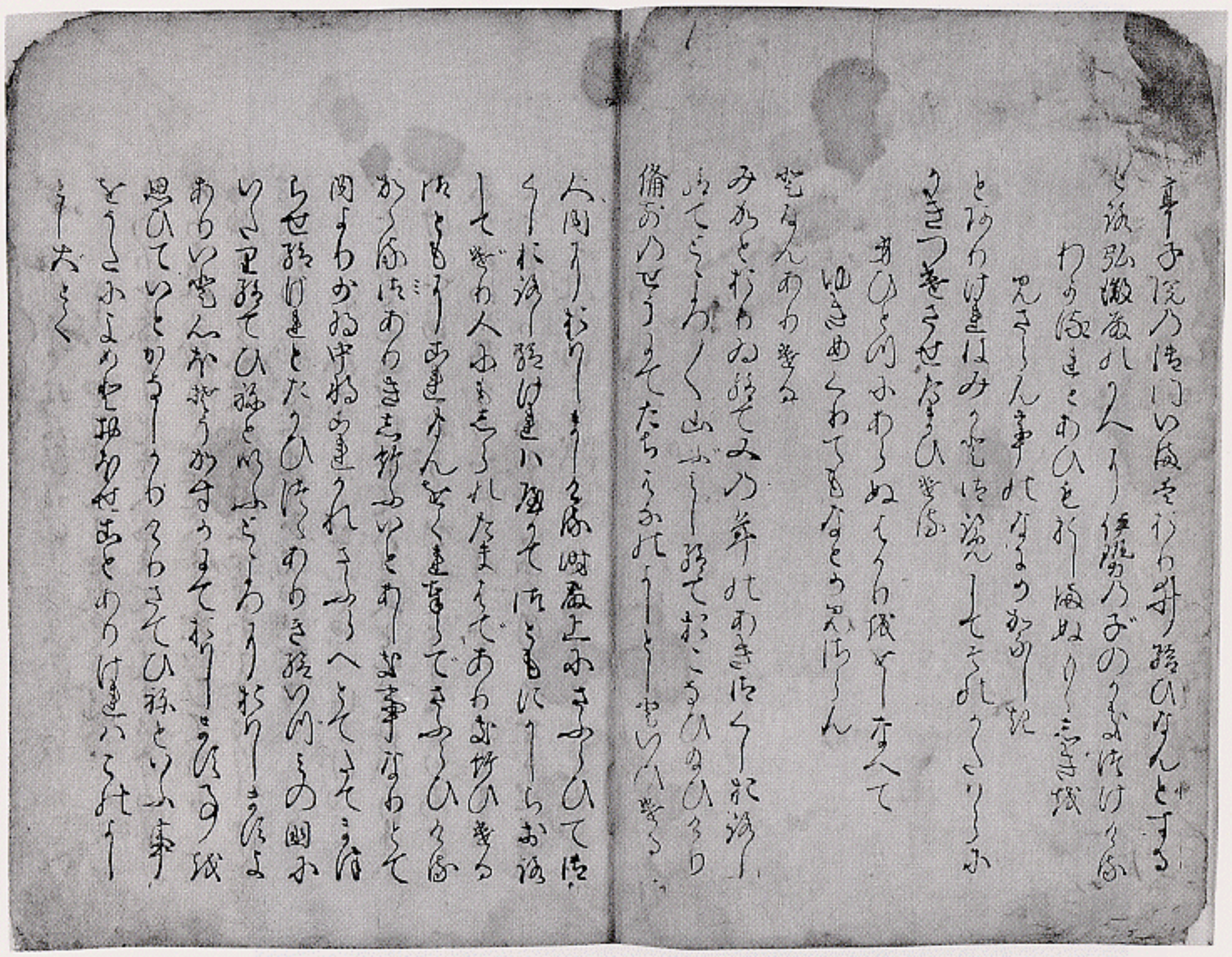
在原業平



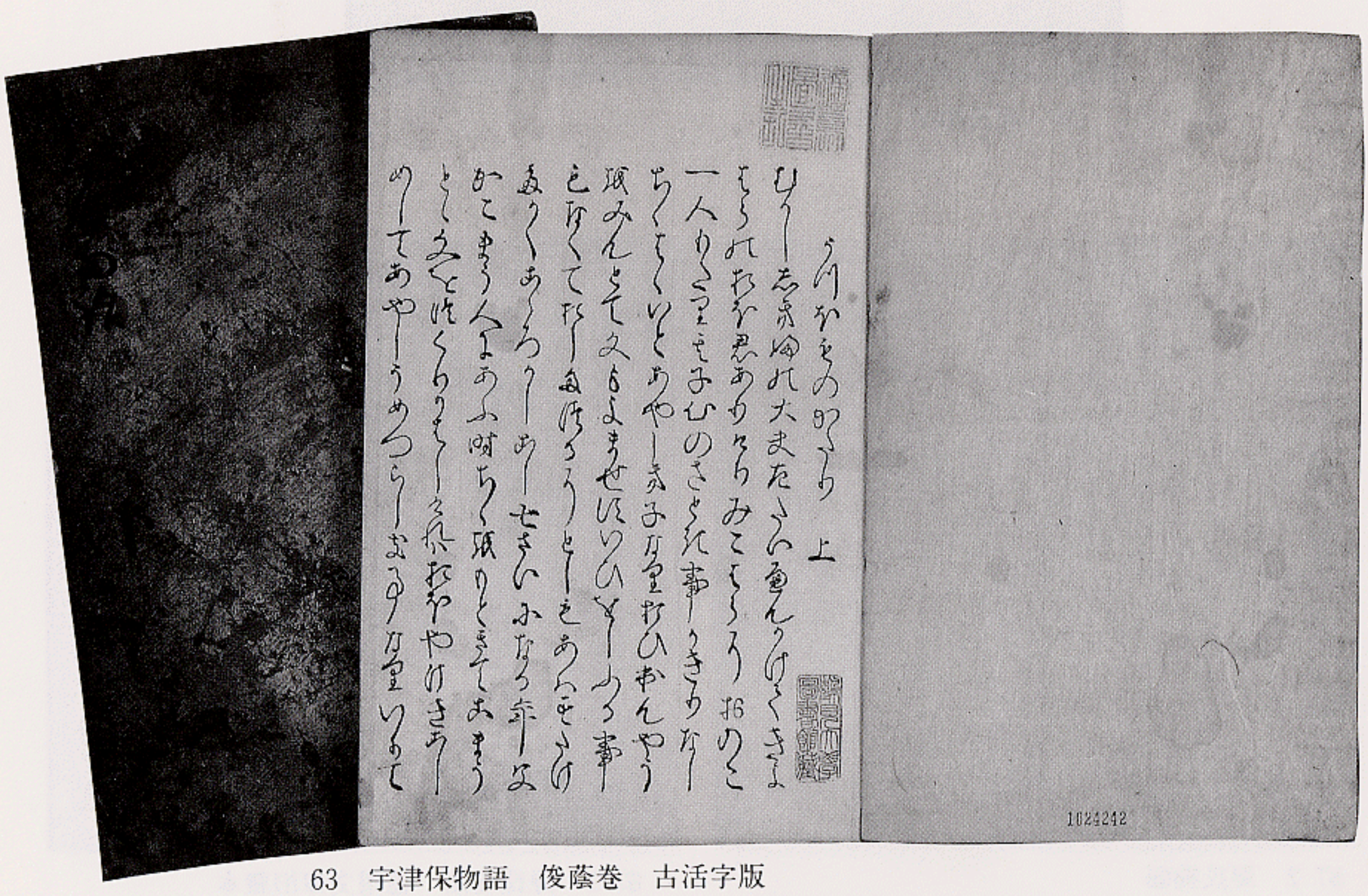
59　伊勢物語系図



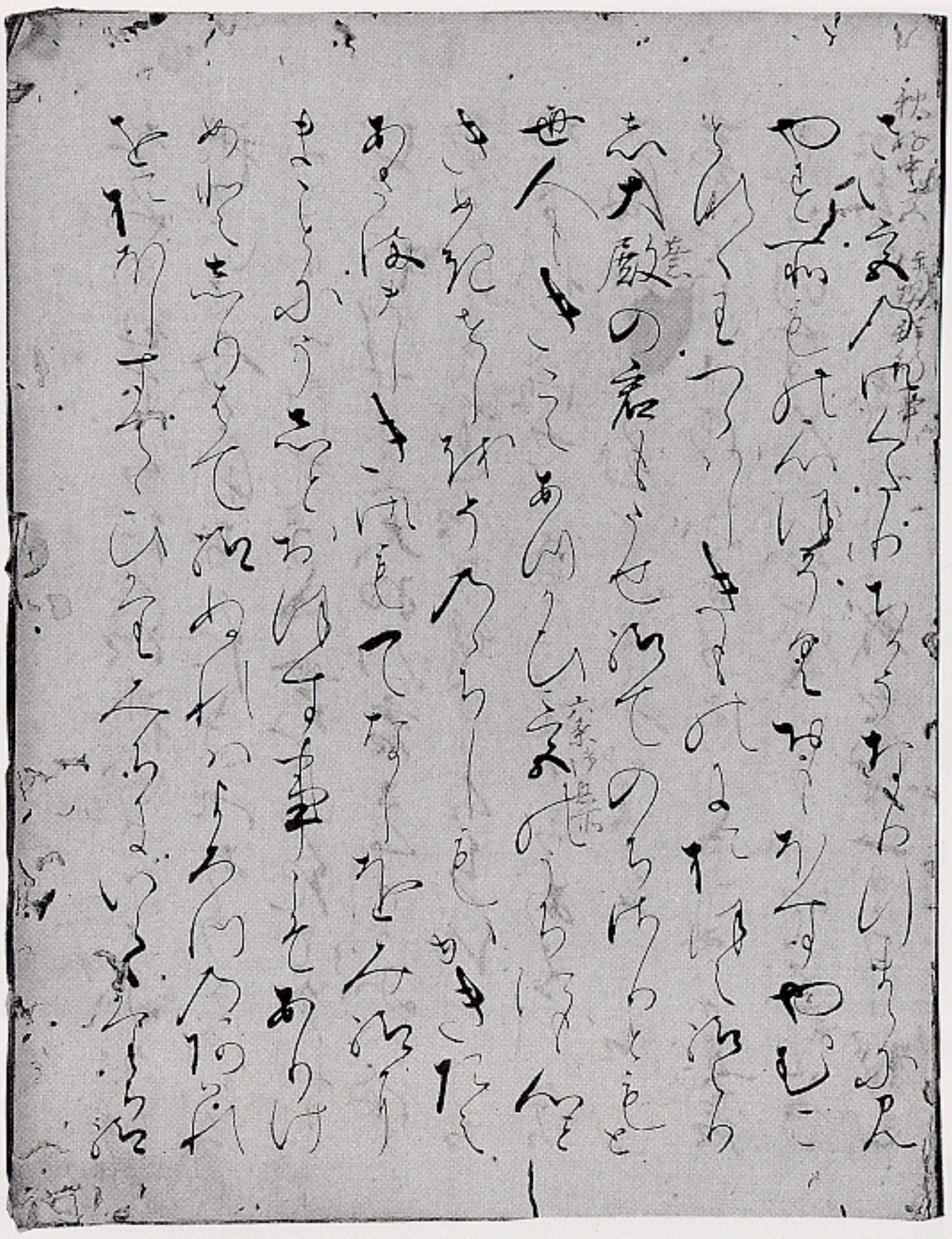
60　大和物語　上



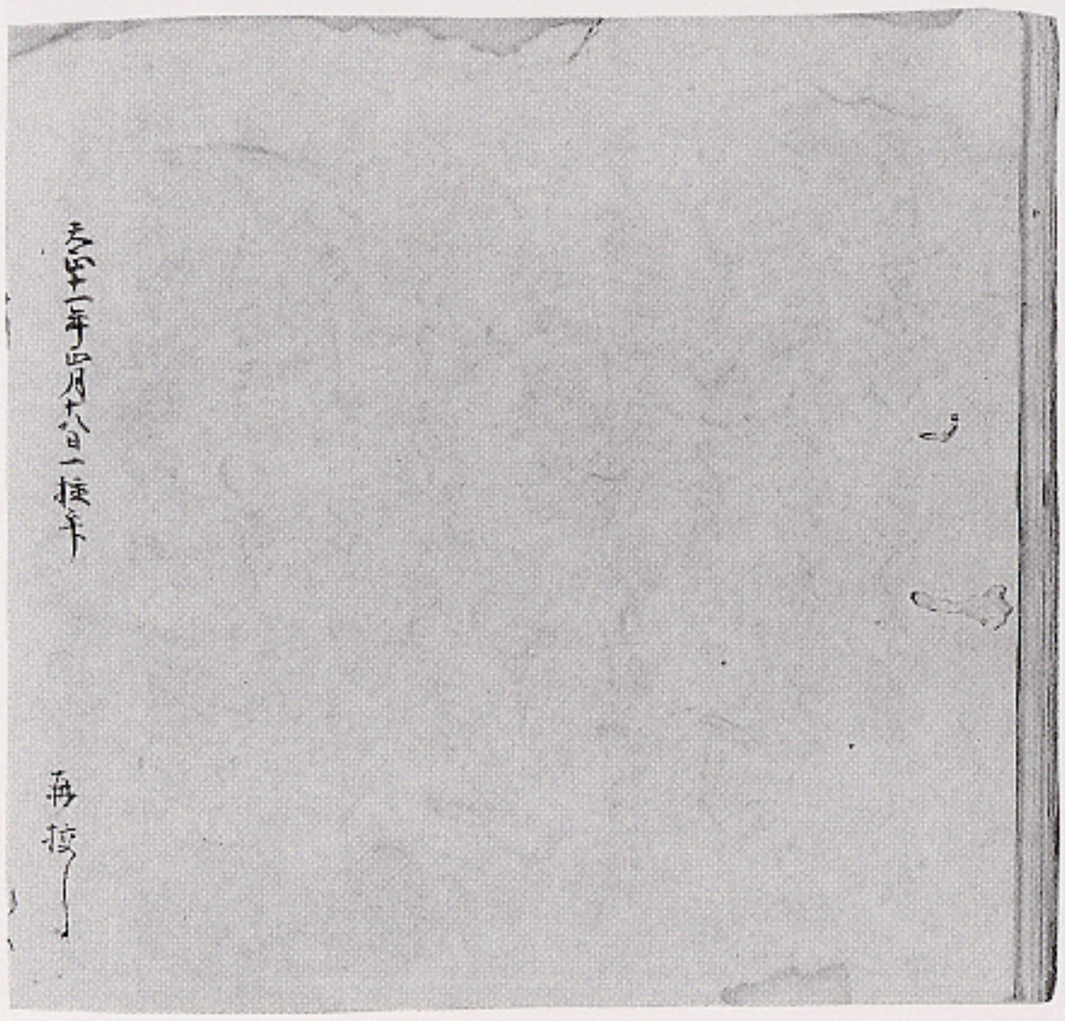
61　大和物語　上　古活字版



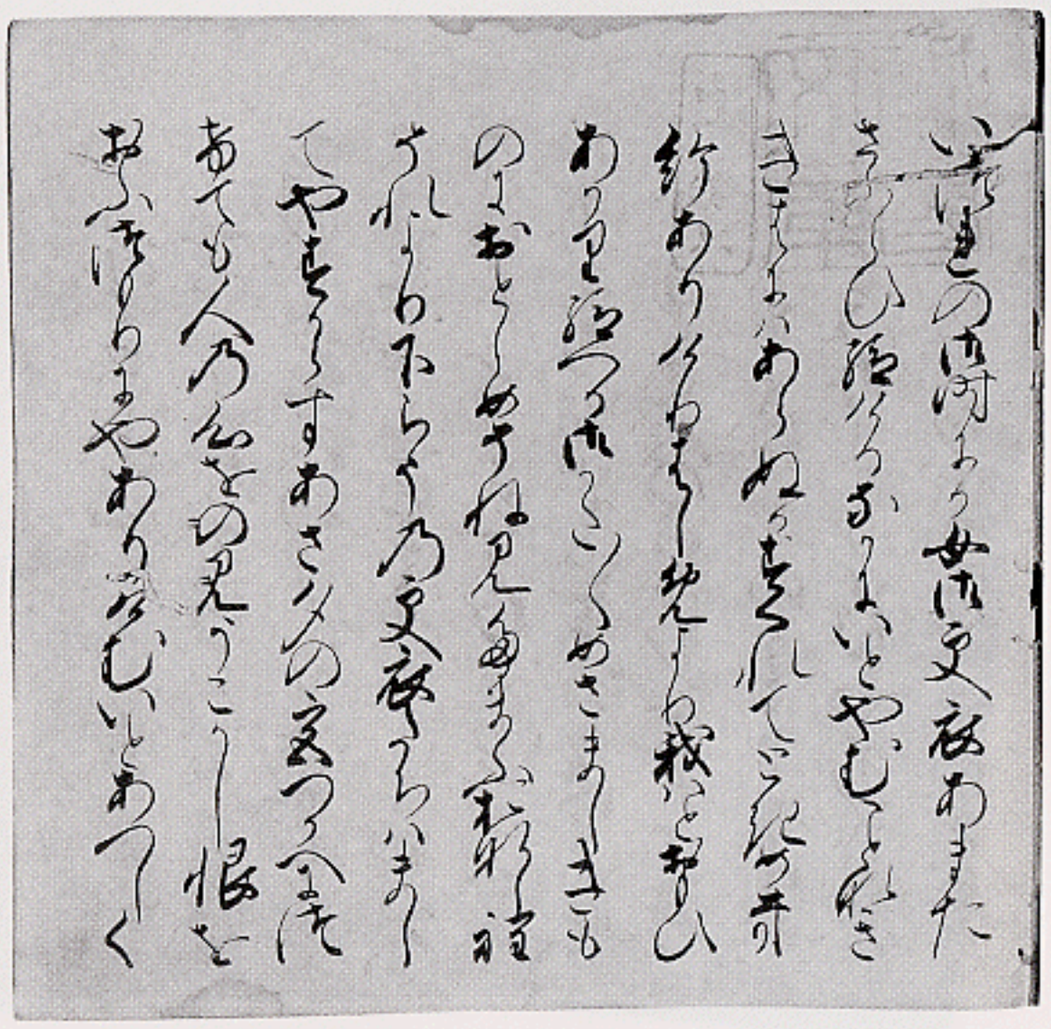
63　宇津保物語　俊蔭巻　古活字版



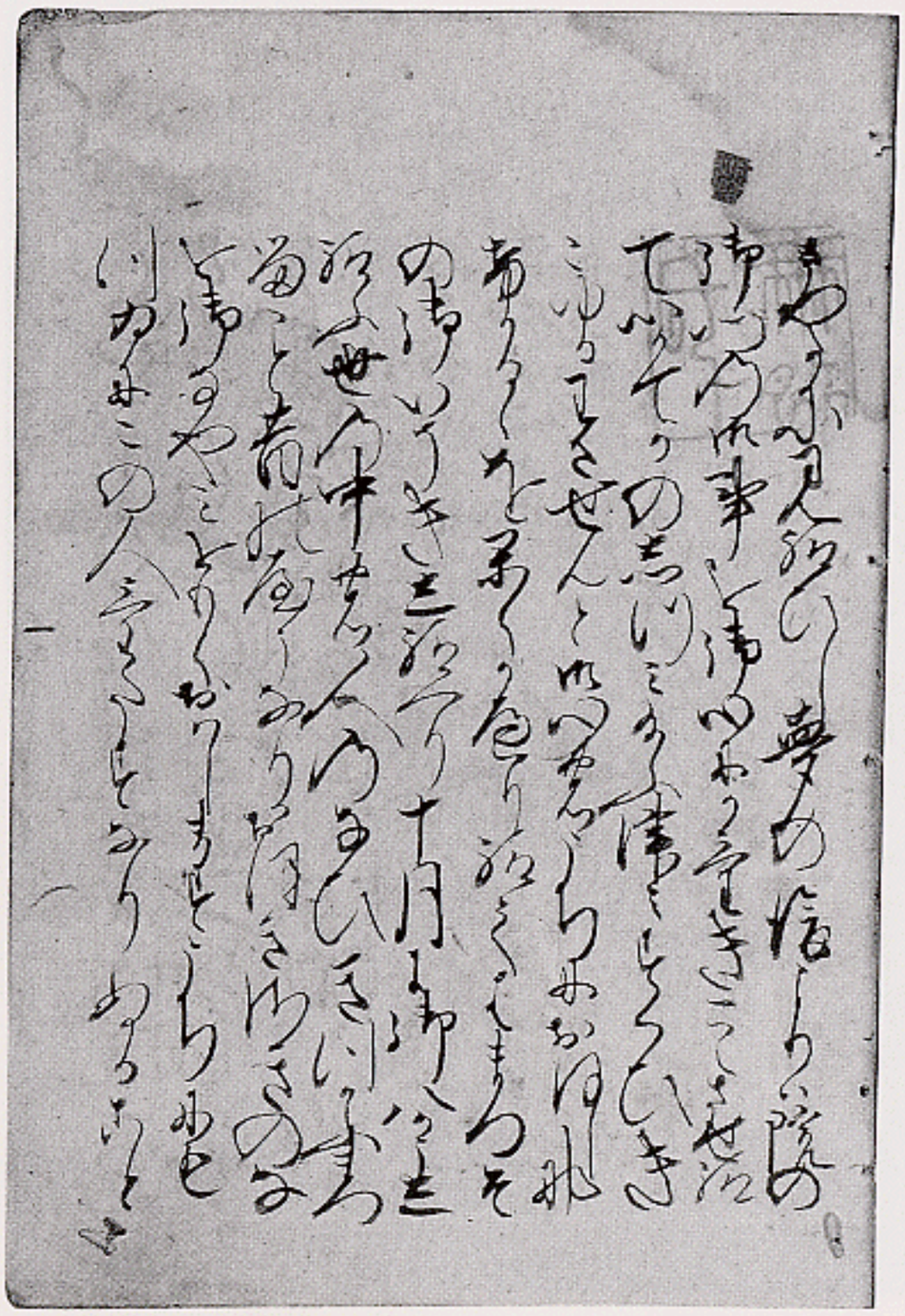
66　源氏物語　賢木巻



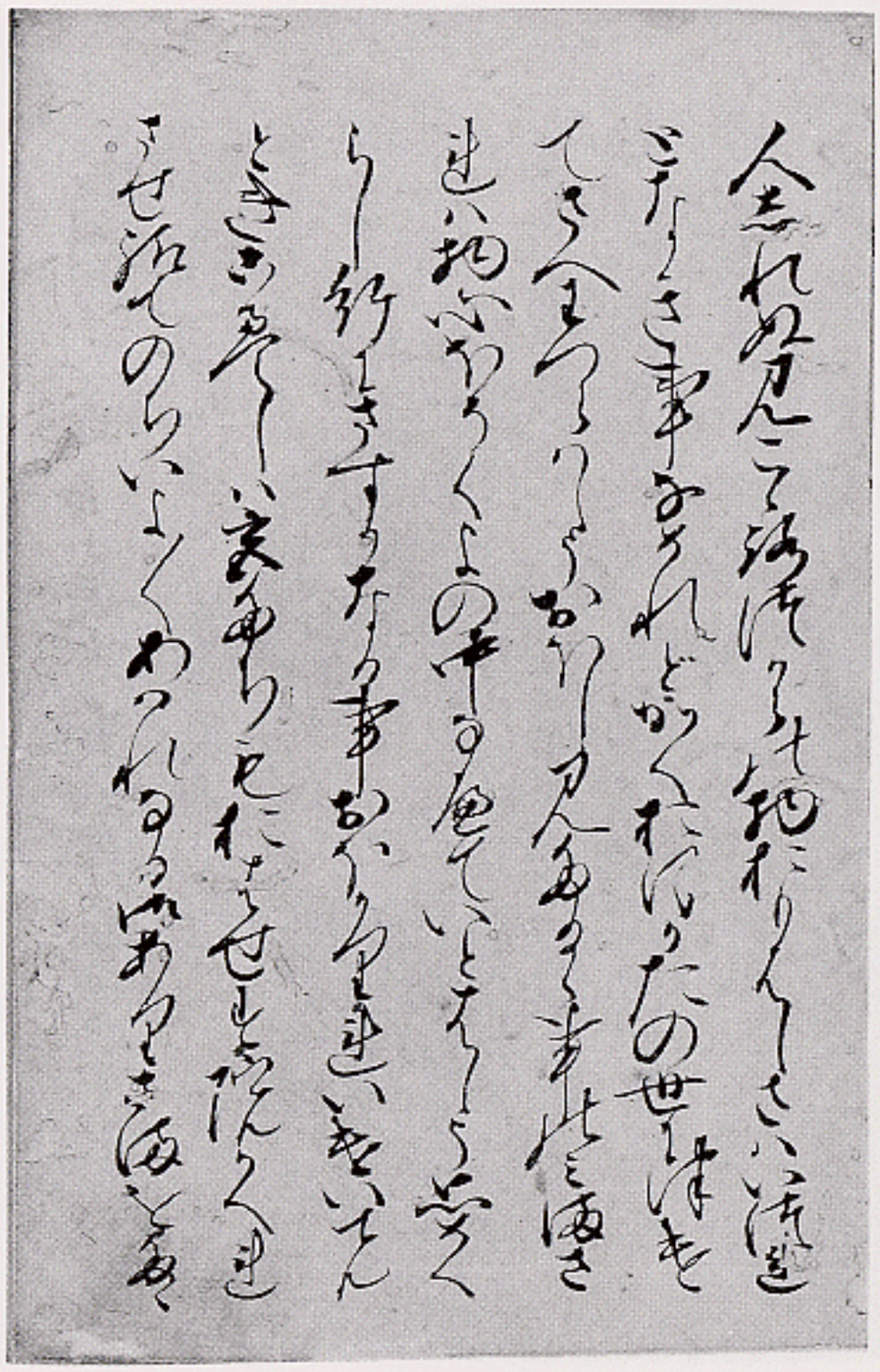
67-2　源氏物語



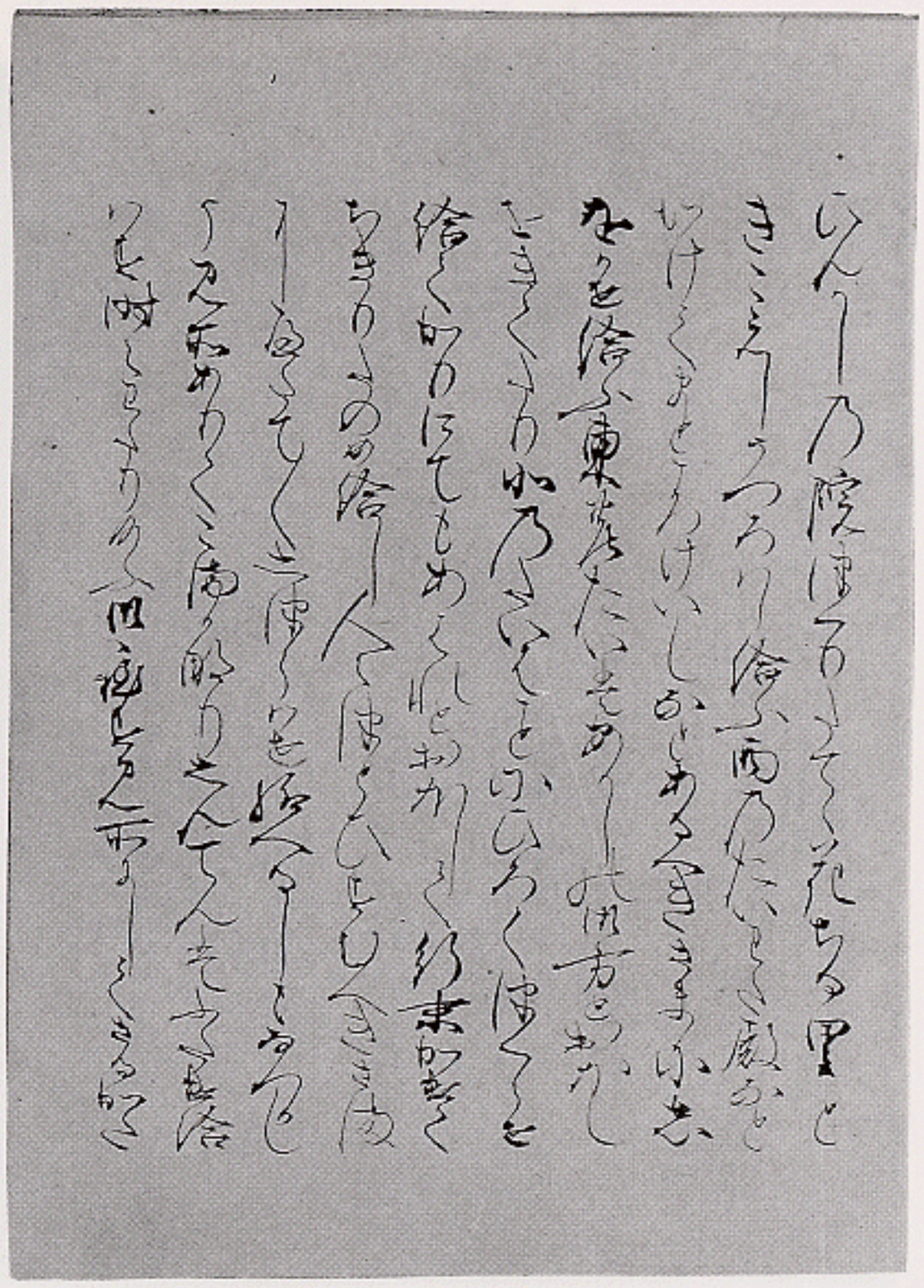
67-1　源氏物語　越国文庫旧蔵本



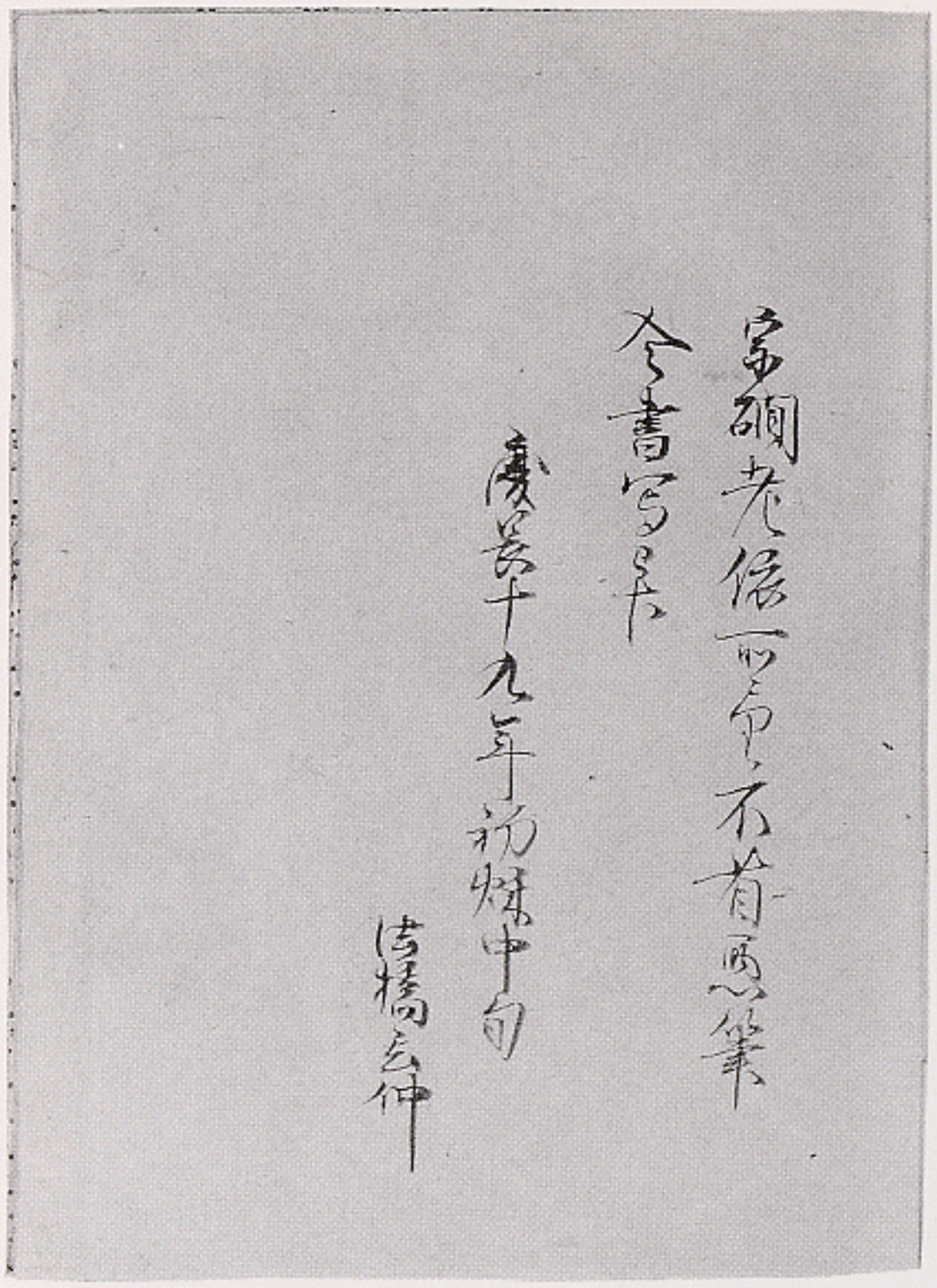
68　源氏物語　澪標巻　別本



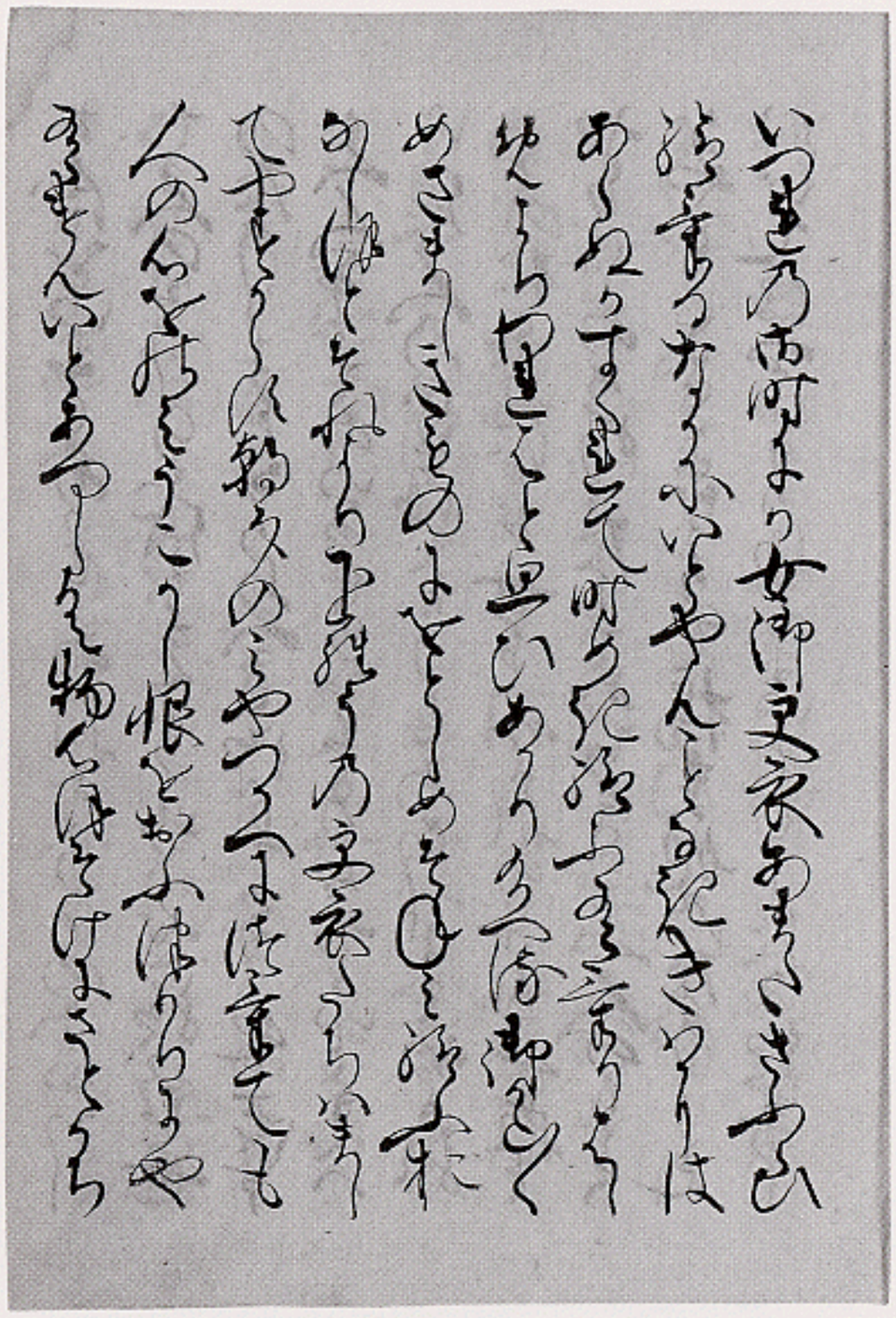
69　源氏物語　花散里巻　別本



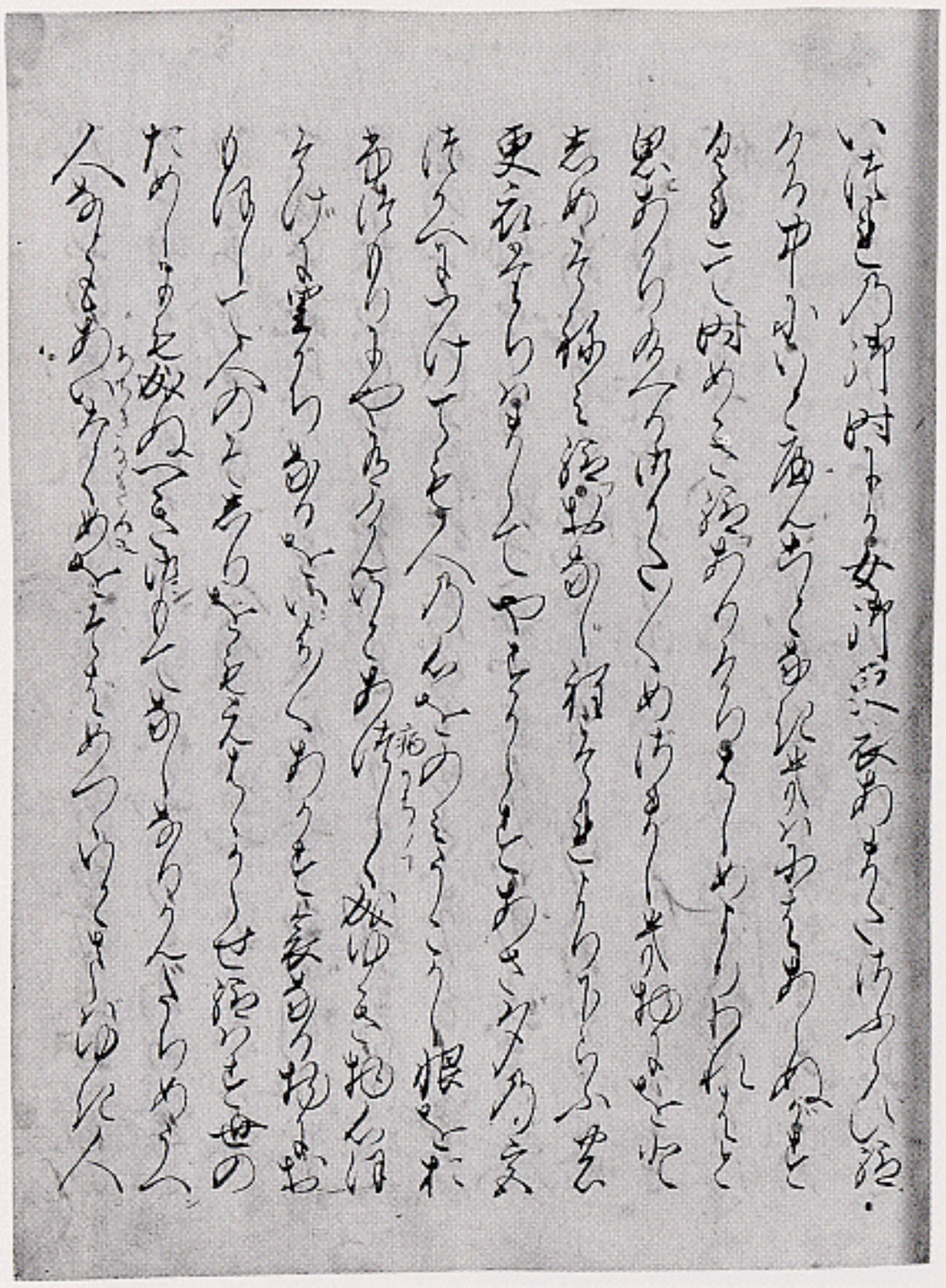
70-1　源氏物語　松風巻（里村玄仲筆）



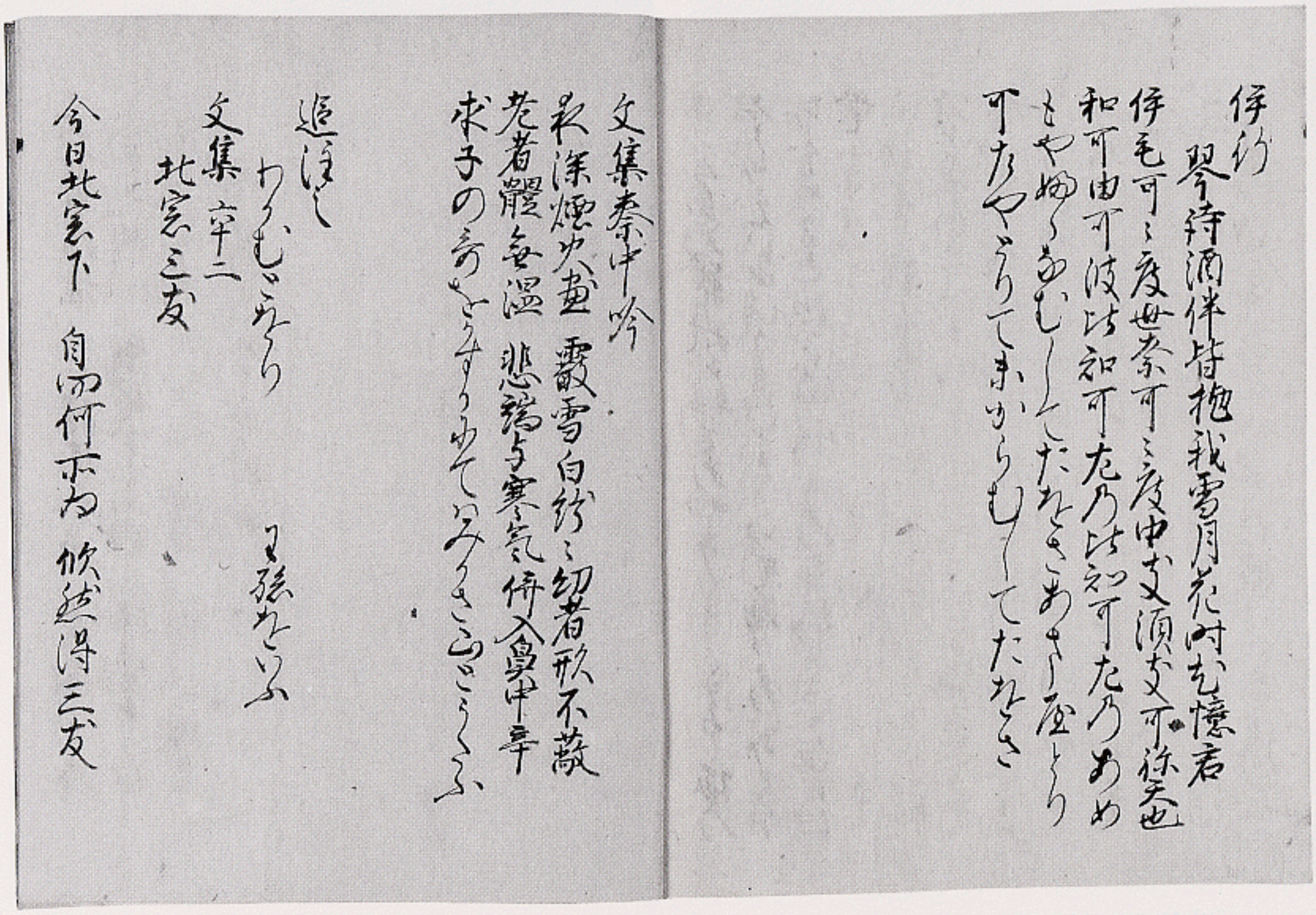
70-2　源氏物語　松風巻



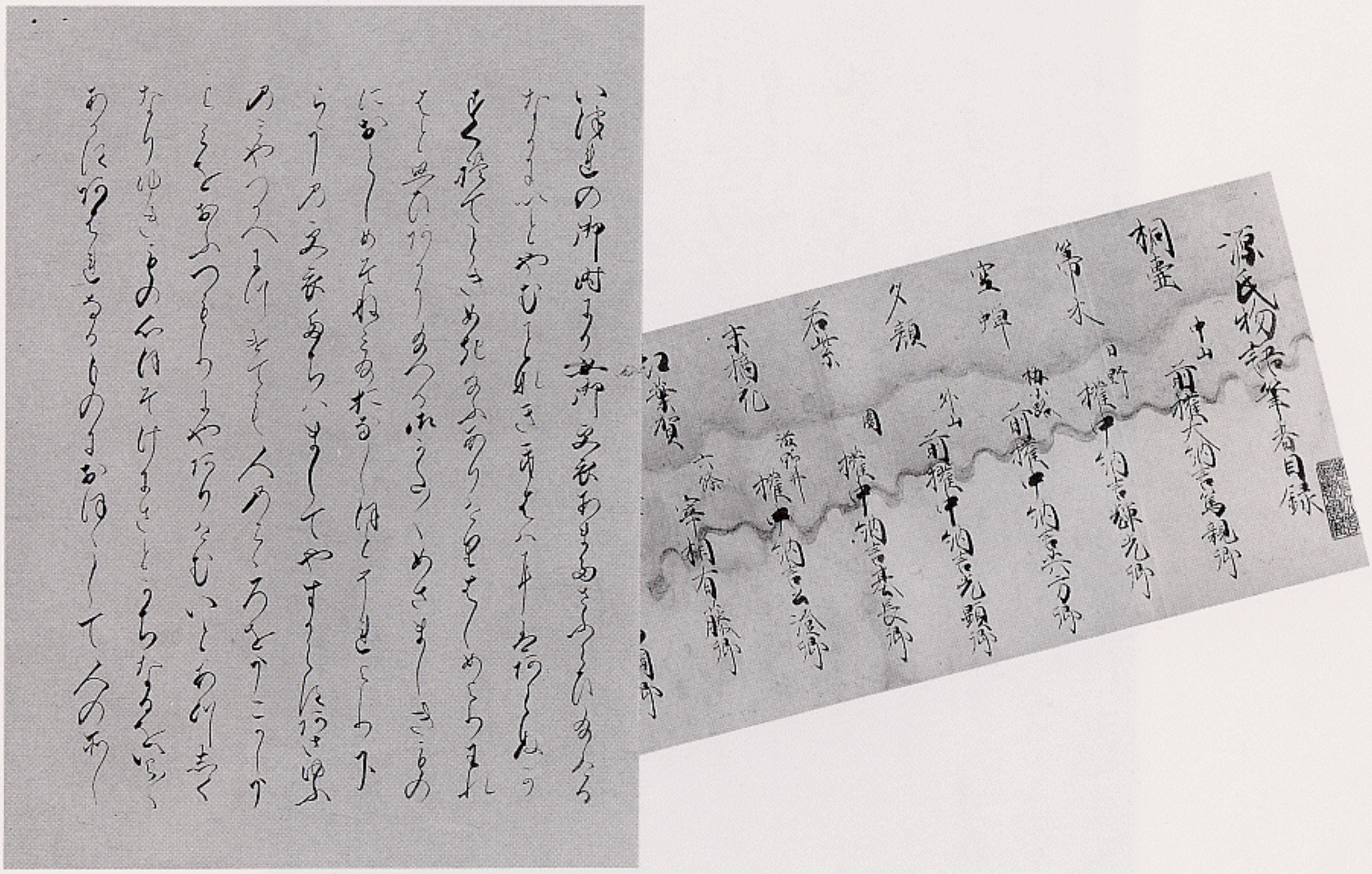
71　源氏物語　淀藩稲葉家旧蔵本



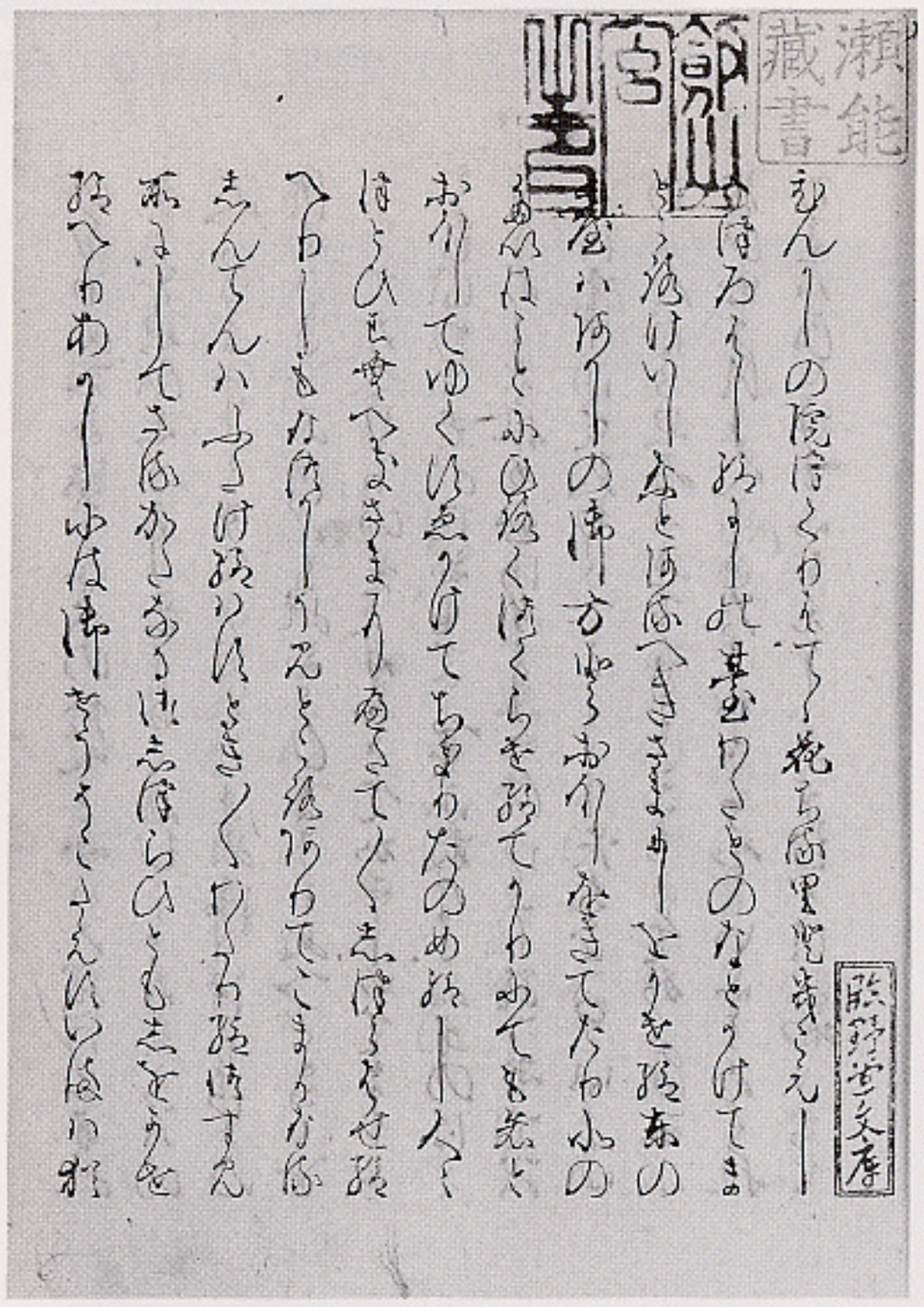
72-1　源氏物語　奥入付（伝徳大寺公維筆）



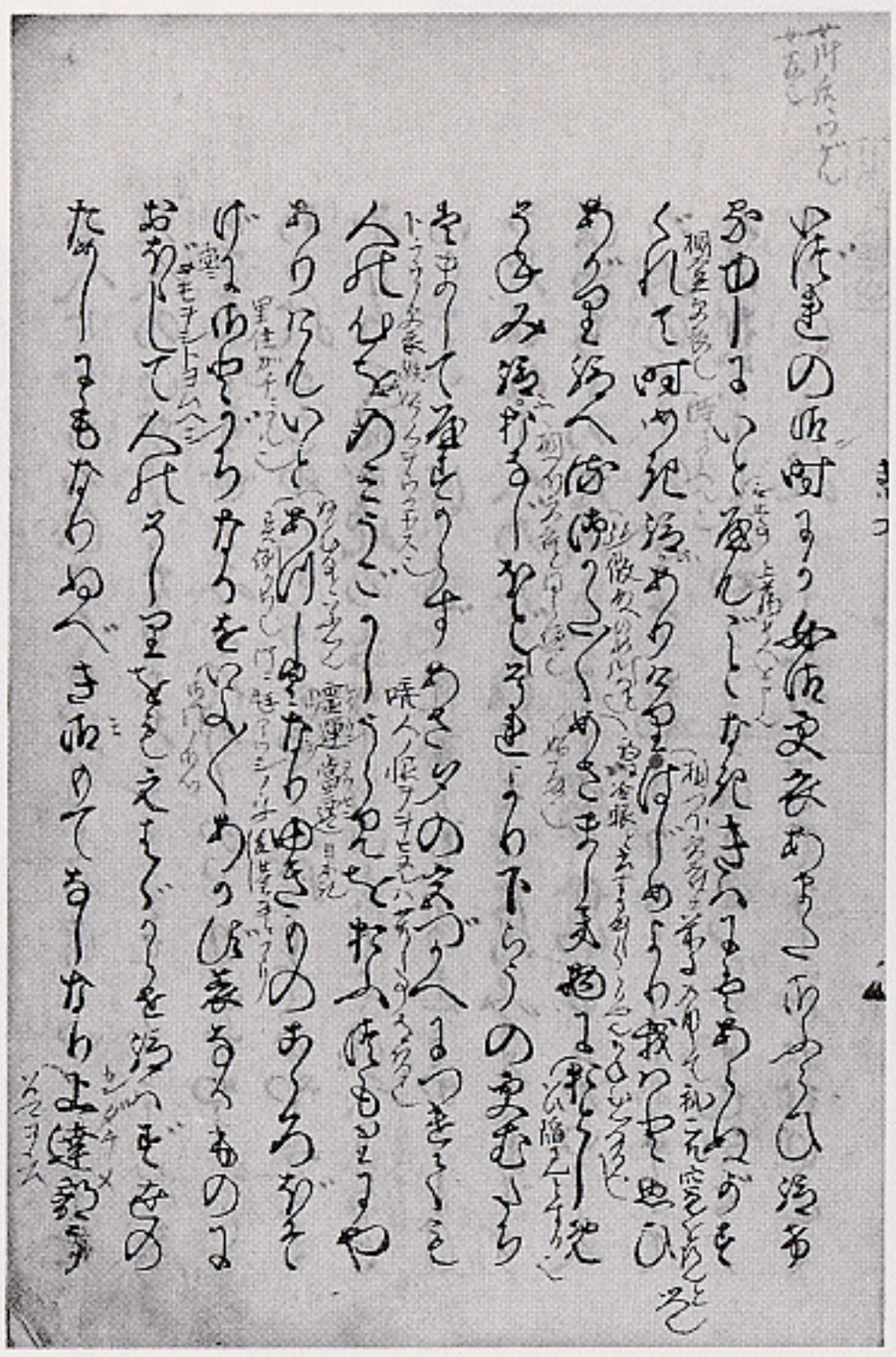
72-2　源氏物語　奥入付



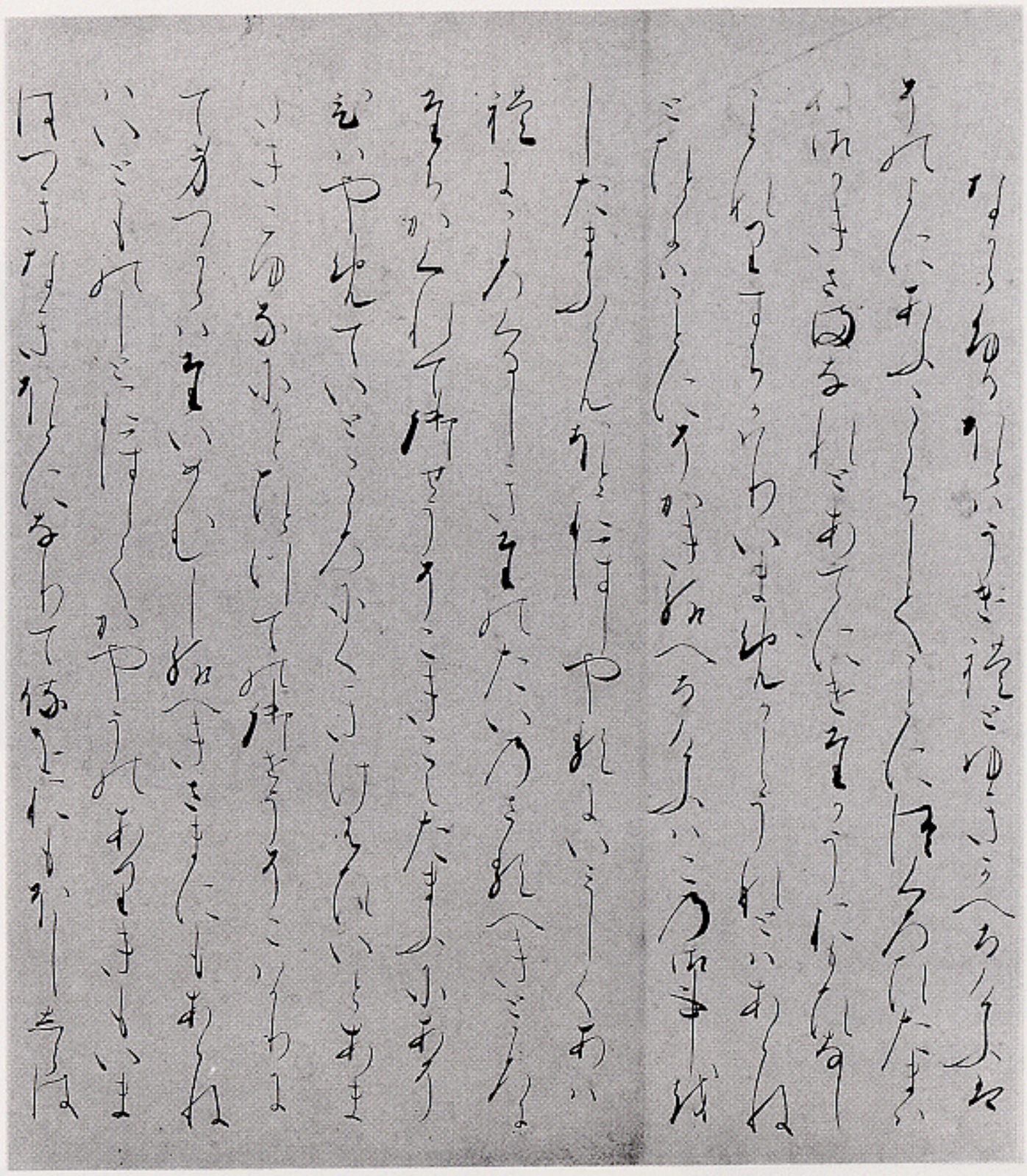
75　源氏物語　中山篤親等寄合書



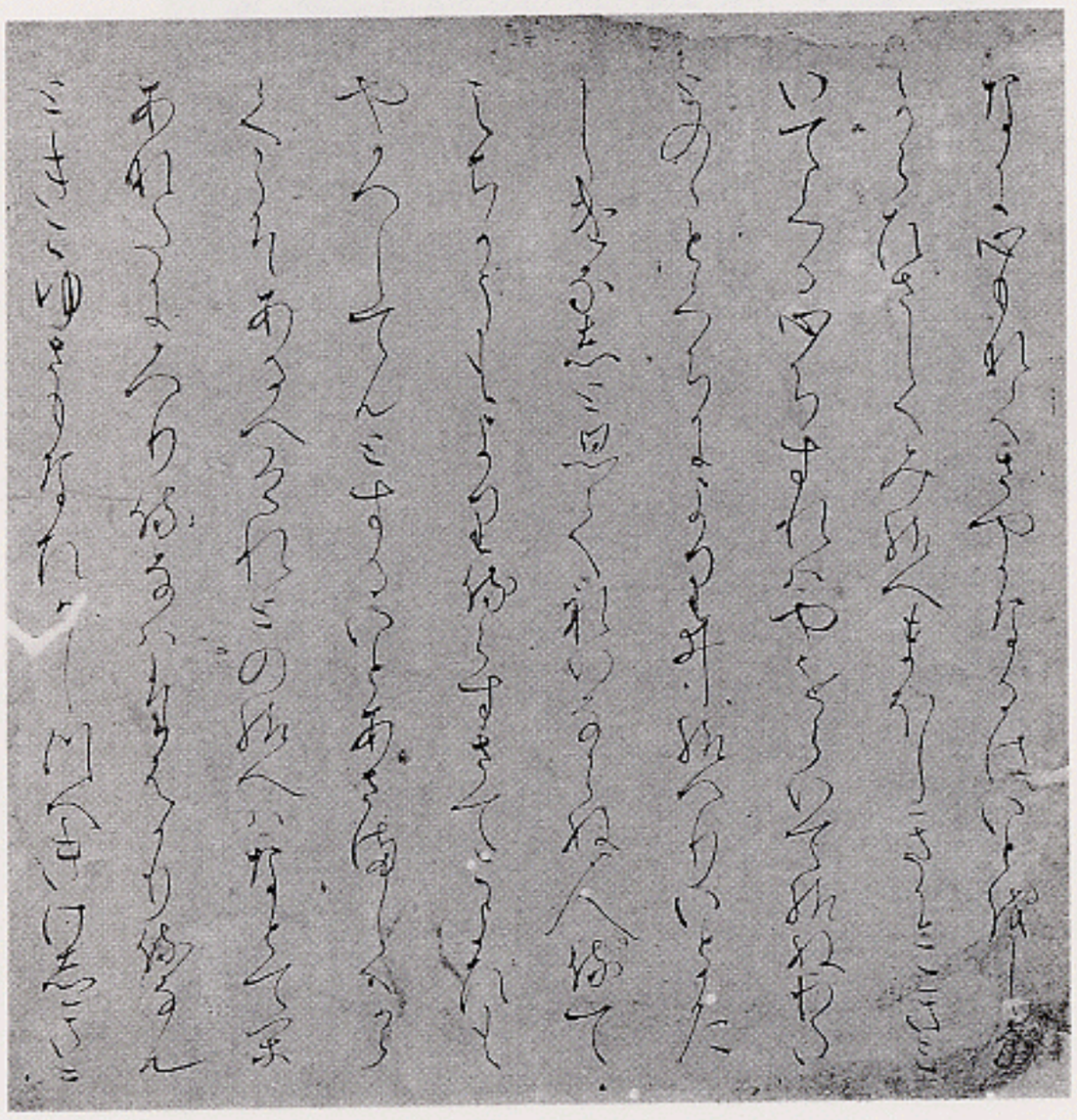
78　源氏物語　伝嵯峨本古活字版



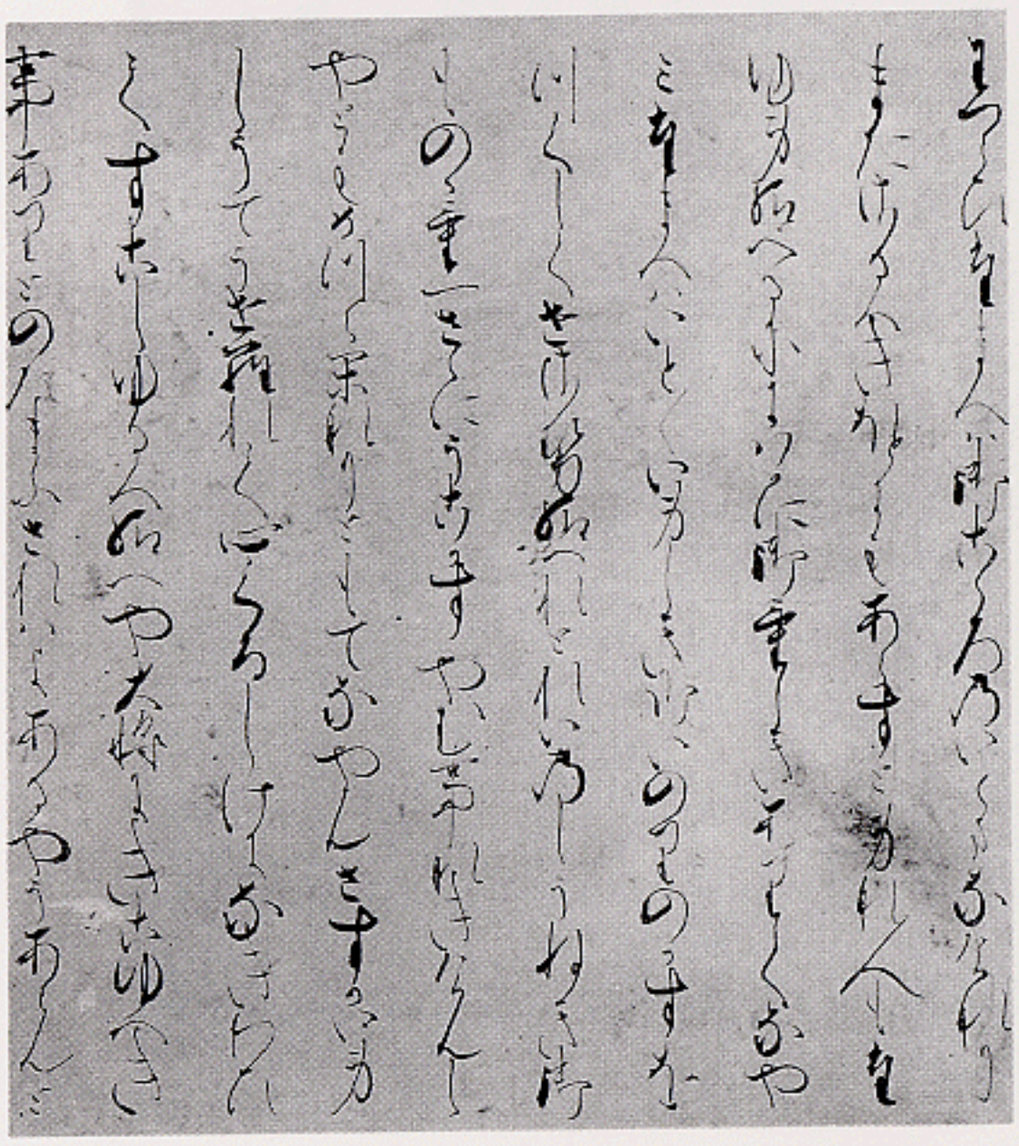
79　源氏物語　古活字版



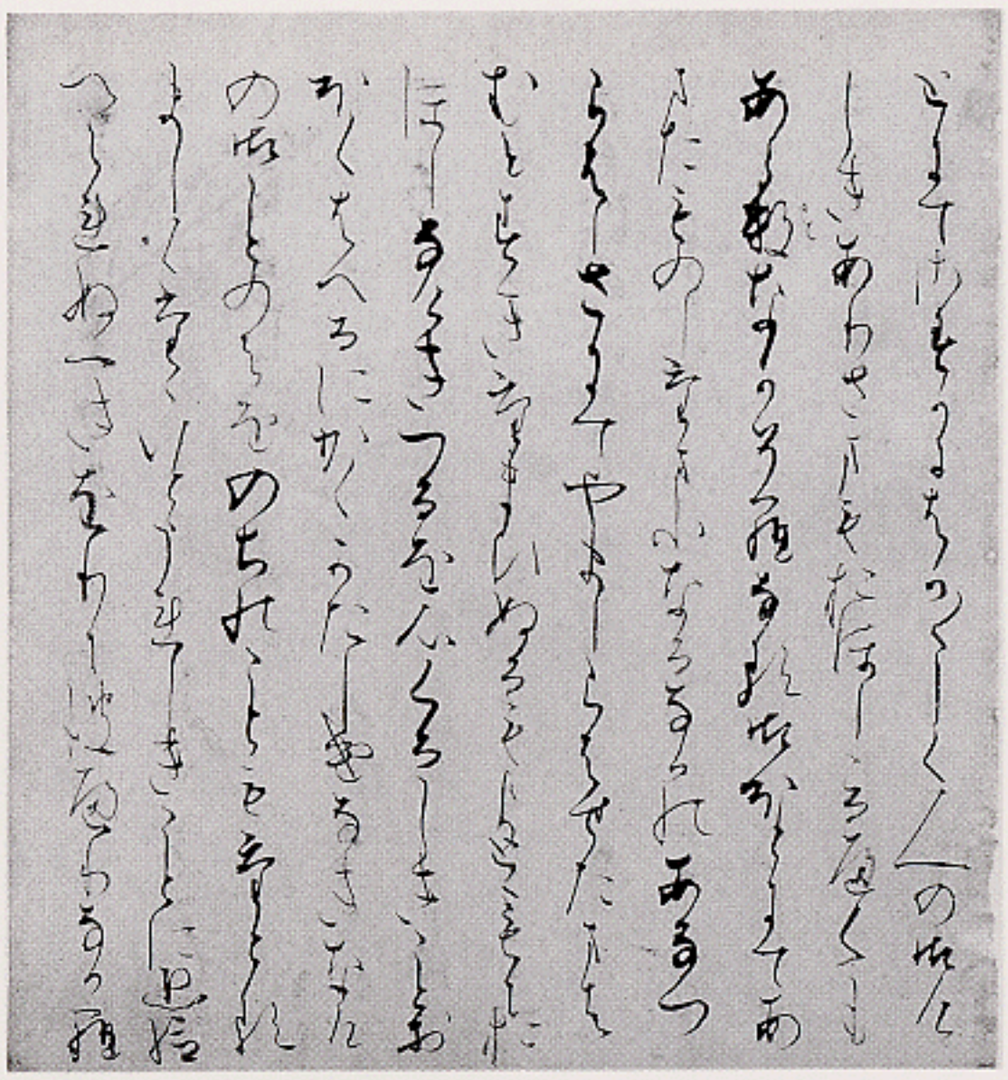
80　源氏物語断簡　賢木巻　河内本（伝藤原為家筆）



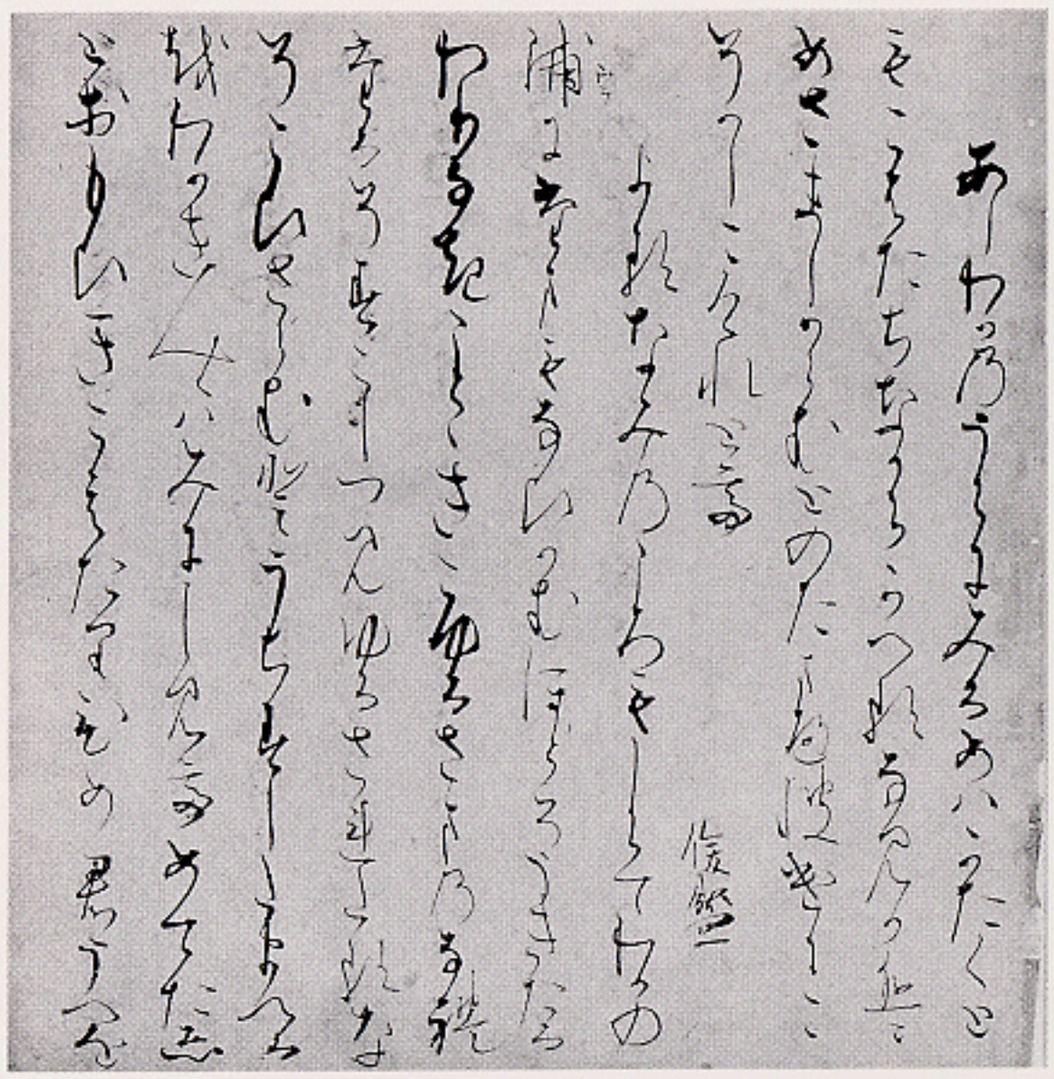
82-イ　源氏物語断簡　空蟬巻



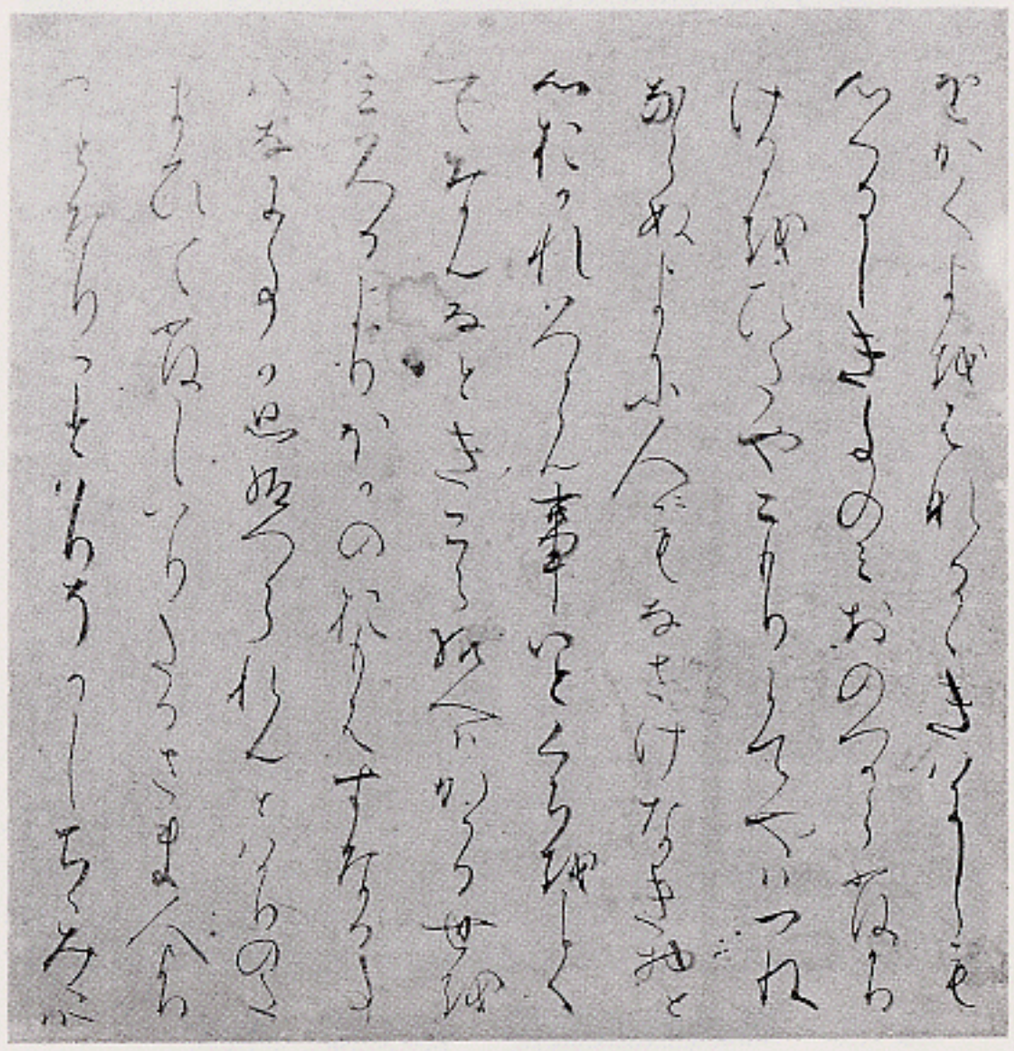
82-ハ　源氏物語断簡　葵巻



82-ロ-1　源氏物語断簡　若紫巻　河内本
(伝寂蓮筆)

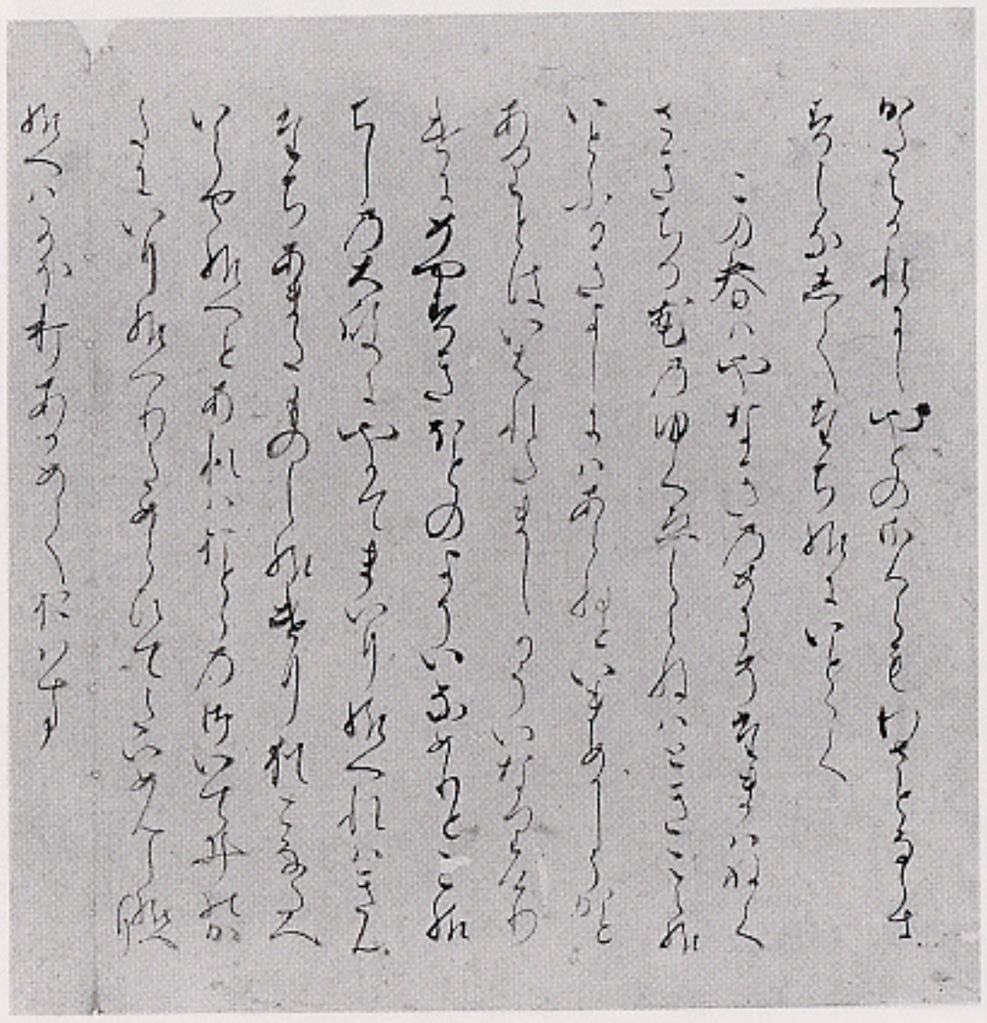


82-ロ-2　源氏物語断簡　若紫巻

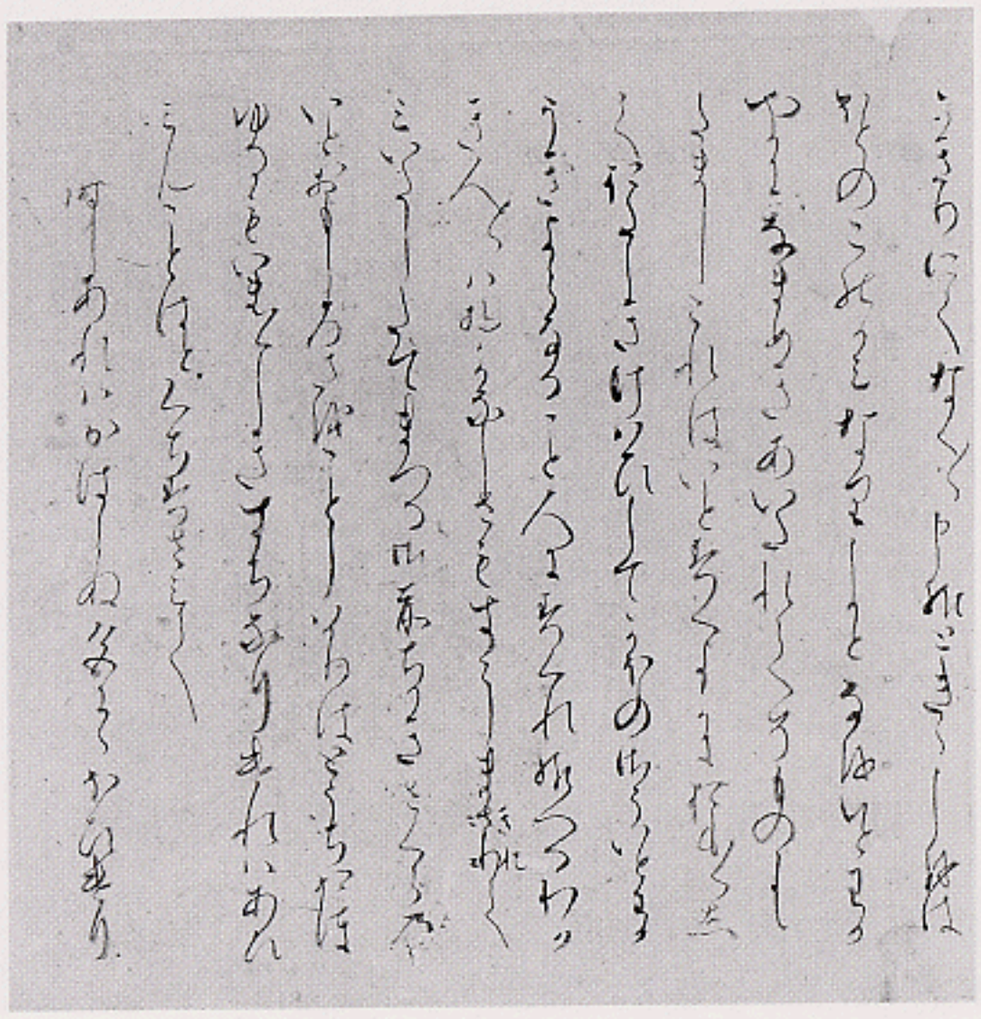


82-ニ　源氏物語断簡　須磨巻　河内本

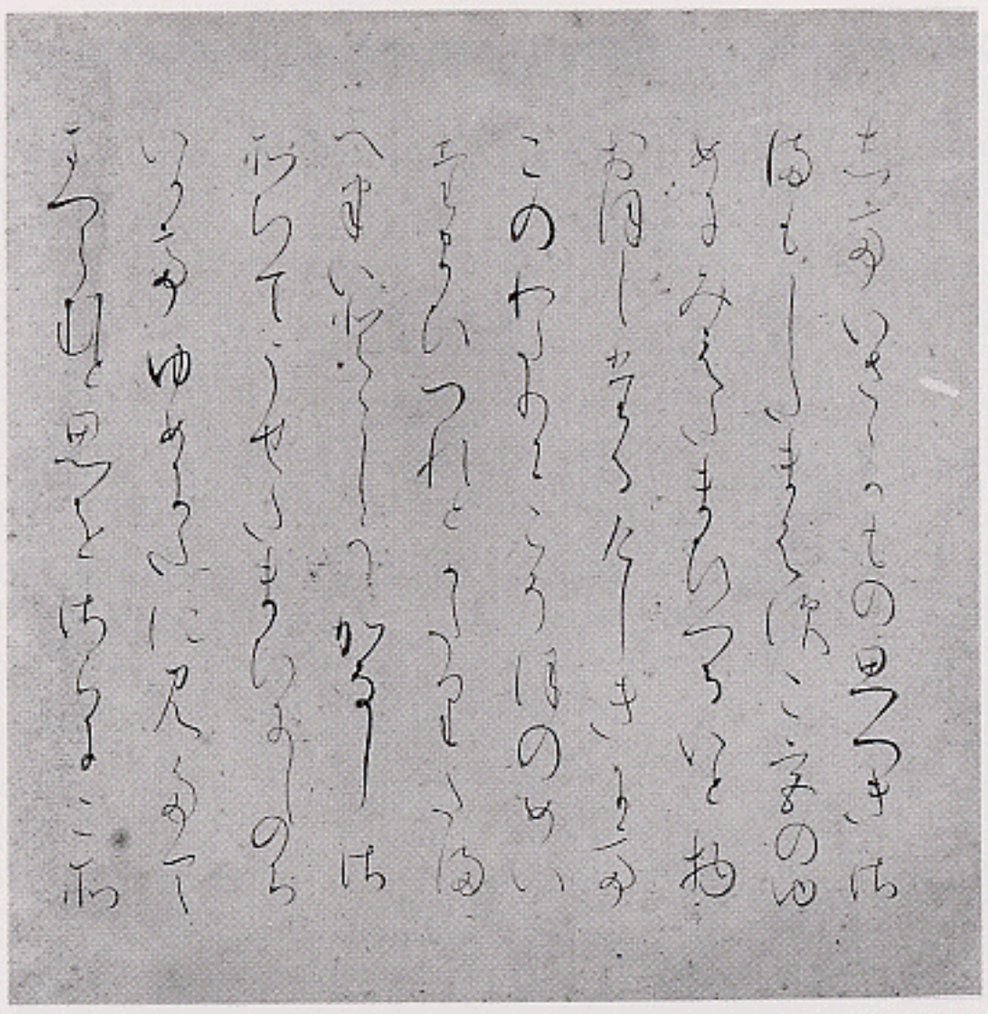
82-ホ　源氏物語断簡　若菜巻　上



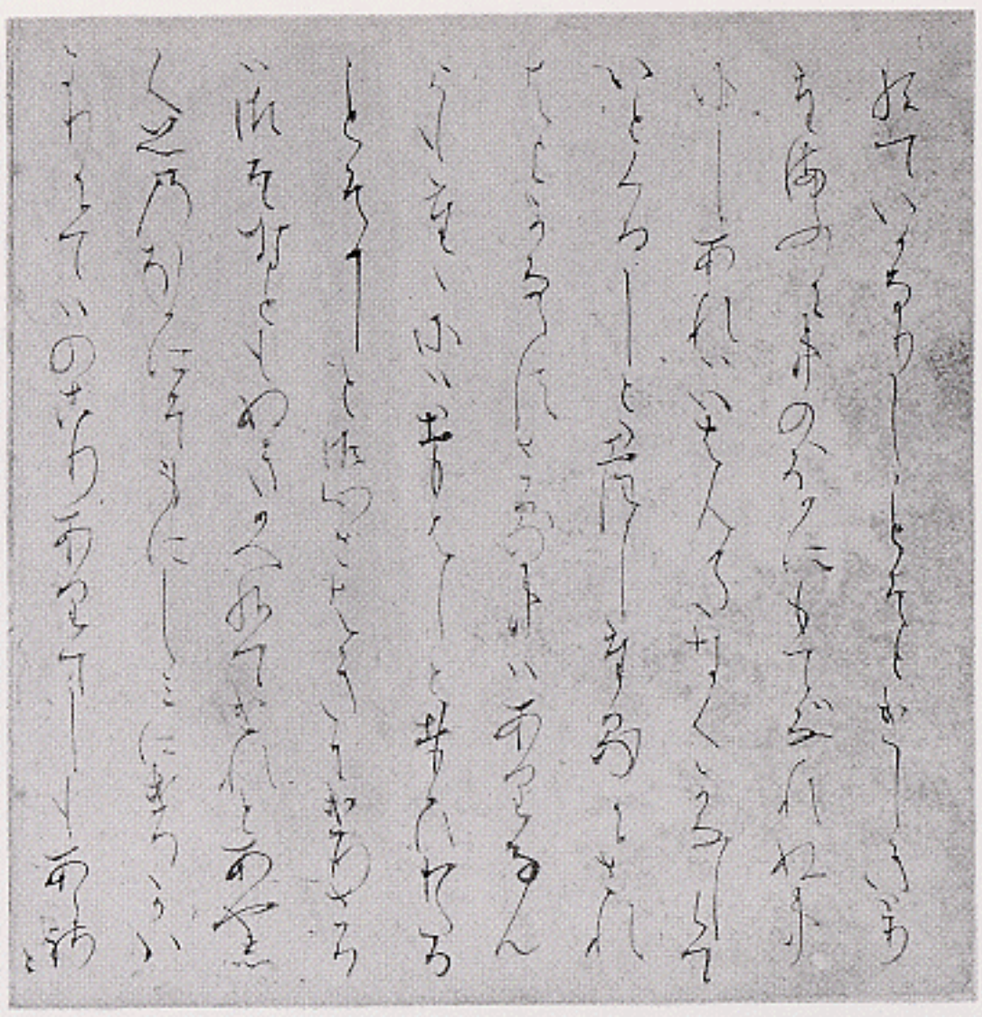
82-へ-1　源氏物語断簡　柏木巻



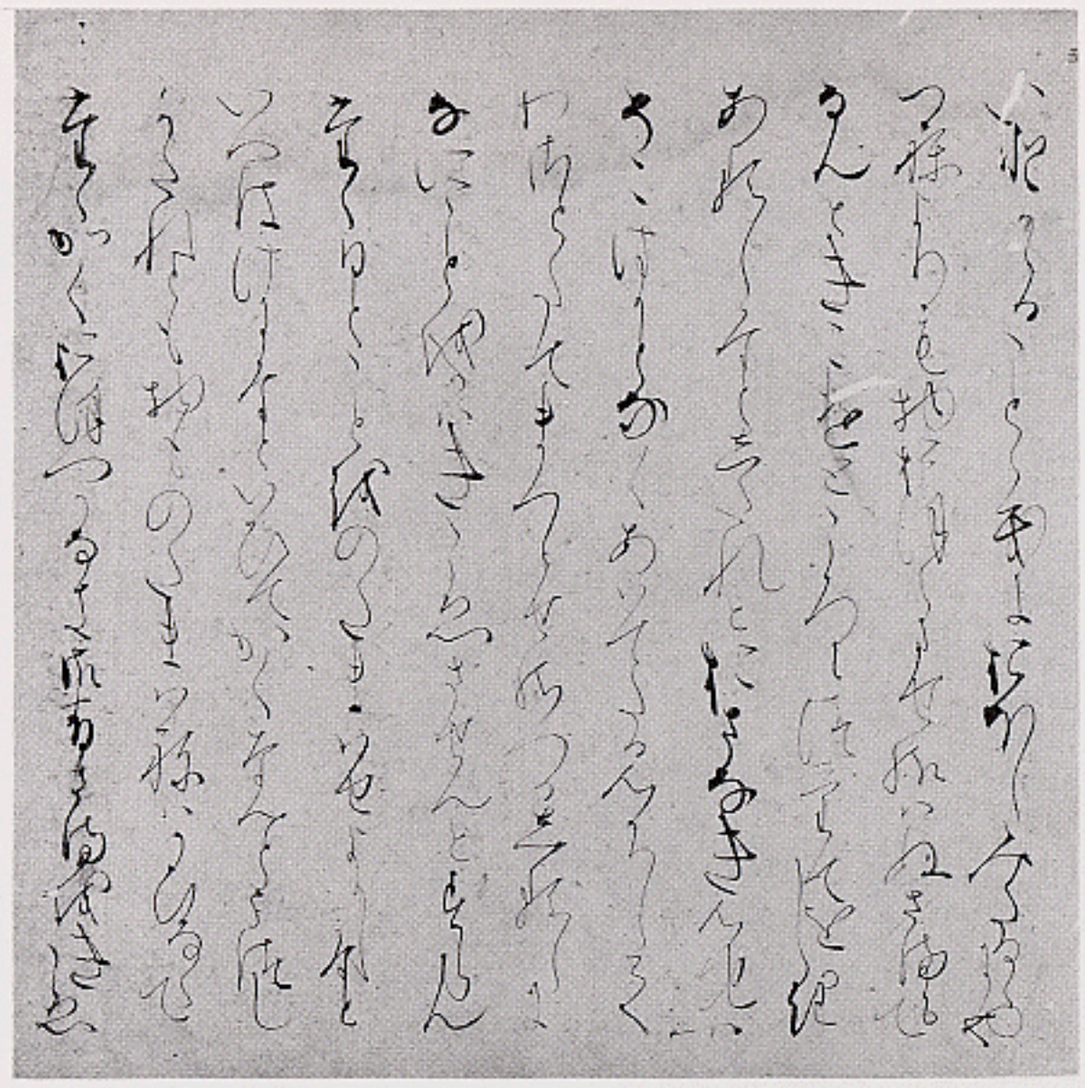
82-へ-2　源氏物語断簡　柏木巻



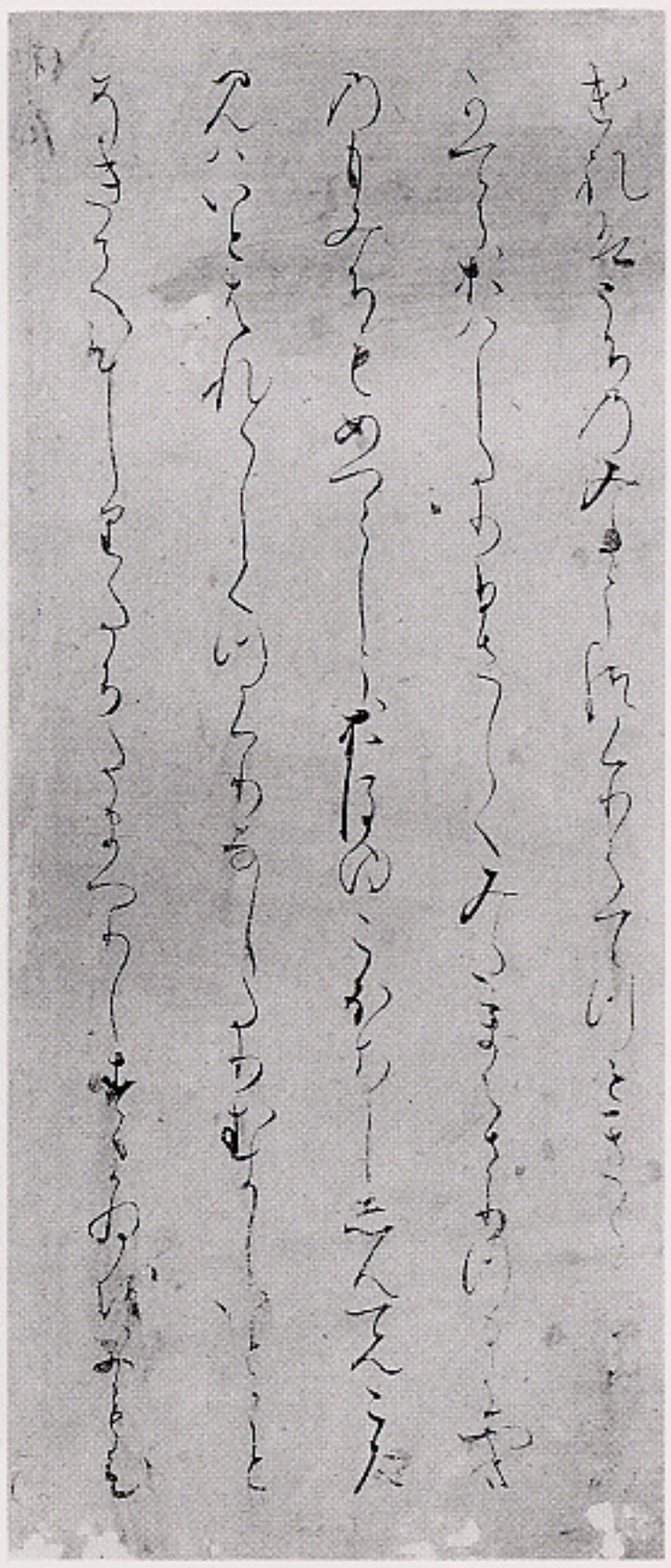
82-ト　源氏物語断簡　総角巻　別本
(伝世尊寺行能筆)



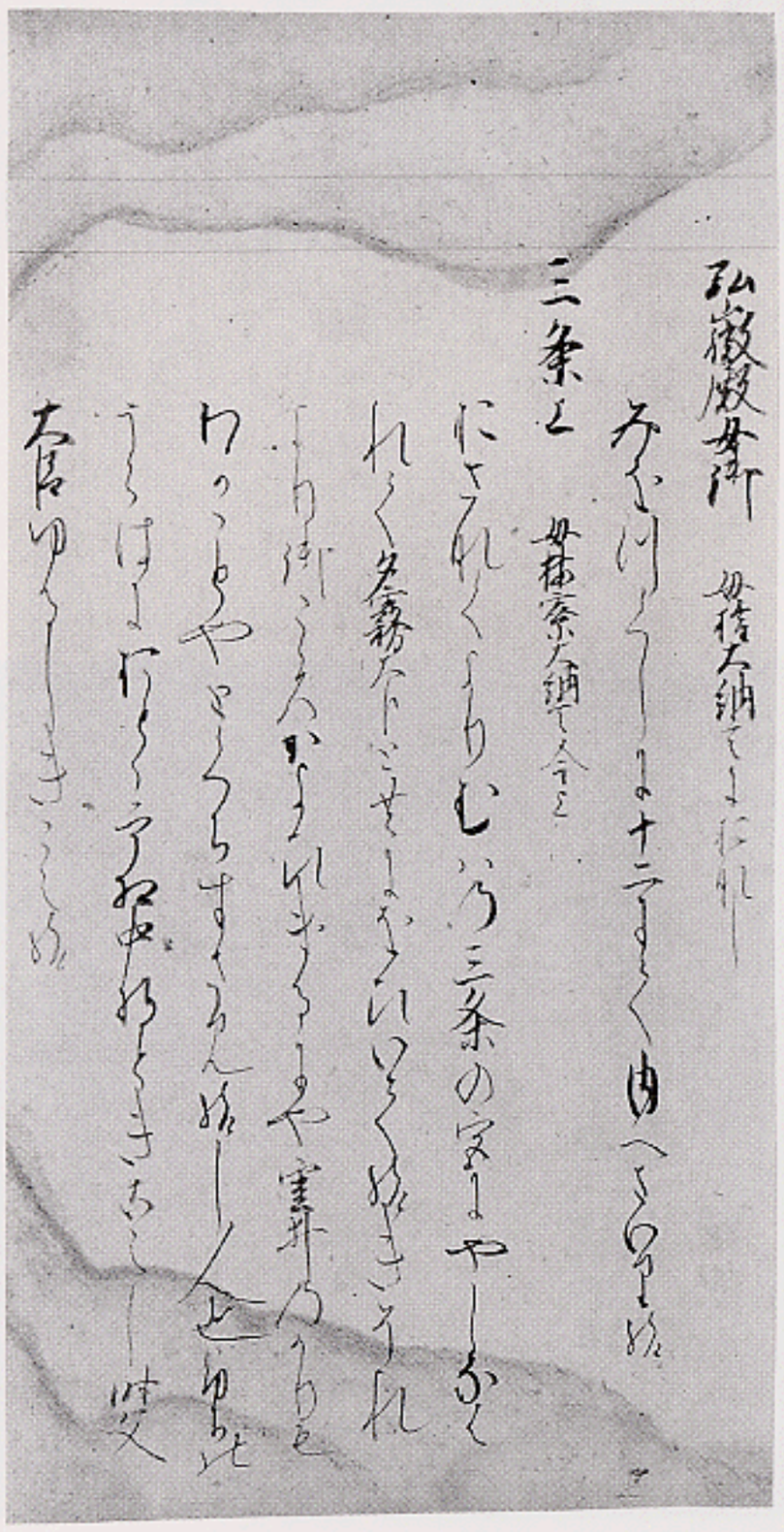
82-チ　源氏物語断簡　宿木巻　別本
(伝藤原為家筆)



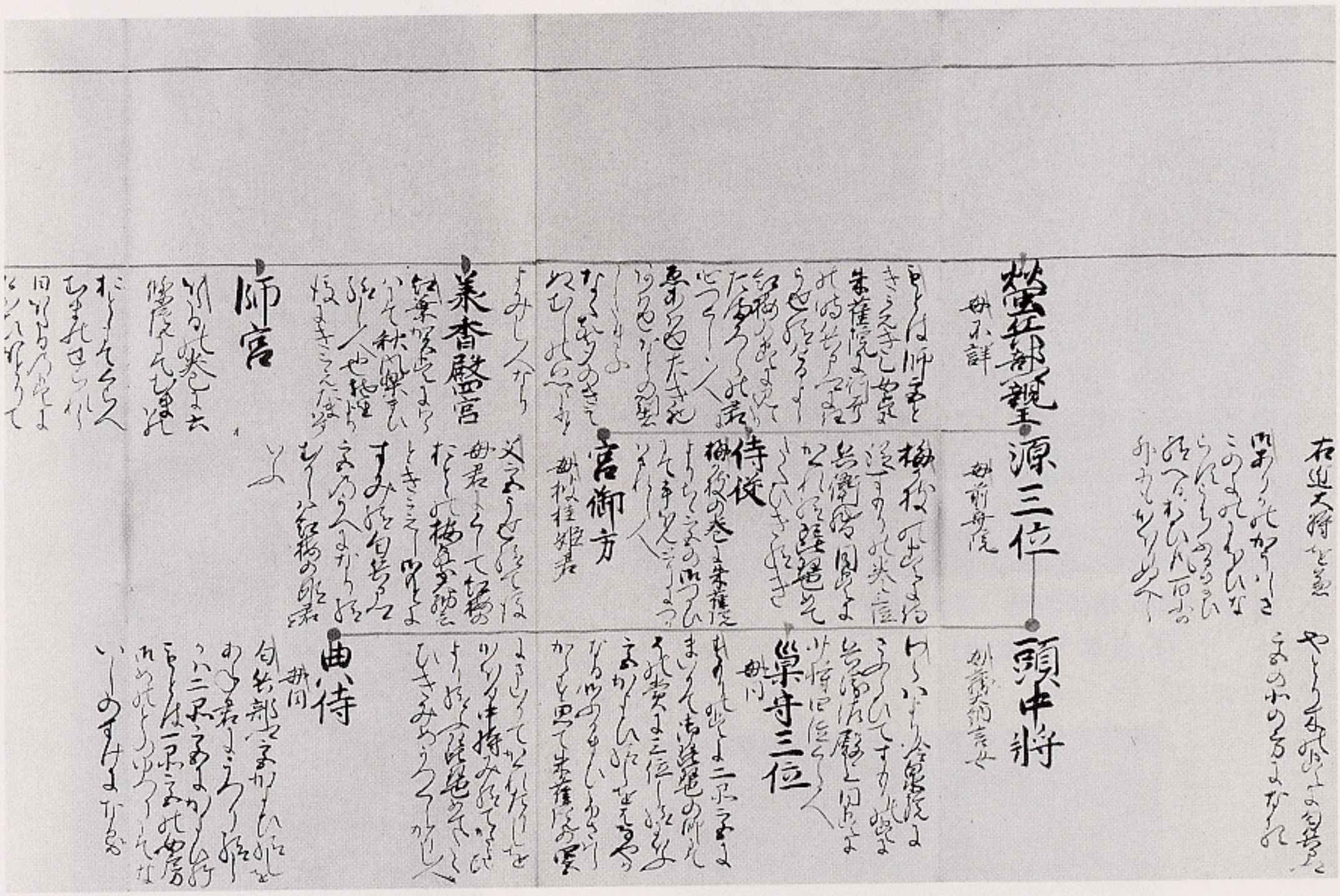
82-ヌ　源氏物語断簡　夢浮橋巻
（伝世尊寺行能筆）



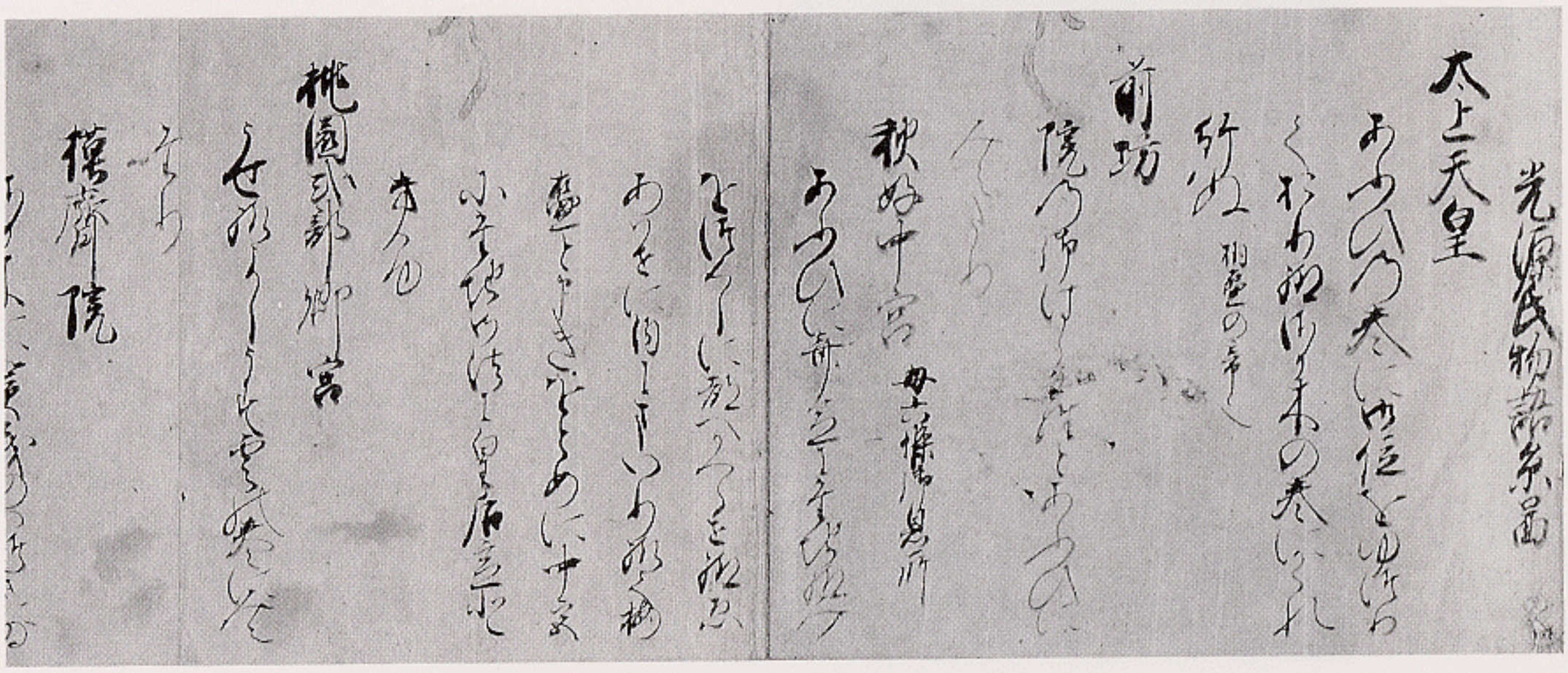
82-リ　源氏物語断簡　東屋巻
河内本（伝阿仏尼筆）



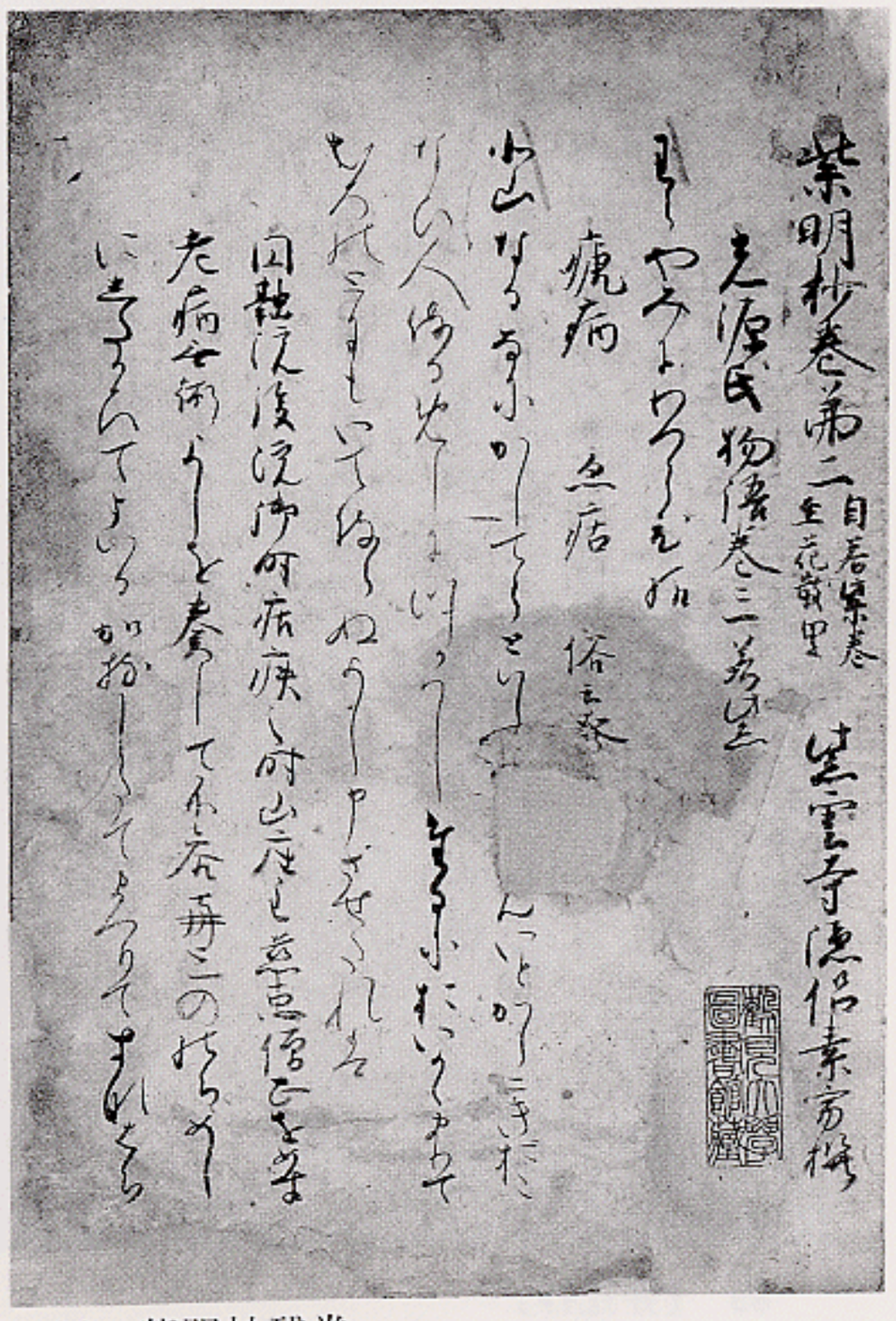
85　源氏物語系図断簡（伝冷泉為相筆）



83　源氏物語系図　巣守三位本

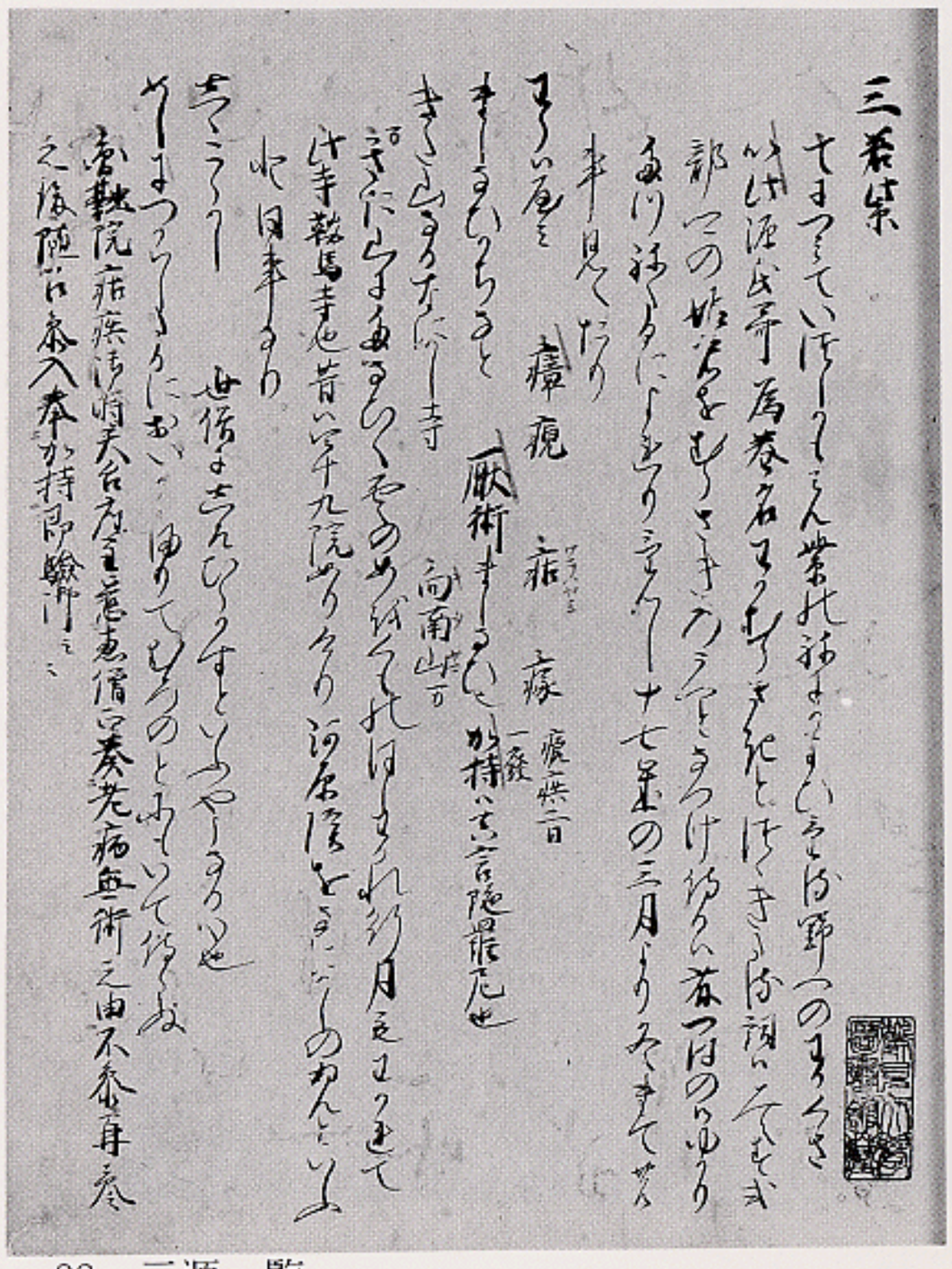


84　光源氏物語系図



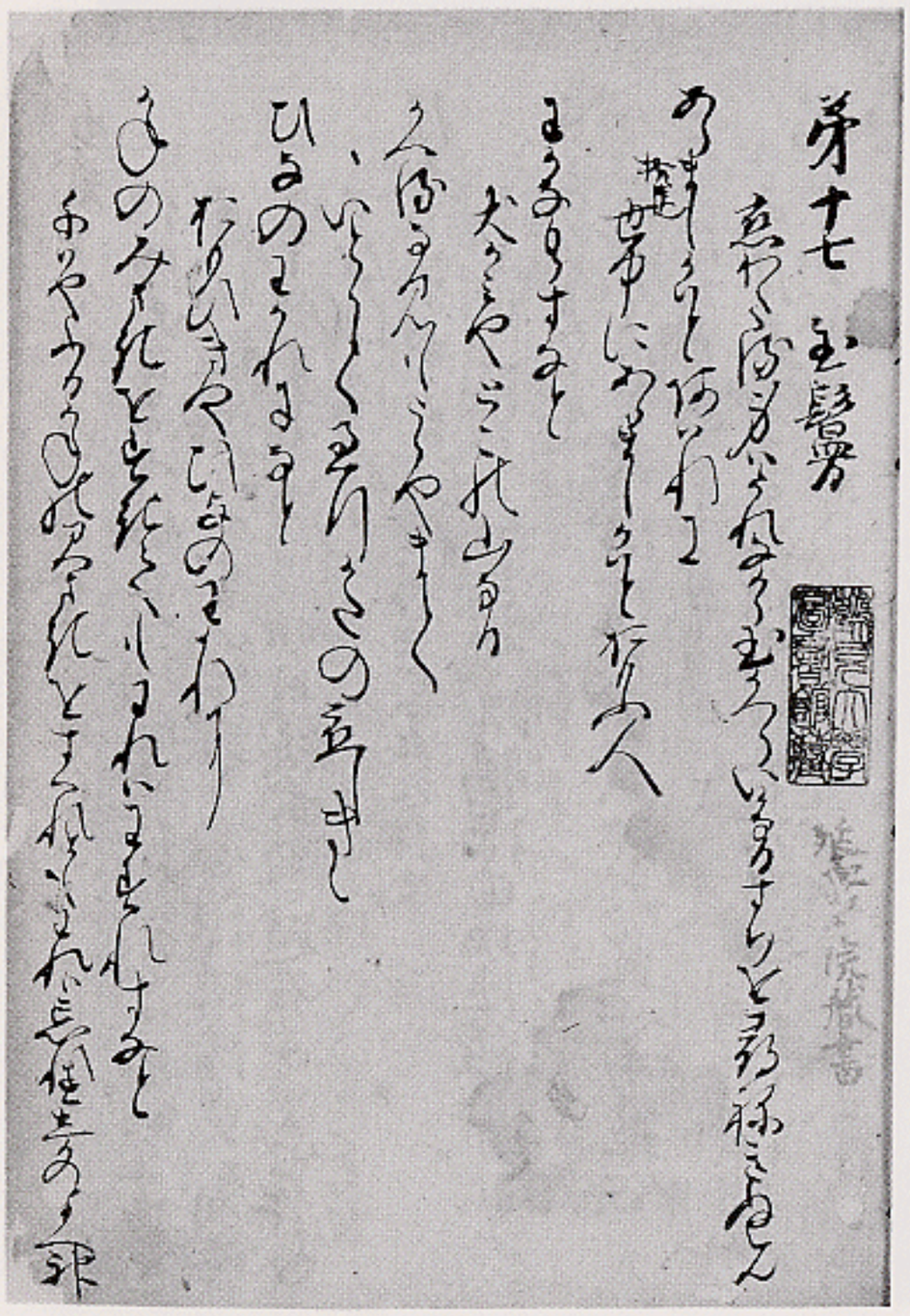
紫明抄残巻

86　紫明抄残巻

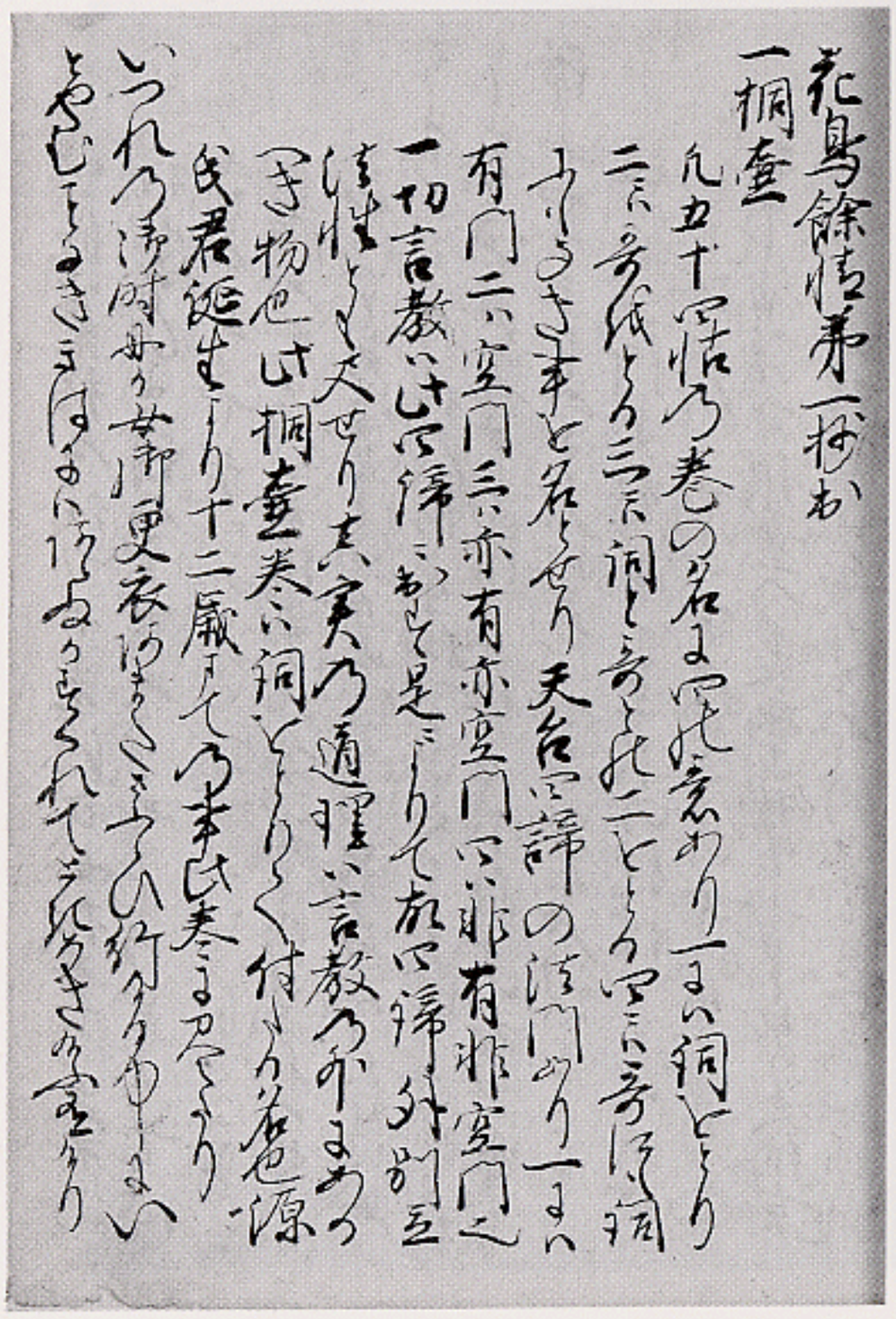


三源一覧

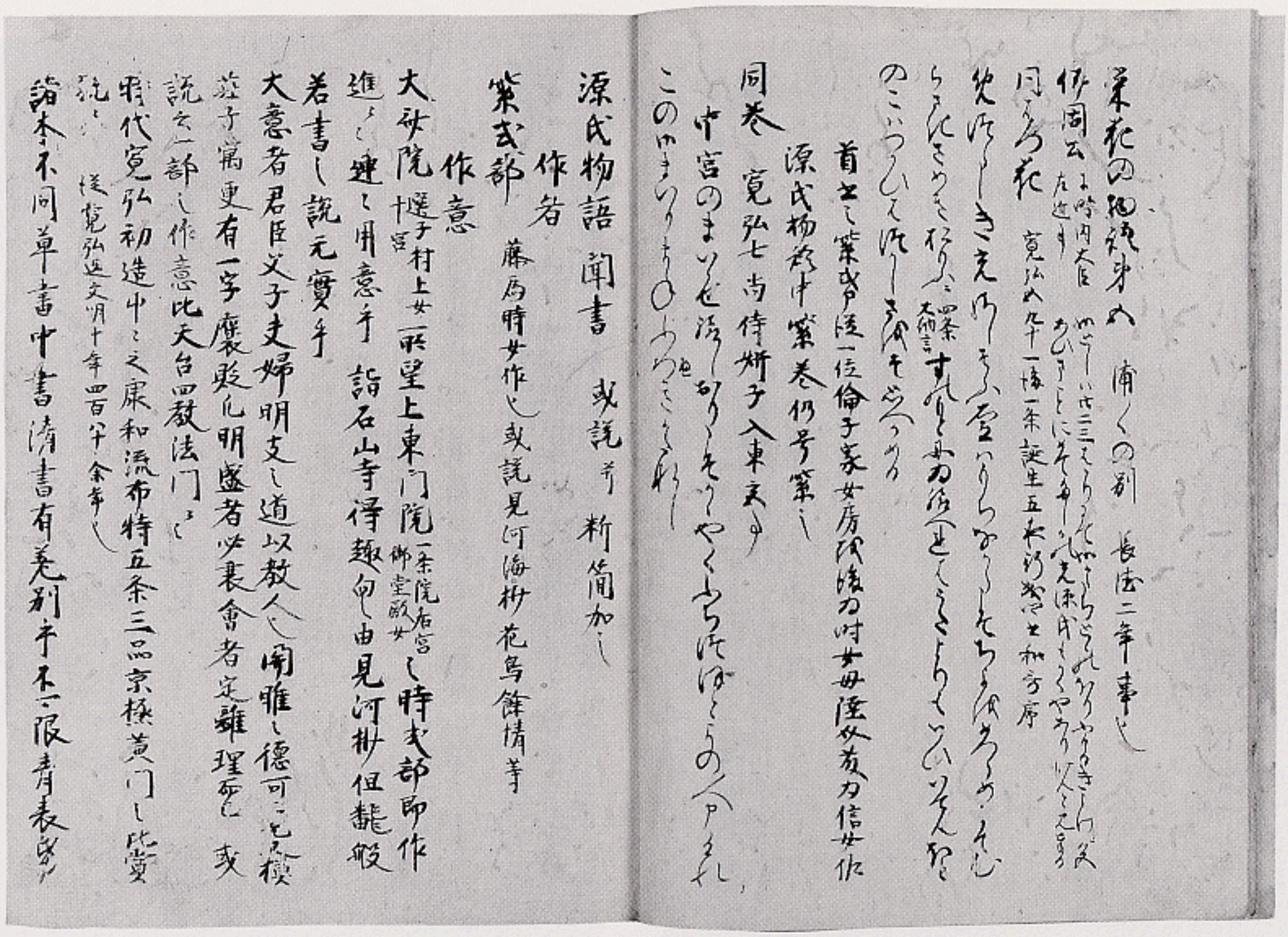
88　三源一覧



87-1　河海抄〔抄出〕



87-2　花鳥余情〔抄出〕



源氏物語 聞書　或説ニ 新簡加し

作者

紫式部　藤原為時女作し或説見河海抄花鳥餘情等

作意

大弁院（選子内親王 村上女一条院皇后 上東門院 一条院后宮 御堂殿女）し時式部即作進ゝし連し用意手詣石山寺得趣句し由見河抄但龍般若書し説元實手

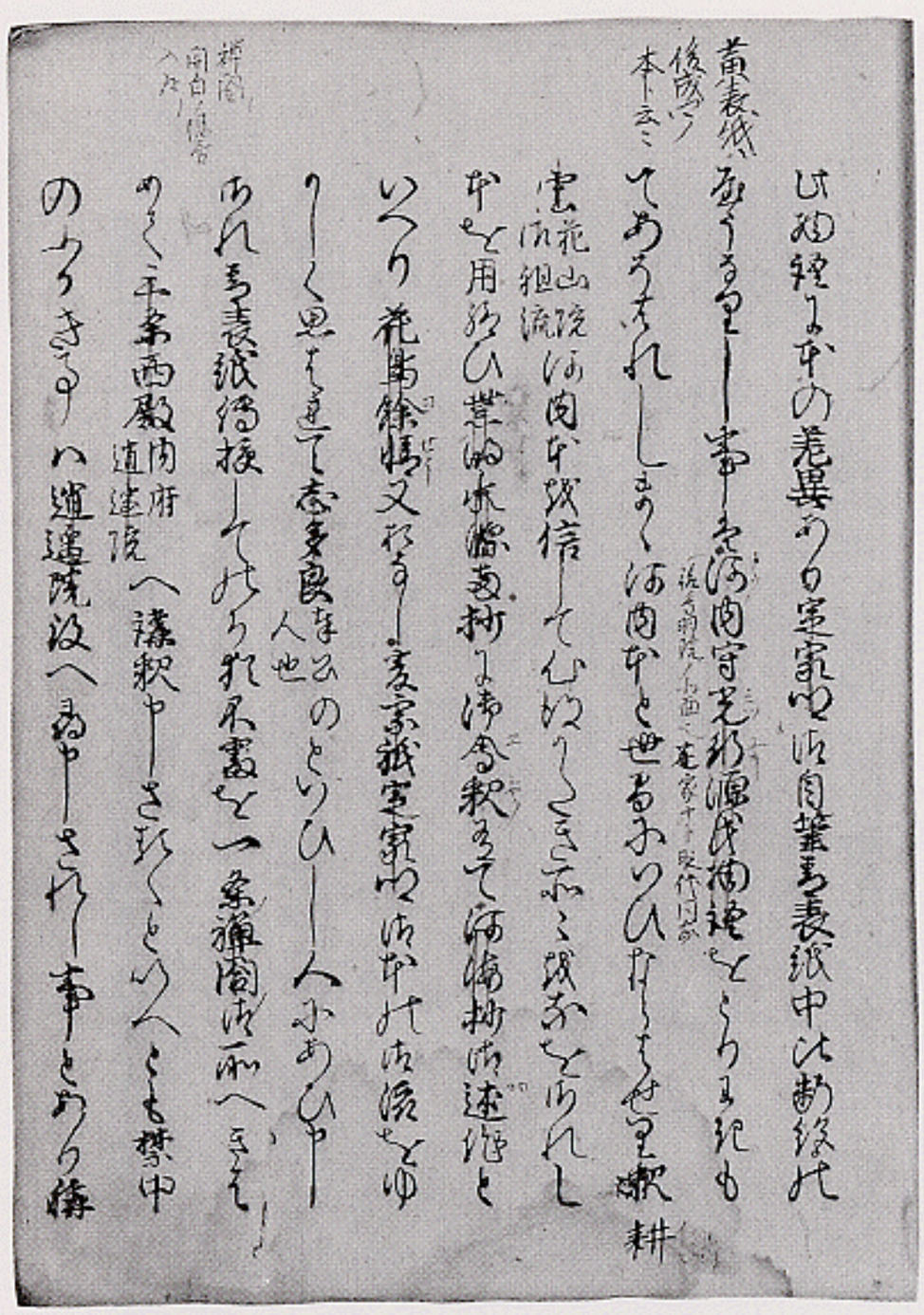
大意者君臣父子夫婦明友し道以教人し開雖し德可二已稜

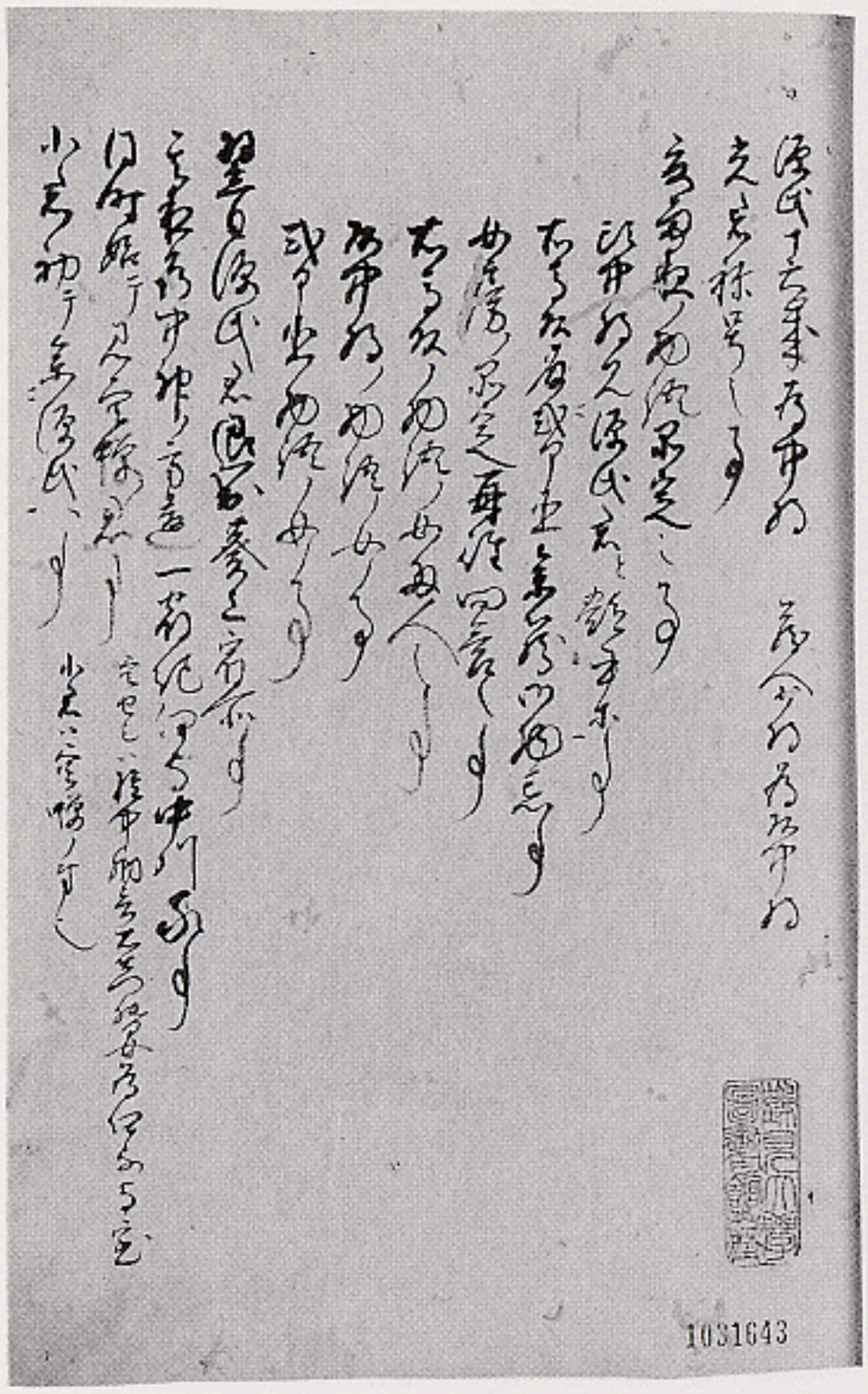
荘子寓更有一字廛貶化明盛者必衰舎者定離理歟　或説し一部し作意比天台四教法門ゝ

唐代寛弘初造中ゝ之康和流布特五条三品京極黄門し監

説ゝ　按寛弘迄文明十年四百年余年

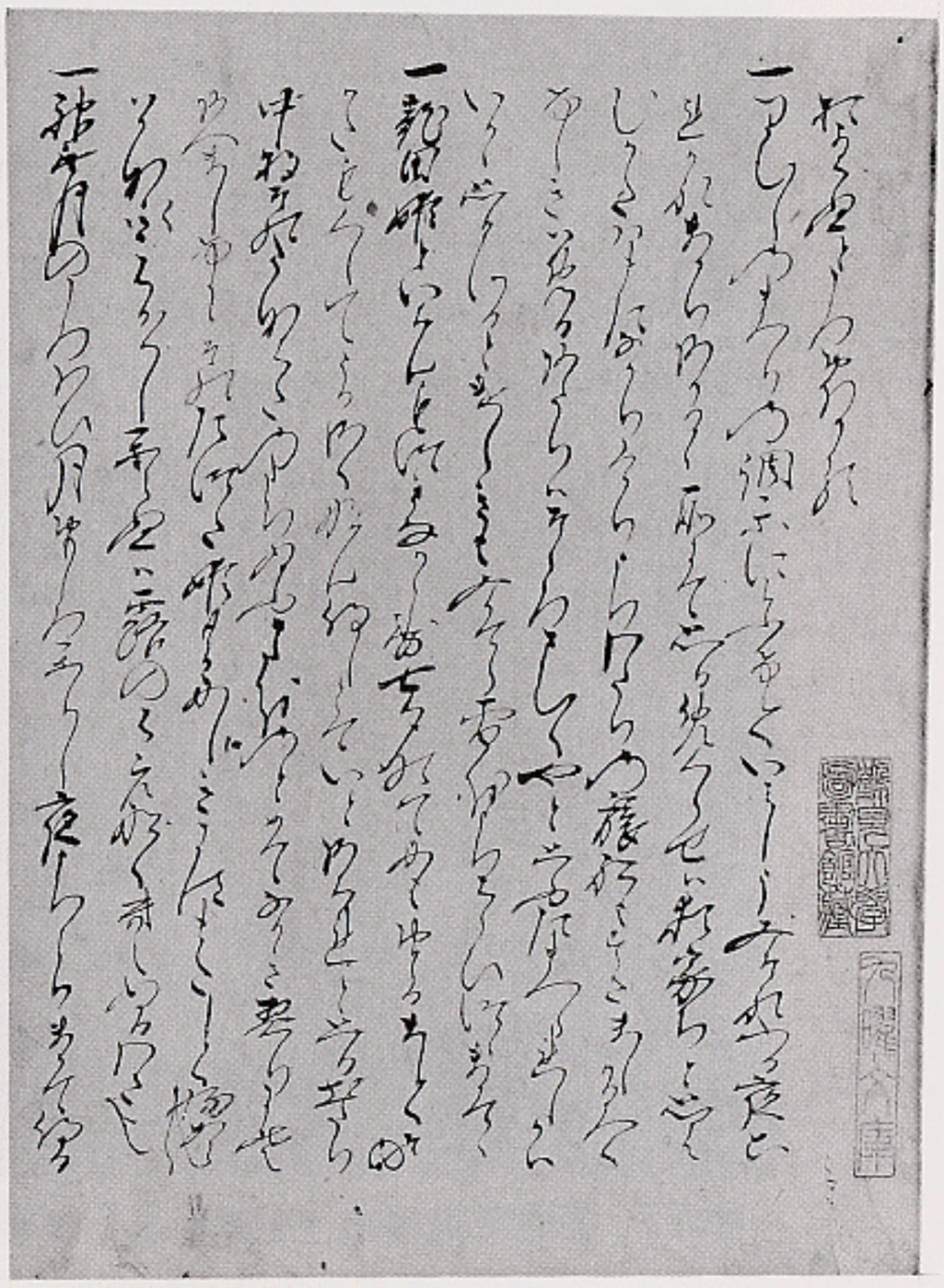
諸本不同草書中書清書有差別中不二限青表紙



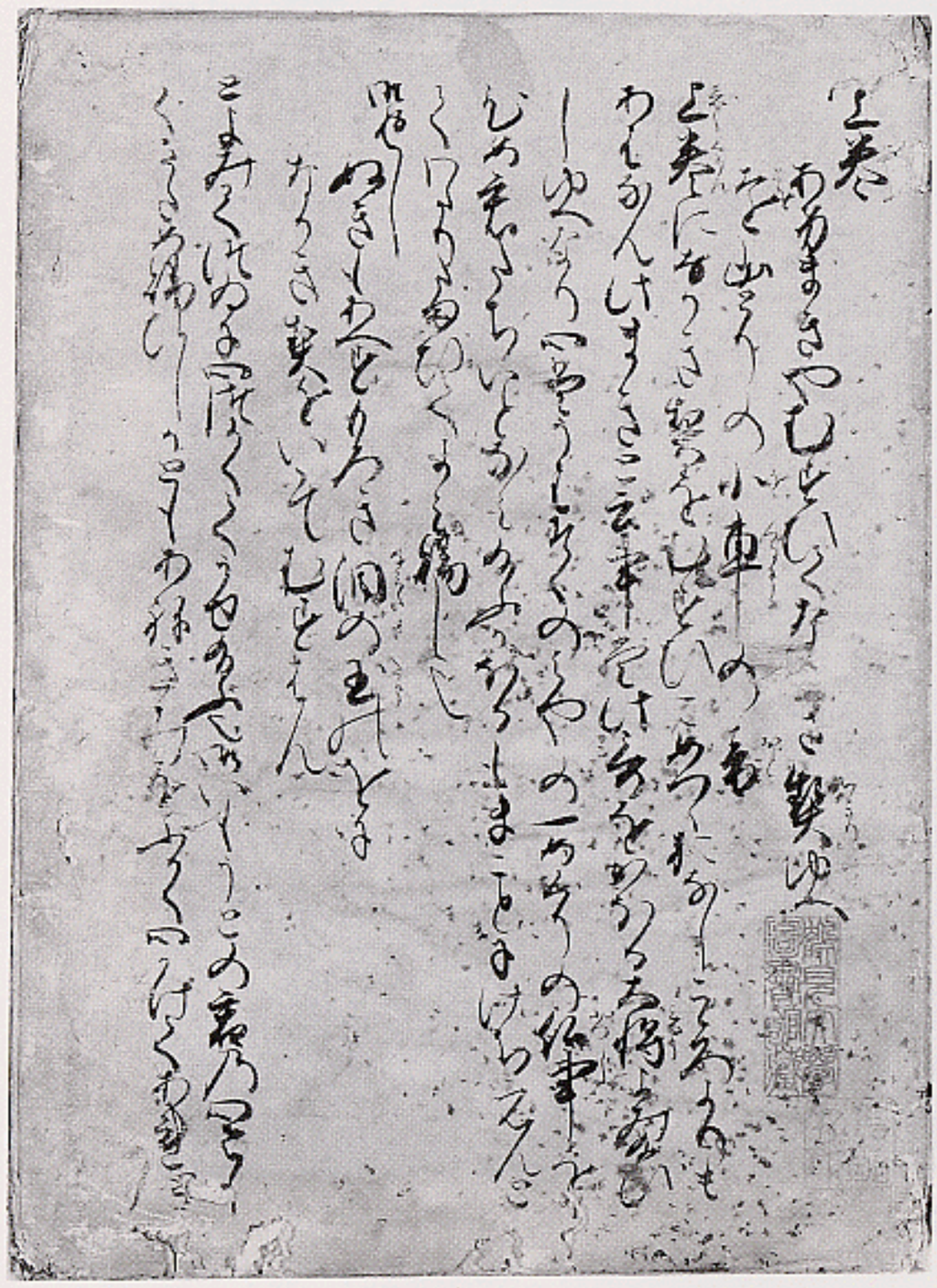


90　源氏物語抄（紹巴抄）　古活字版

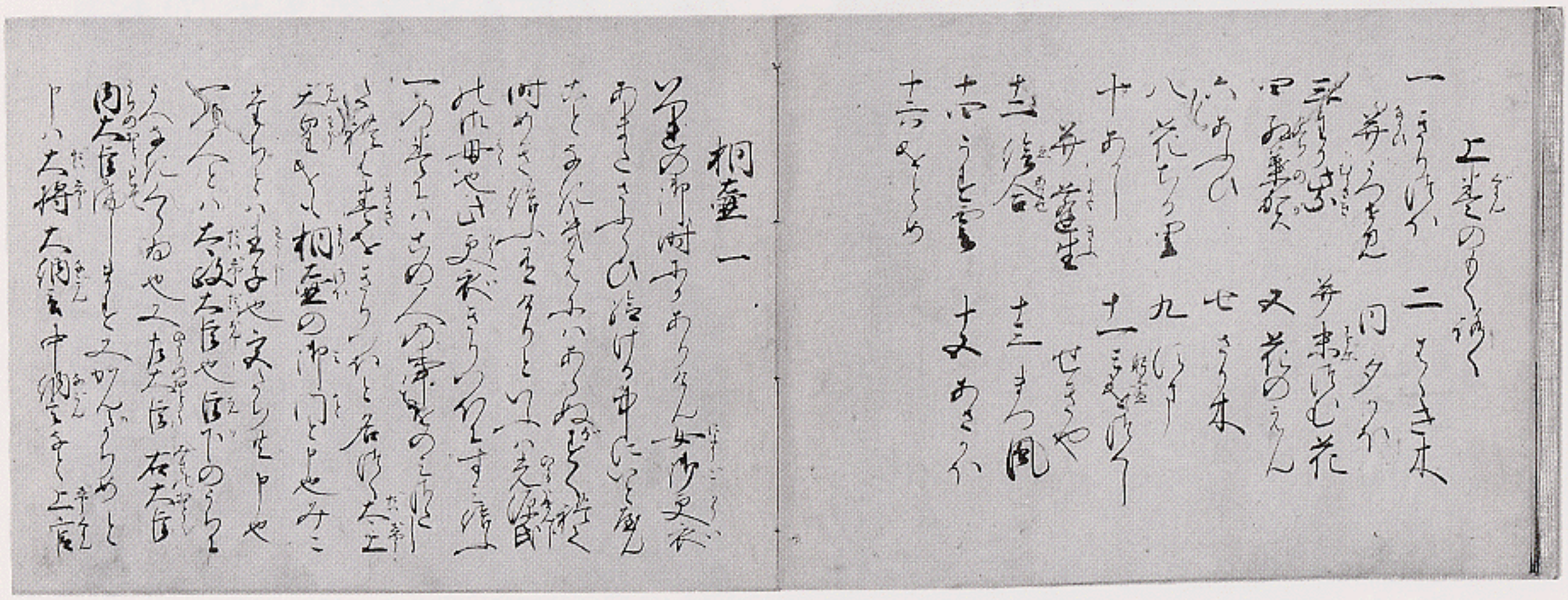
91　岷江入楚　帚木巻



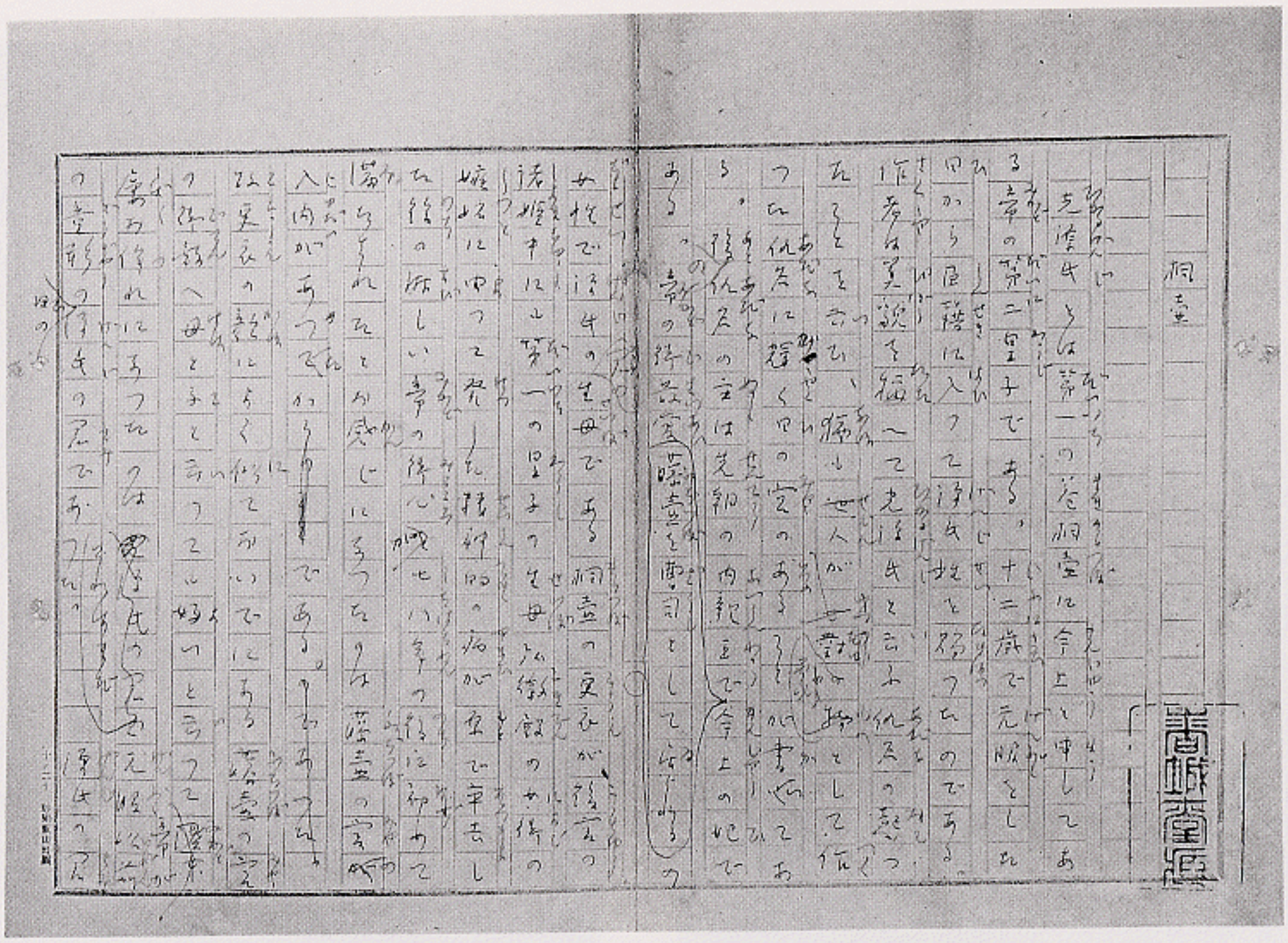
92　紫塵愚抄



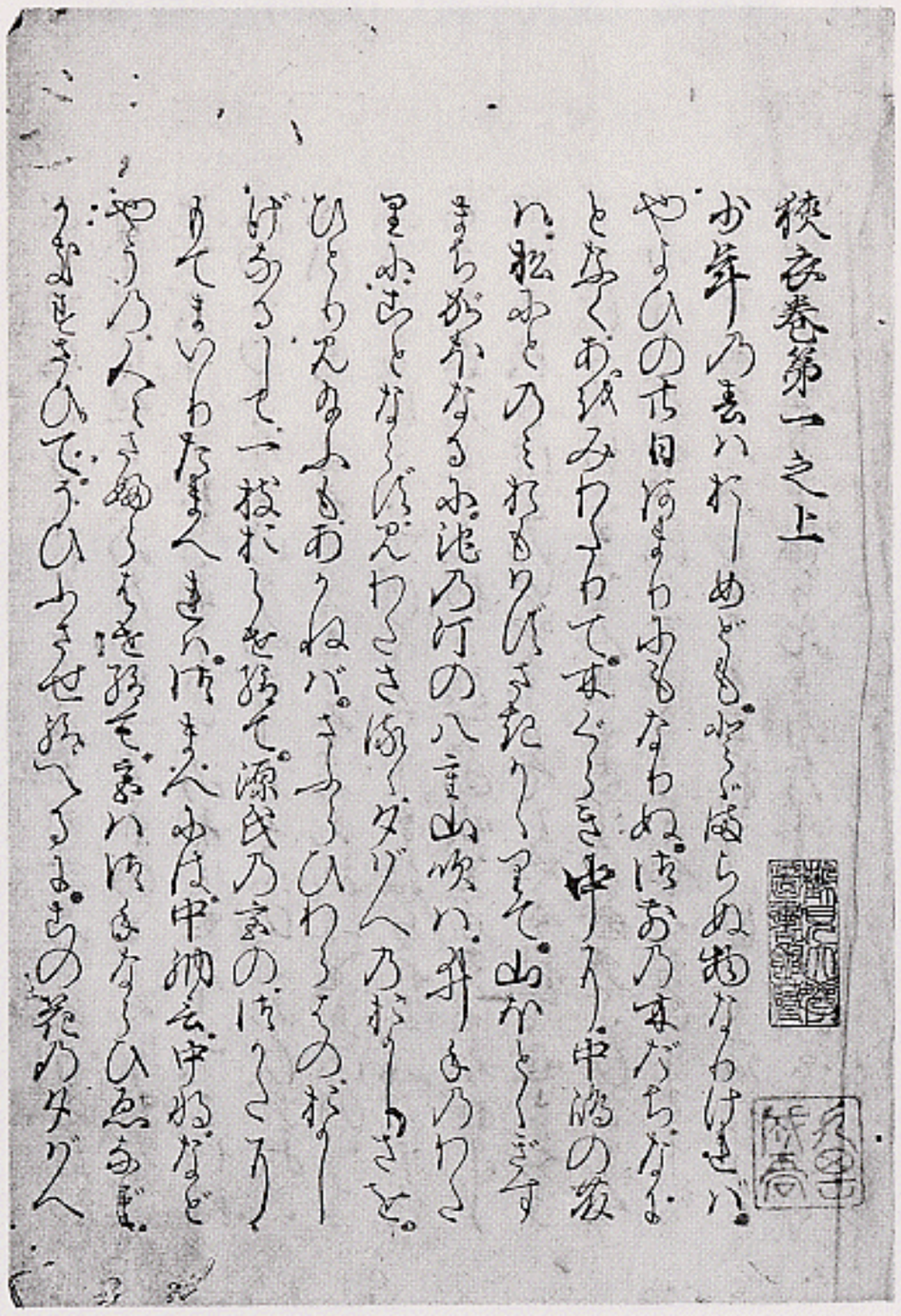
94　源概集（源氏小鏡）（伝中院通勝筆）



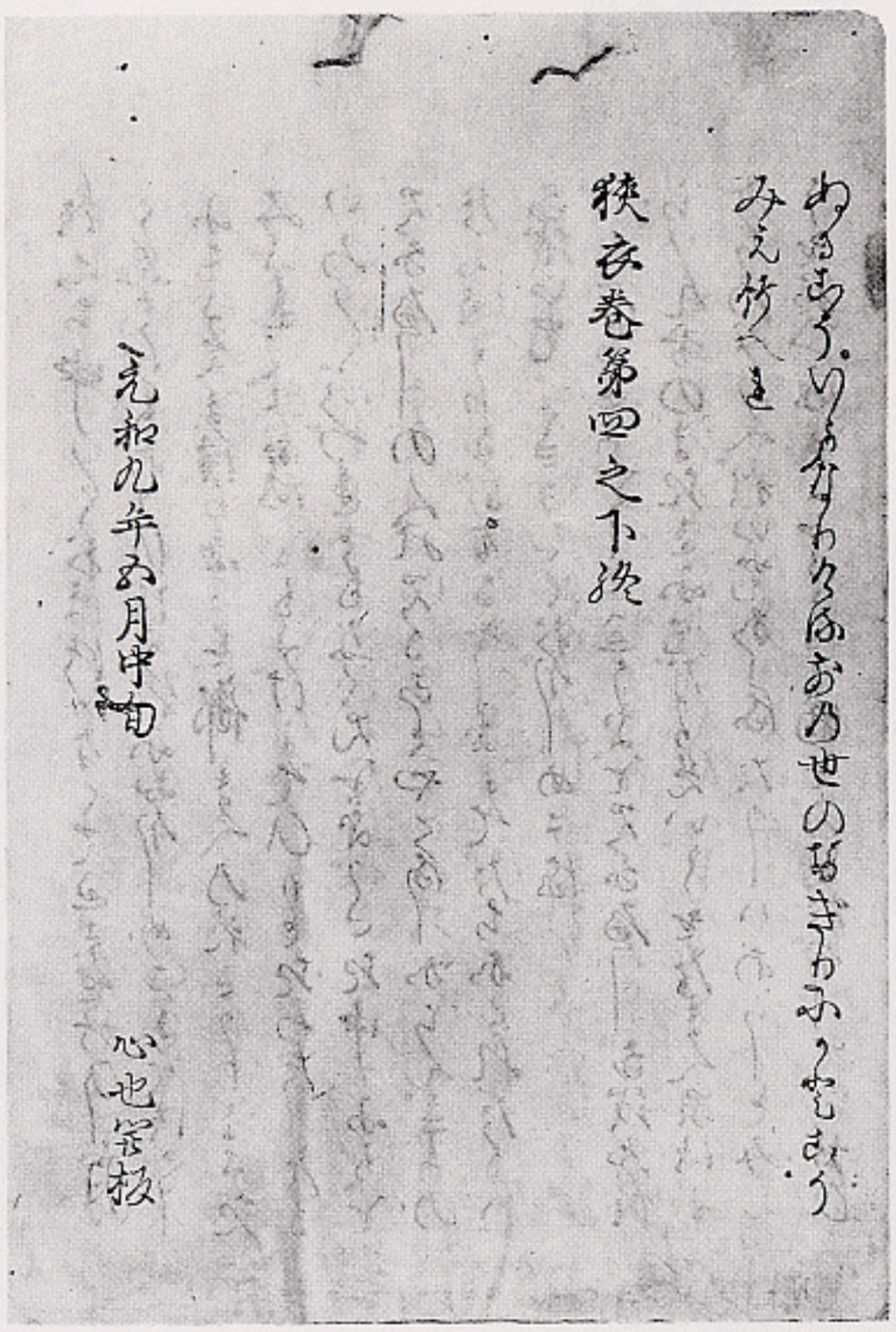
93　源氏物語抜書抄（源氏大鏡）



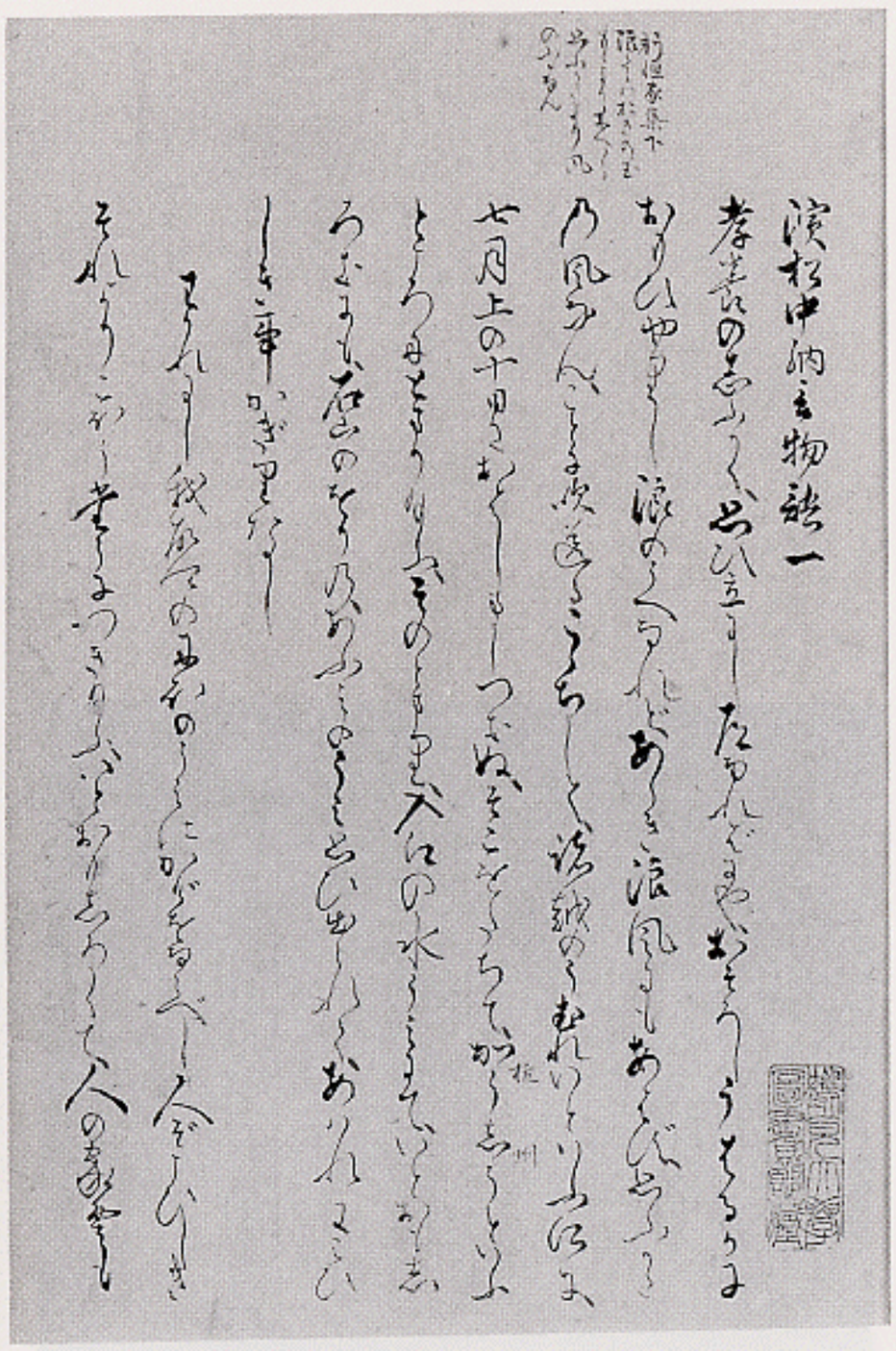
参考1　梗概源氏物語（与謝野晶子自筆草稿）



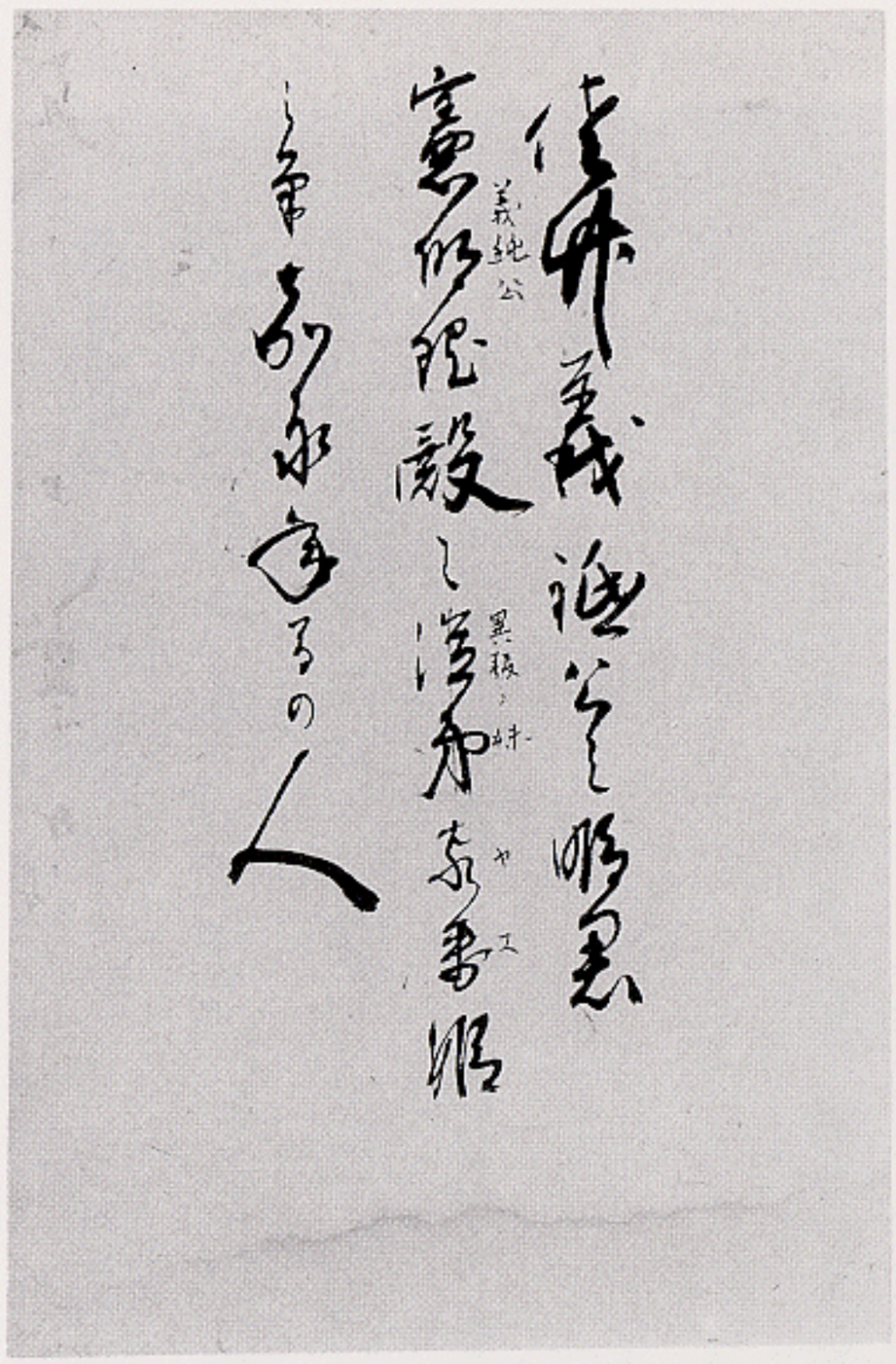
97-1　狭衣物語　古活字版



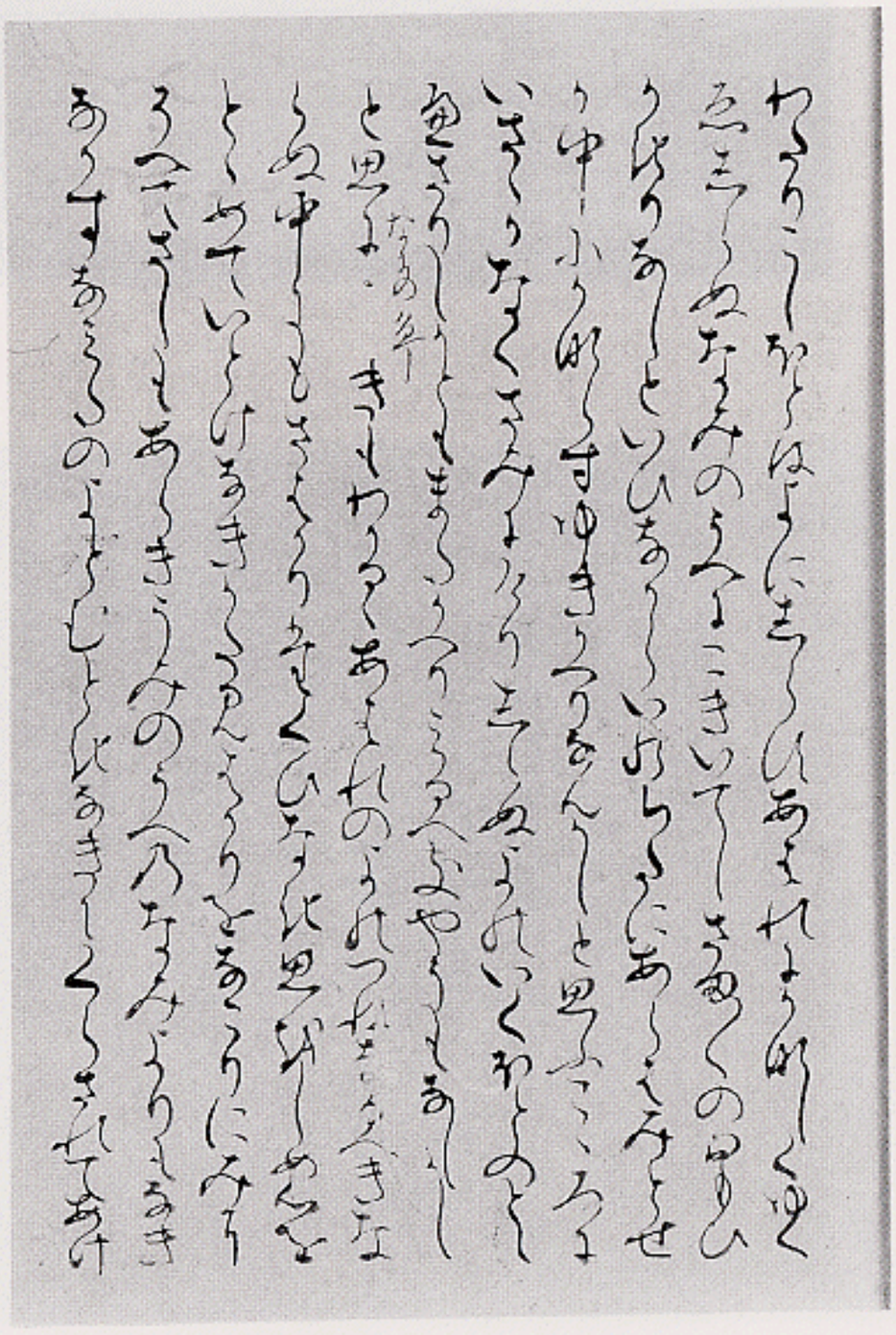
97-2　狭衣物語



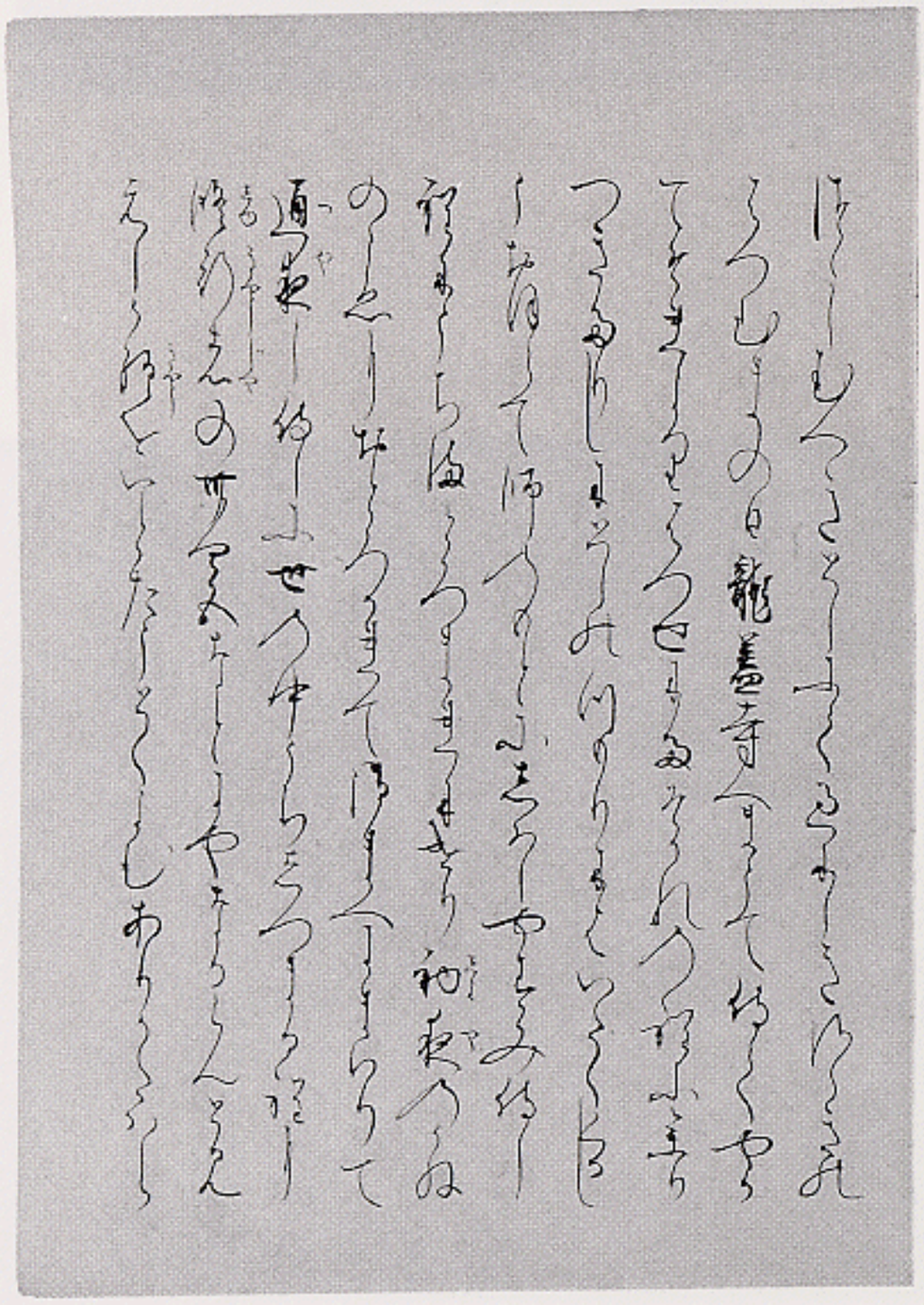
100-1　浜松中納言物語　　安田躬弦書入本



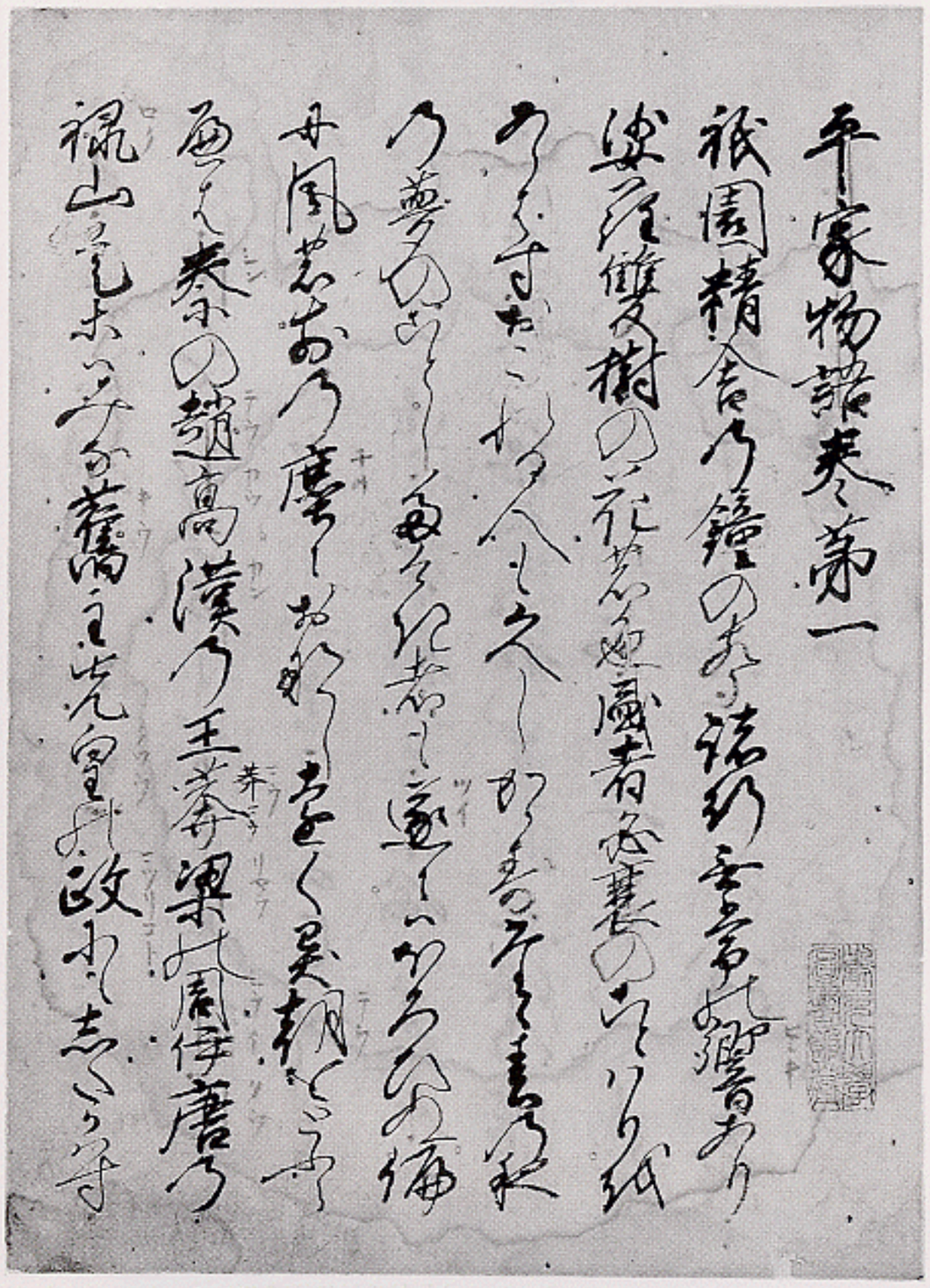
100-2　浜松中納言物語

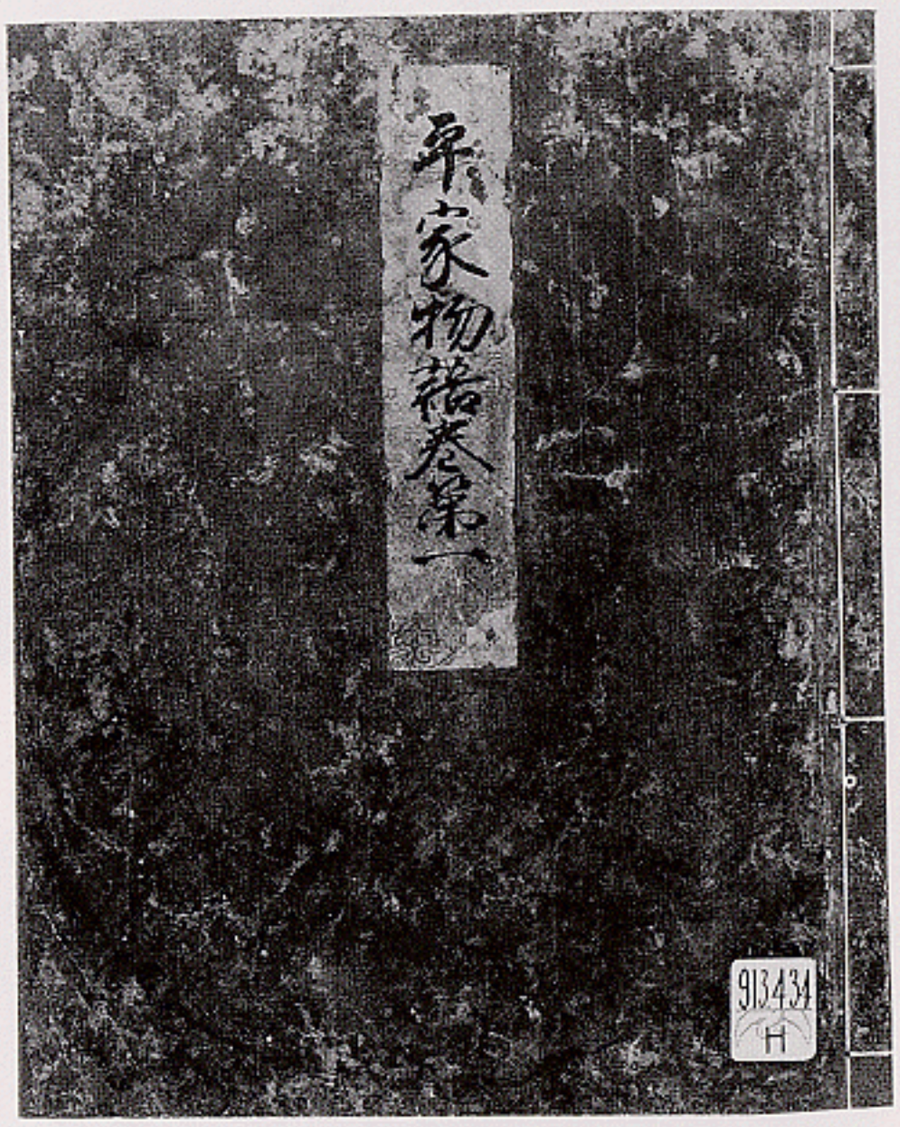


99　浜松中納言物語

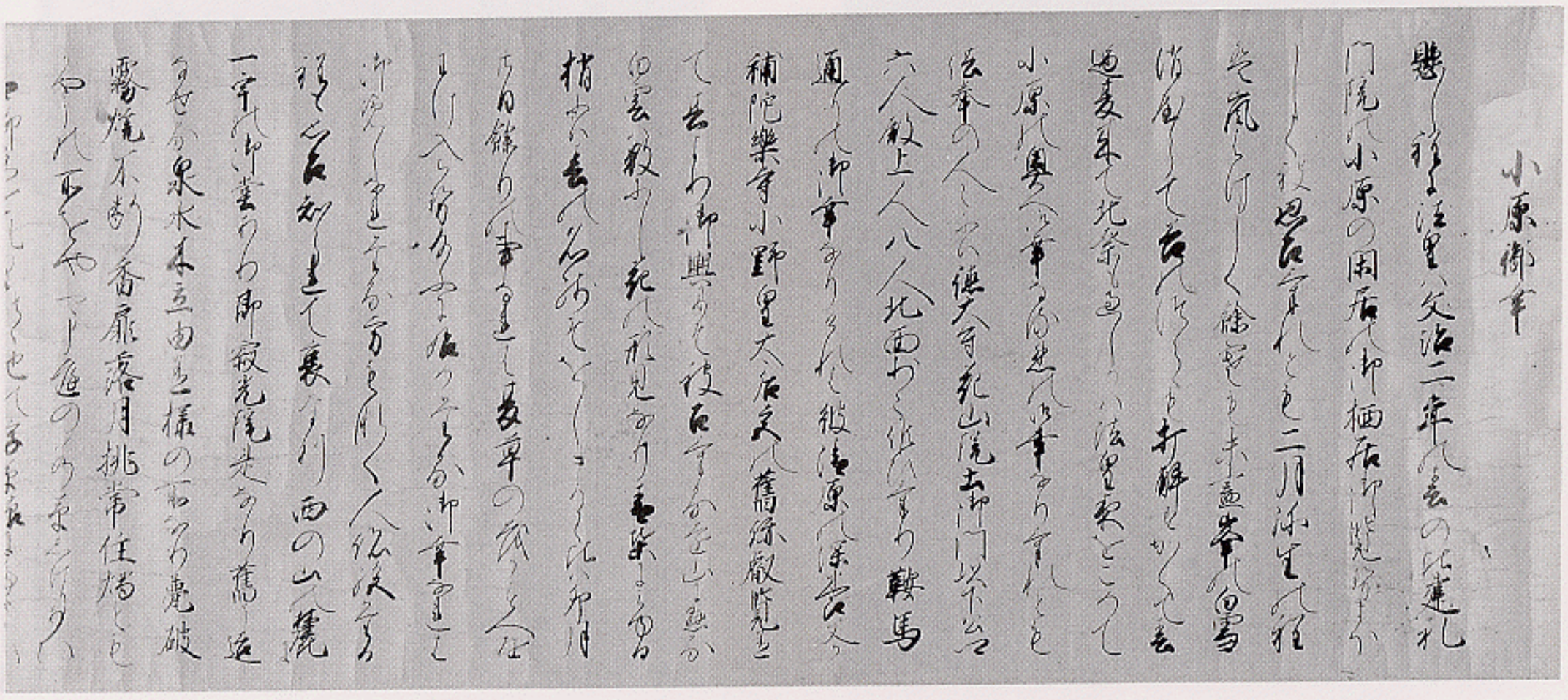


104　水鏡

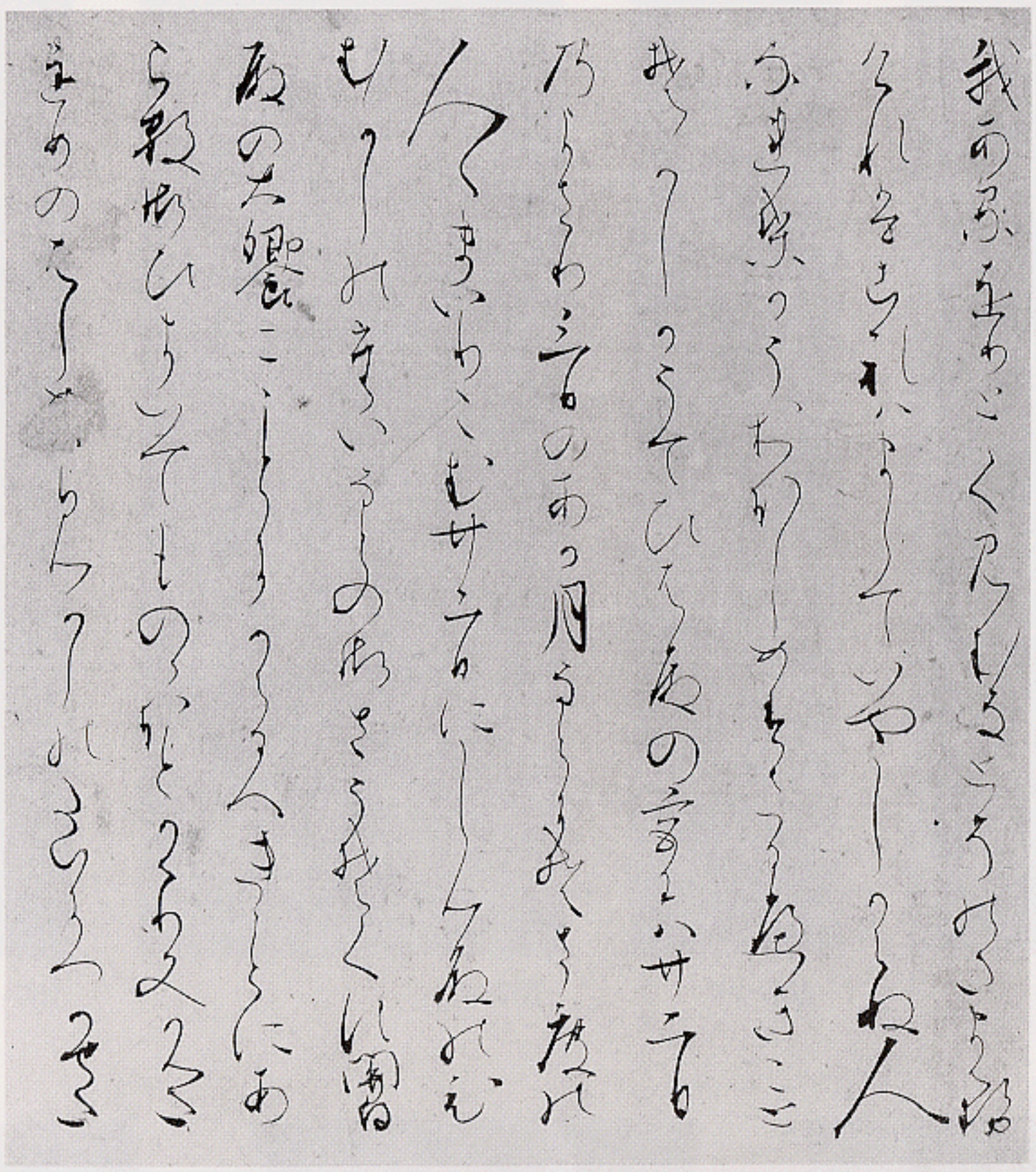




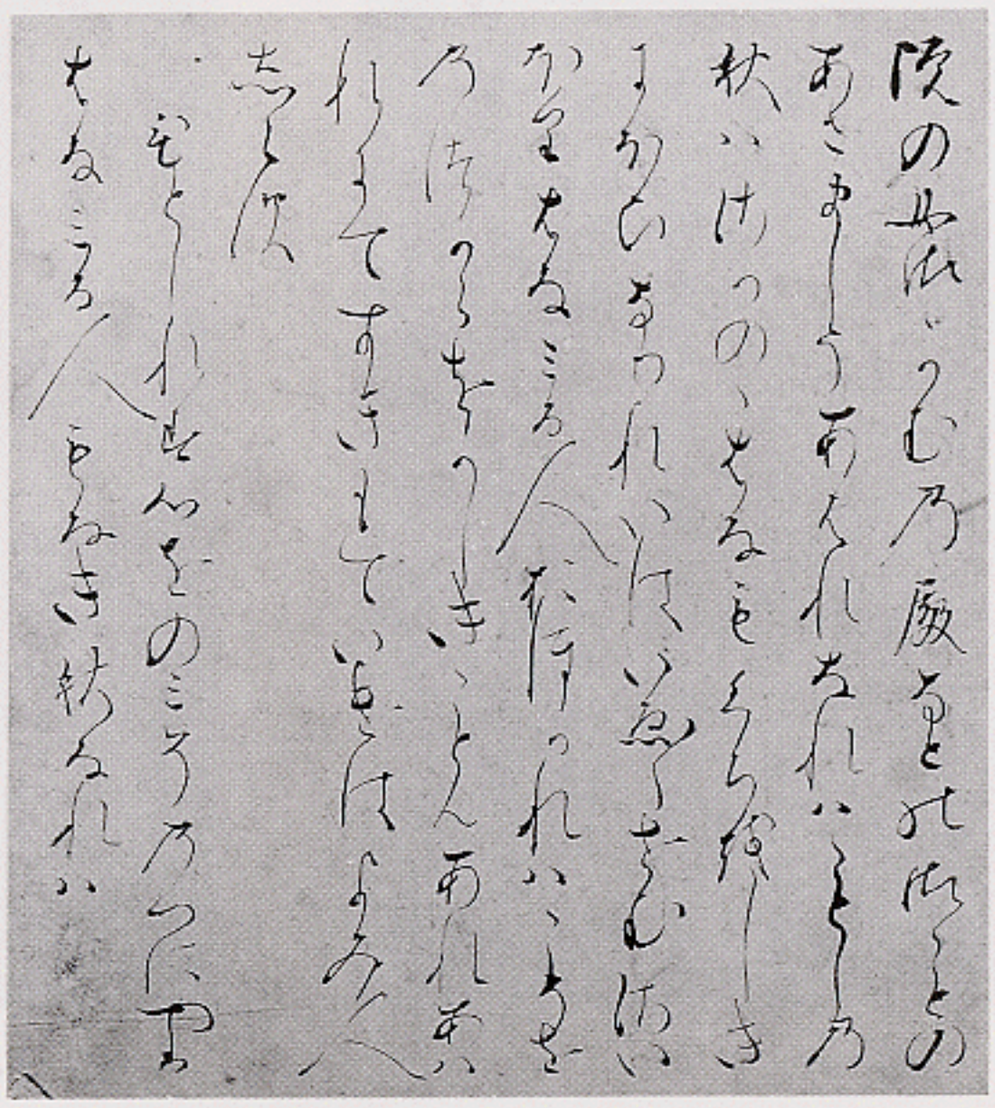
105　平家物語



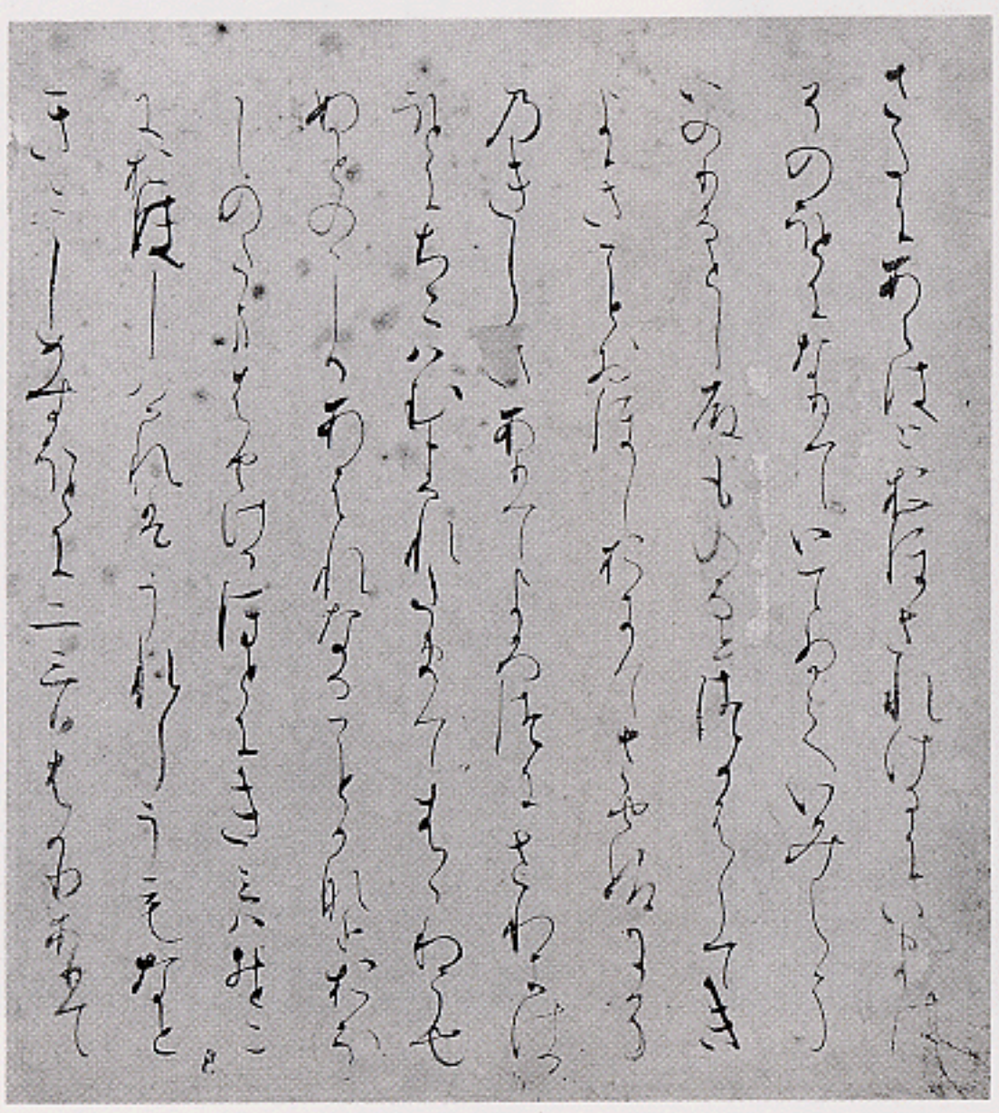
106　平家物語抄出　大原御幸



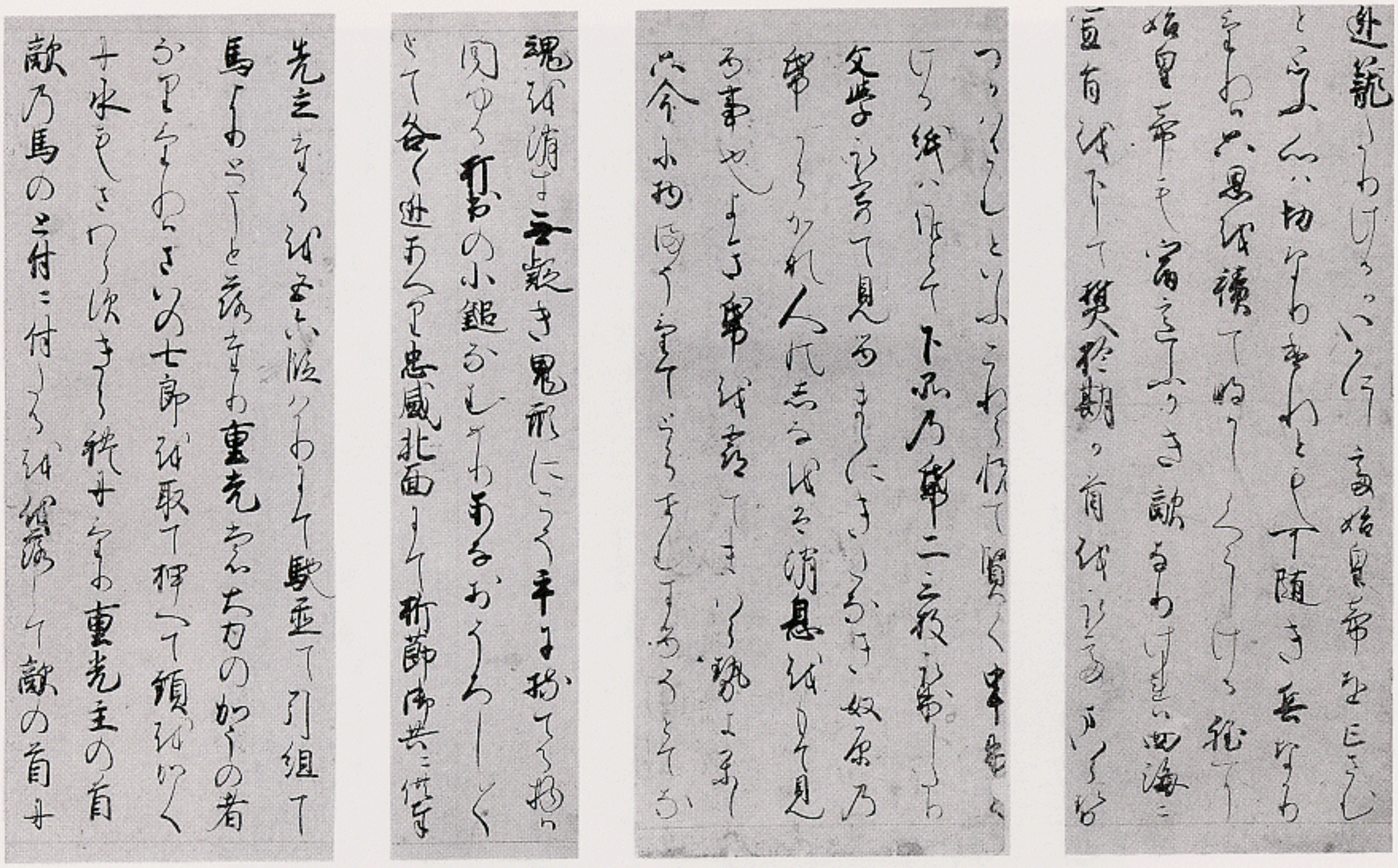
101　栄花物語断簡（伝藤原家隆筆）



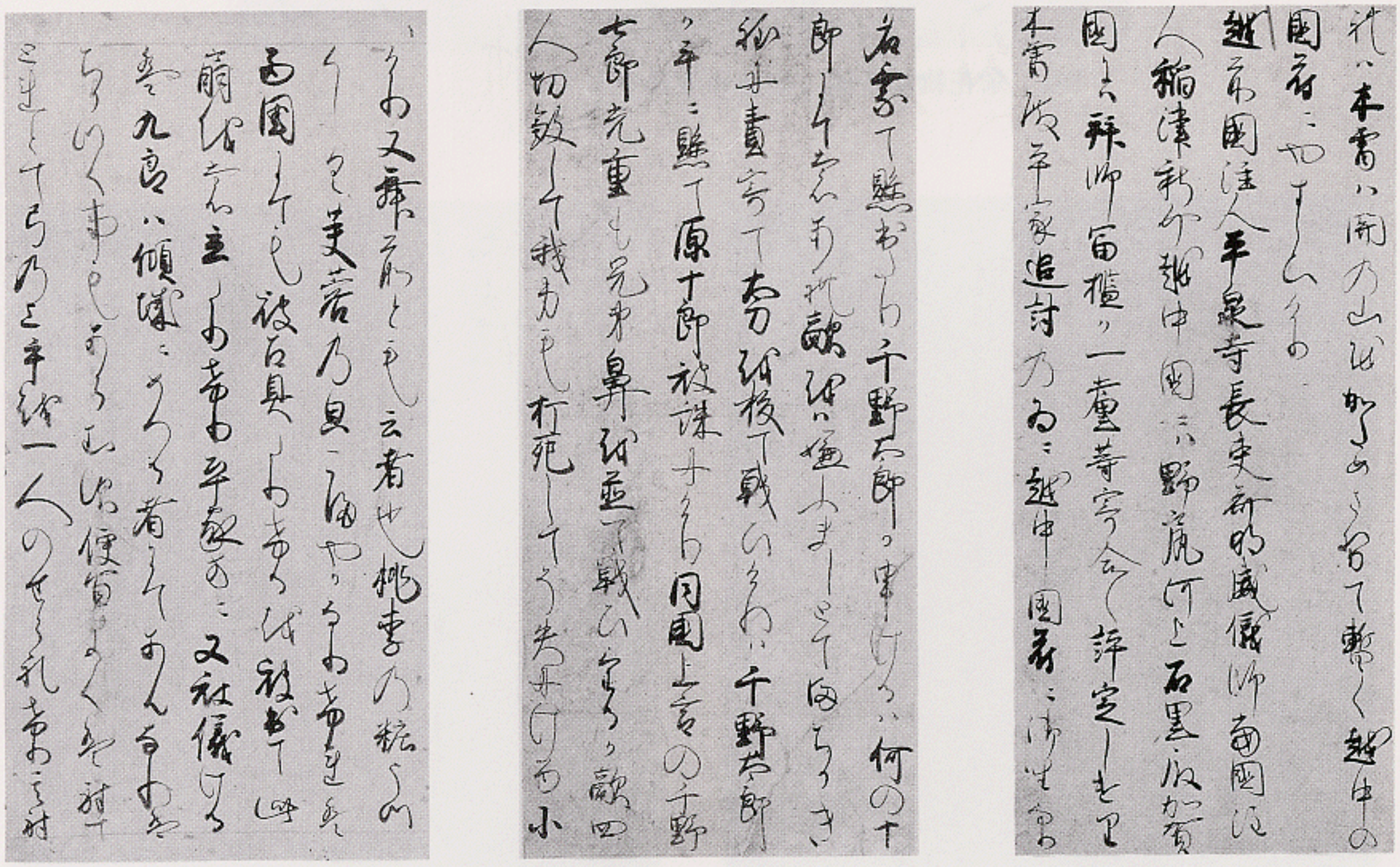
102-イ　栄花物語断簡（伝冷泉為相筆）



102-ロ　栄花物語断簡

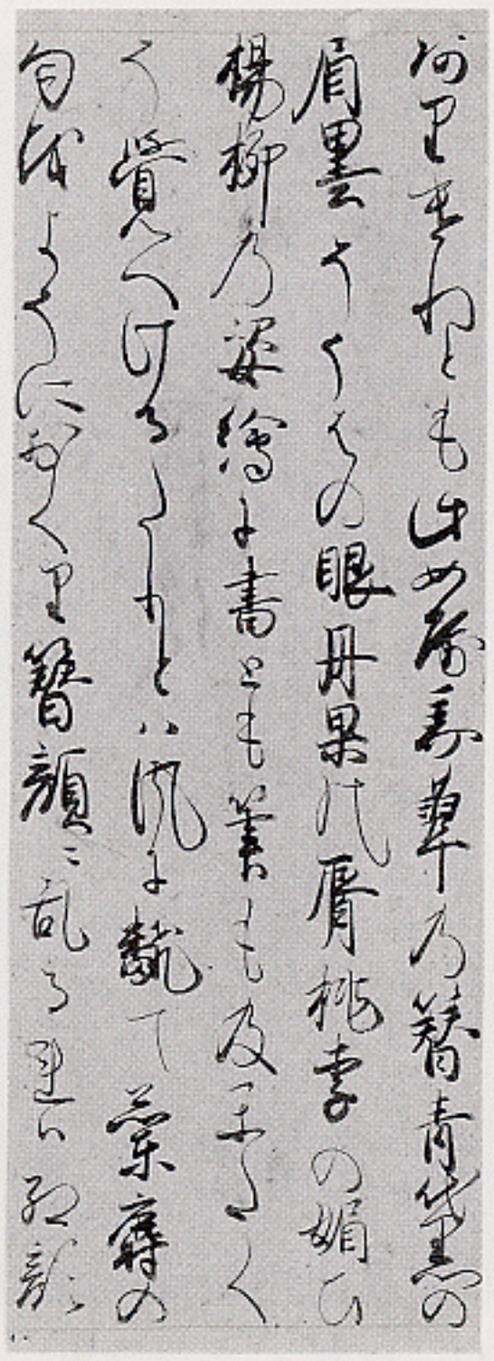


107-イ　107-ロ　107-ハ　107-ニ

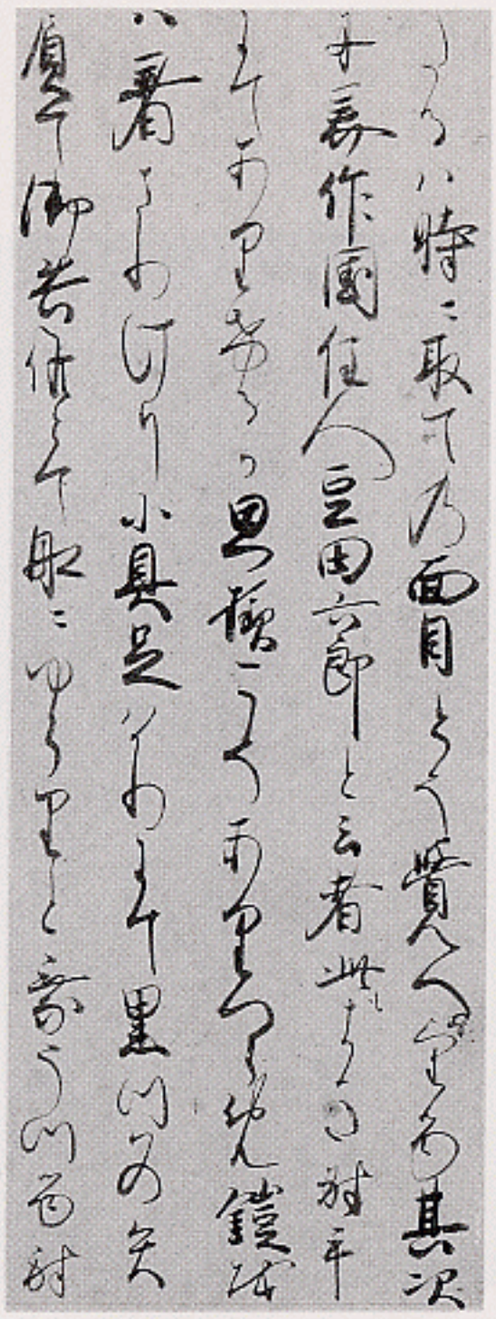


107-ホ　107-ヘ　107-ト

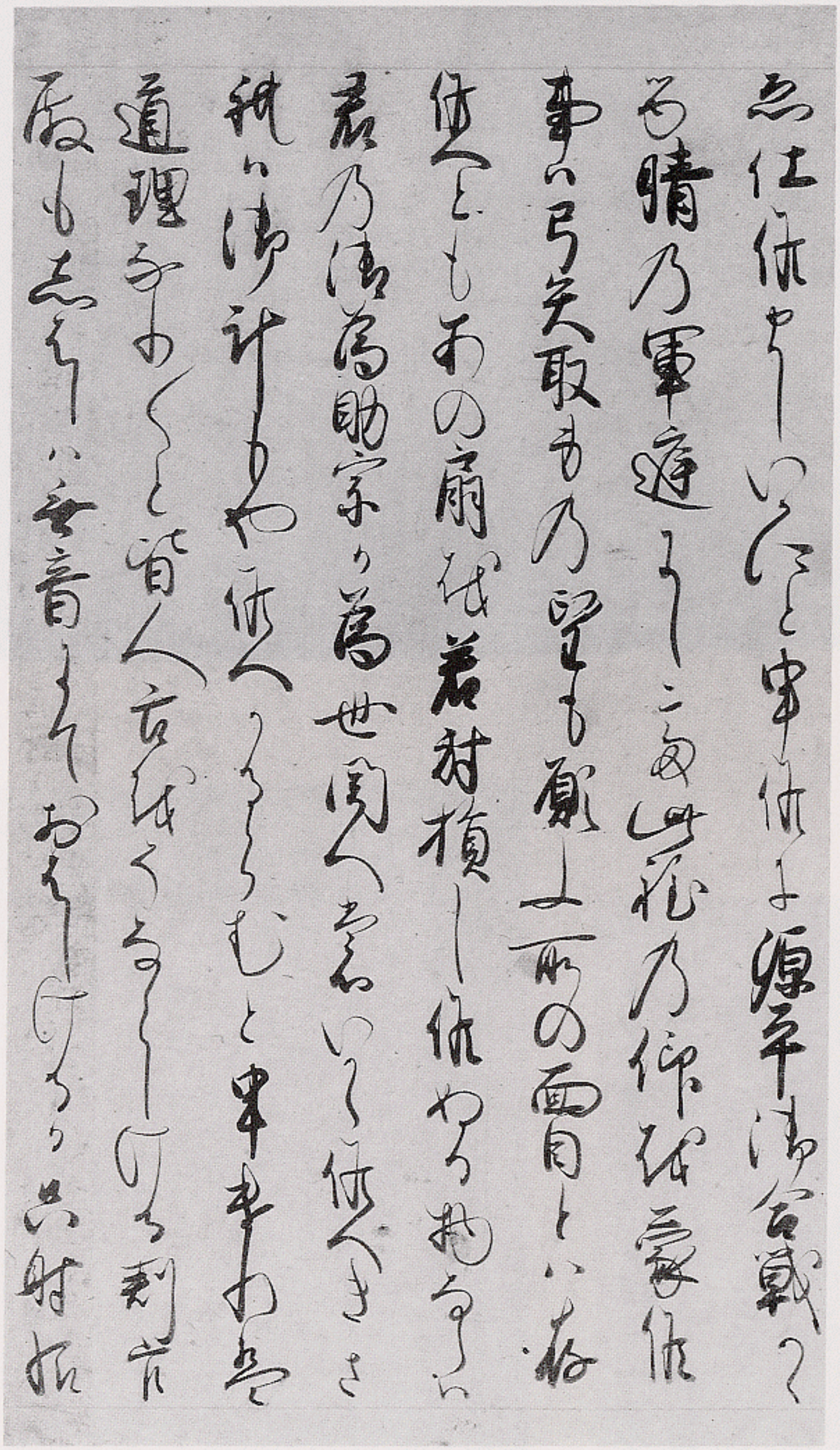
107　異本平家物語断簡（伝世尊寺行俊筆）



107-リ

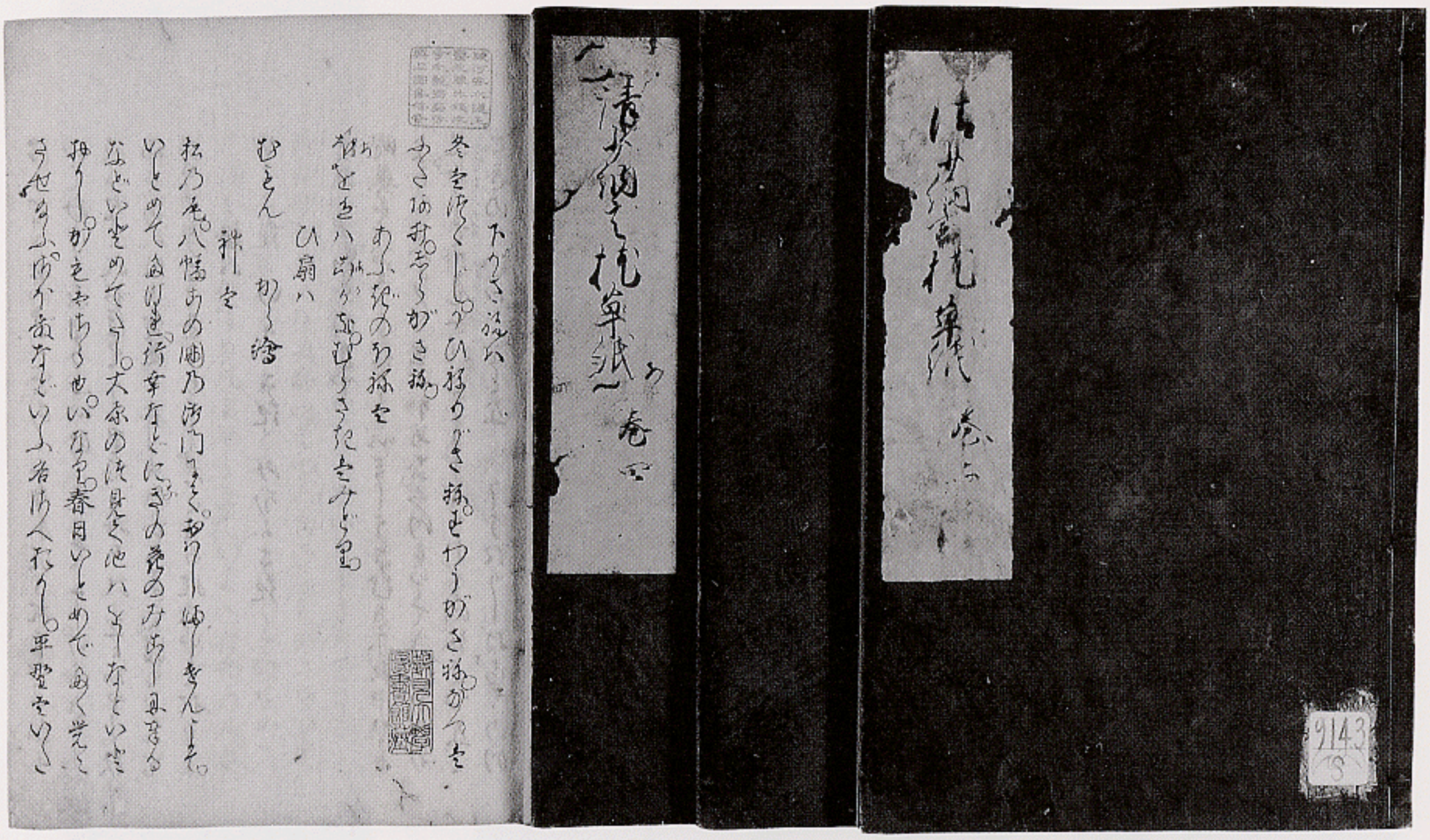


107-ヌ

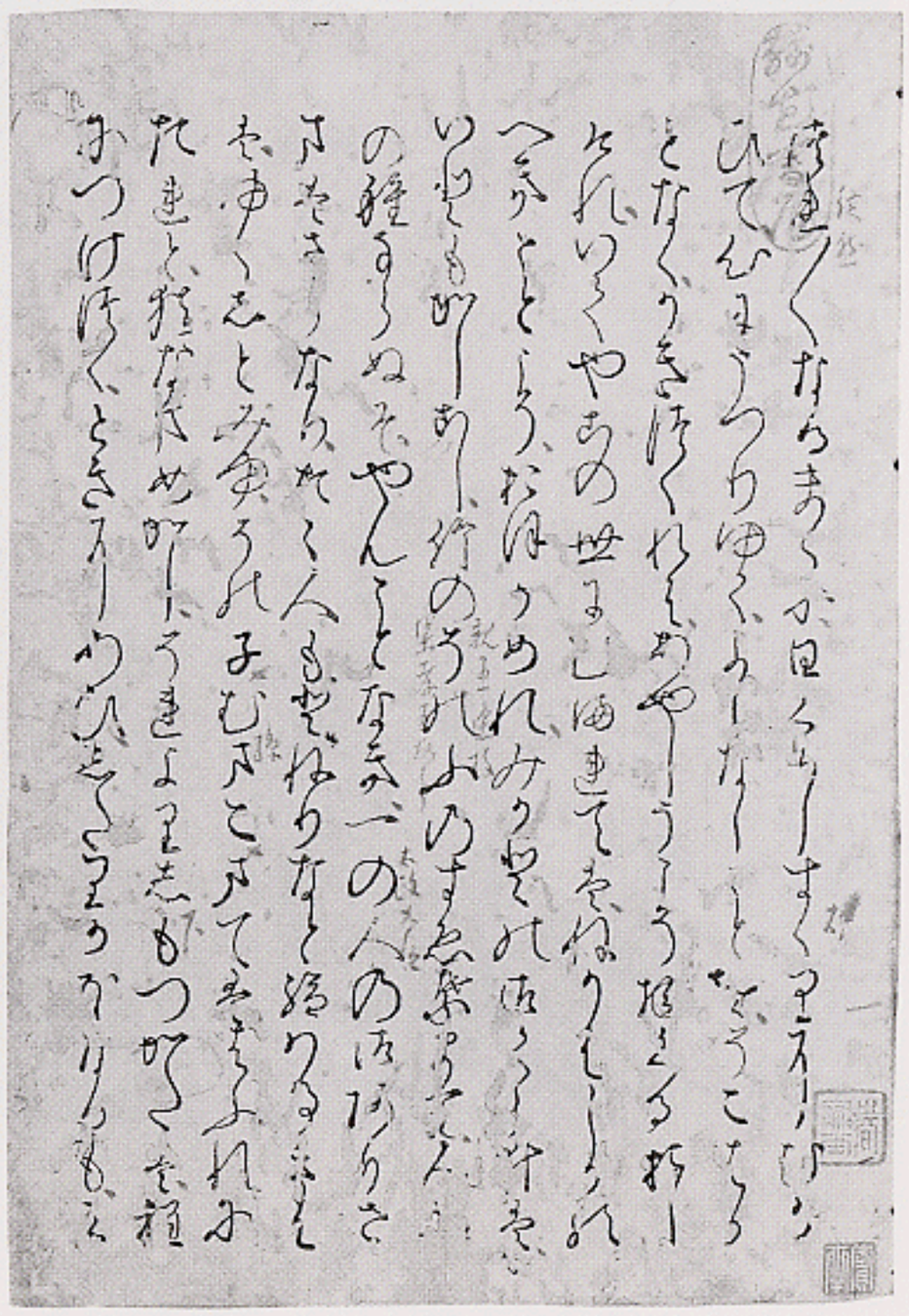


107-チ

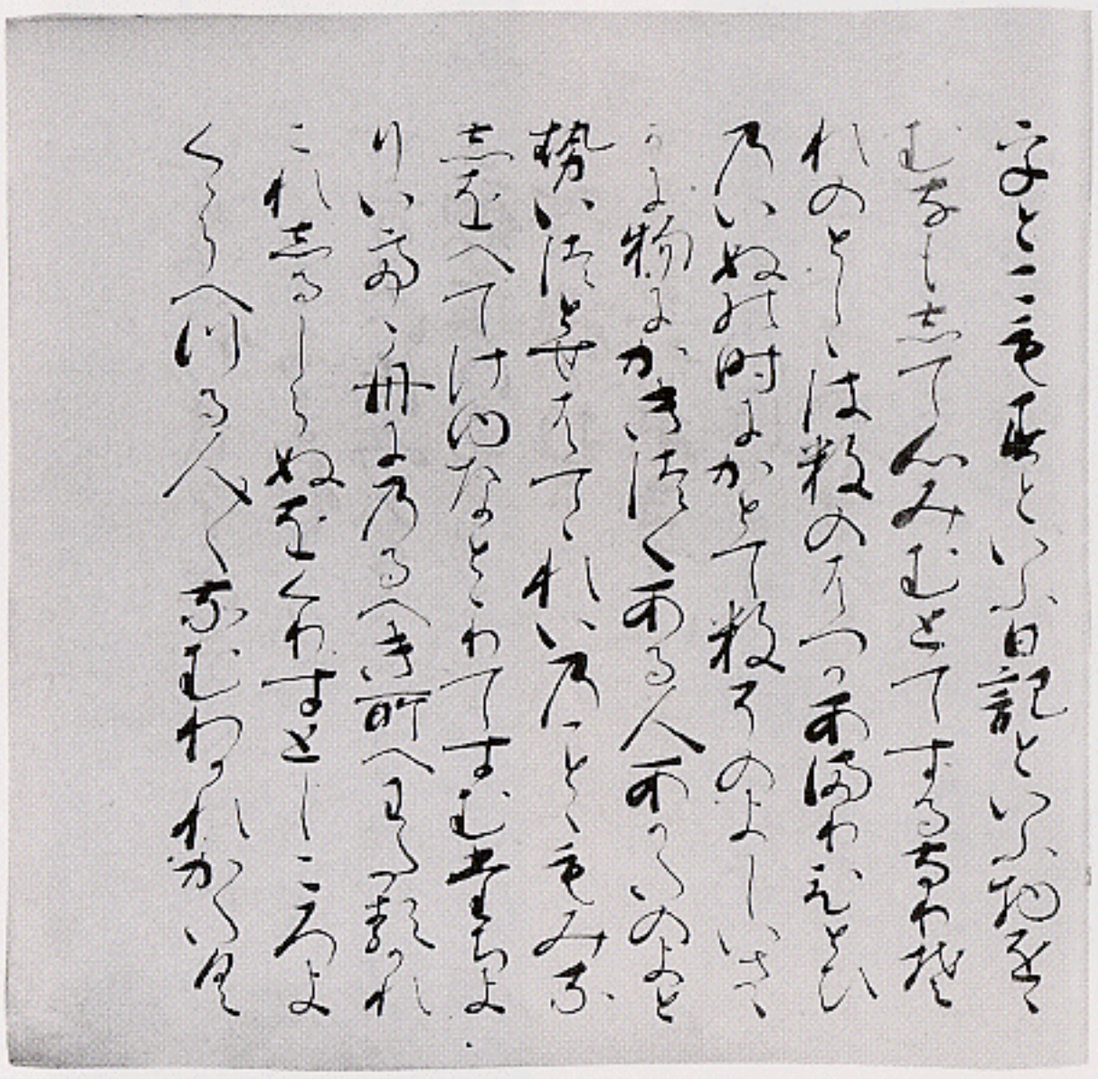
107　異本平家物語断簡（伝世尊寺行俊筆）



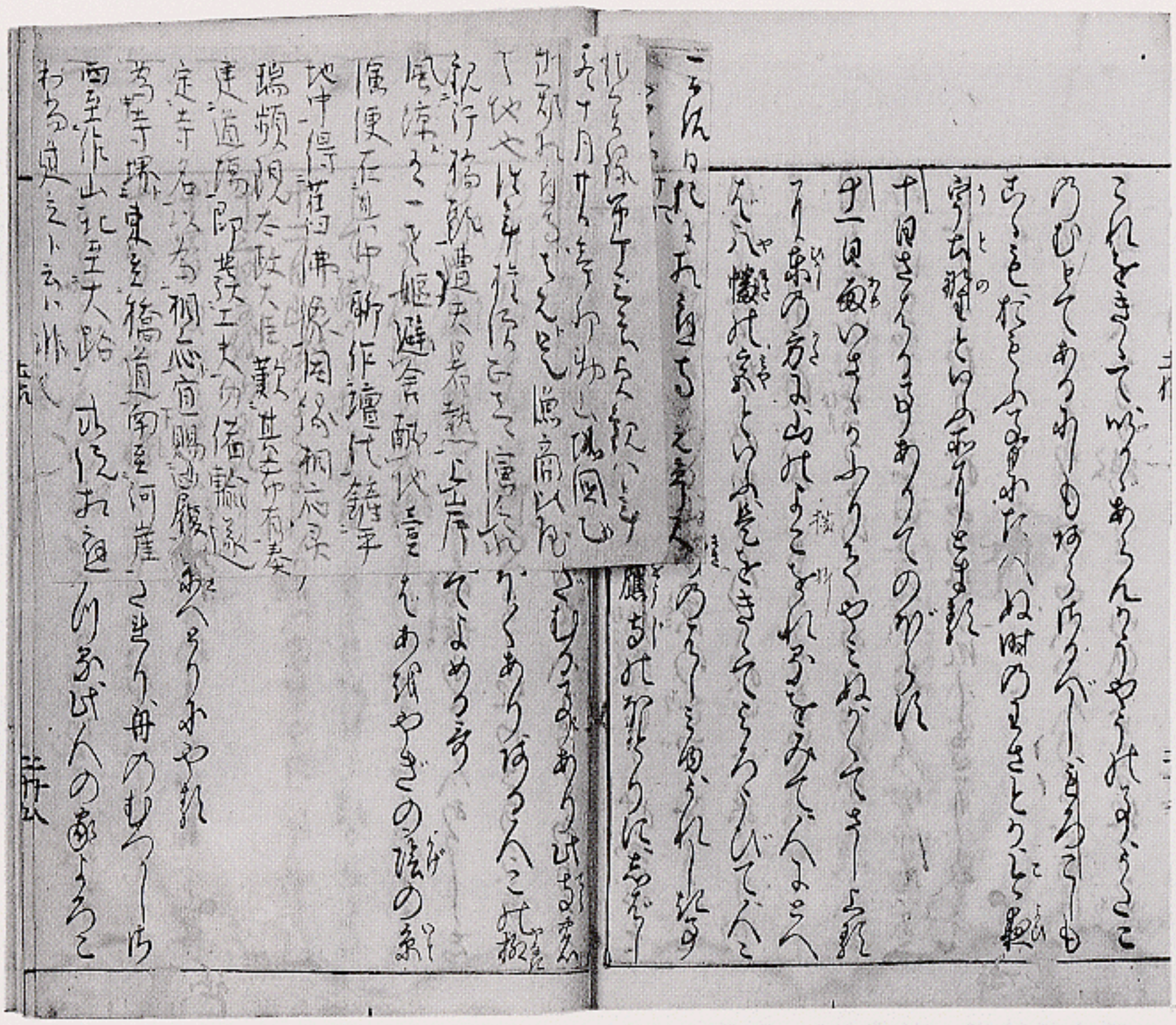
111　枕草子 古活字版



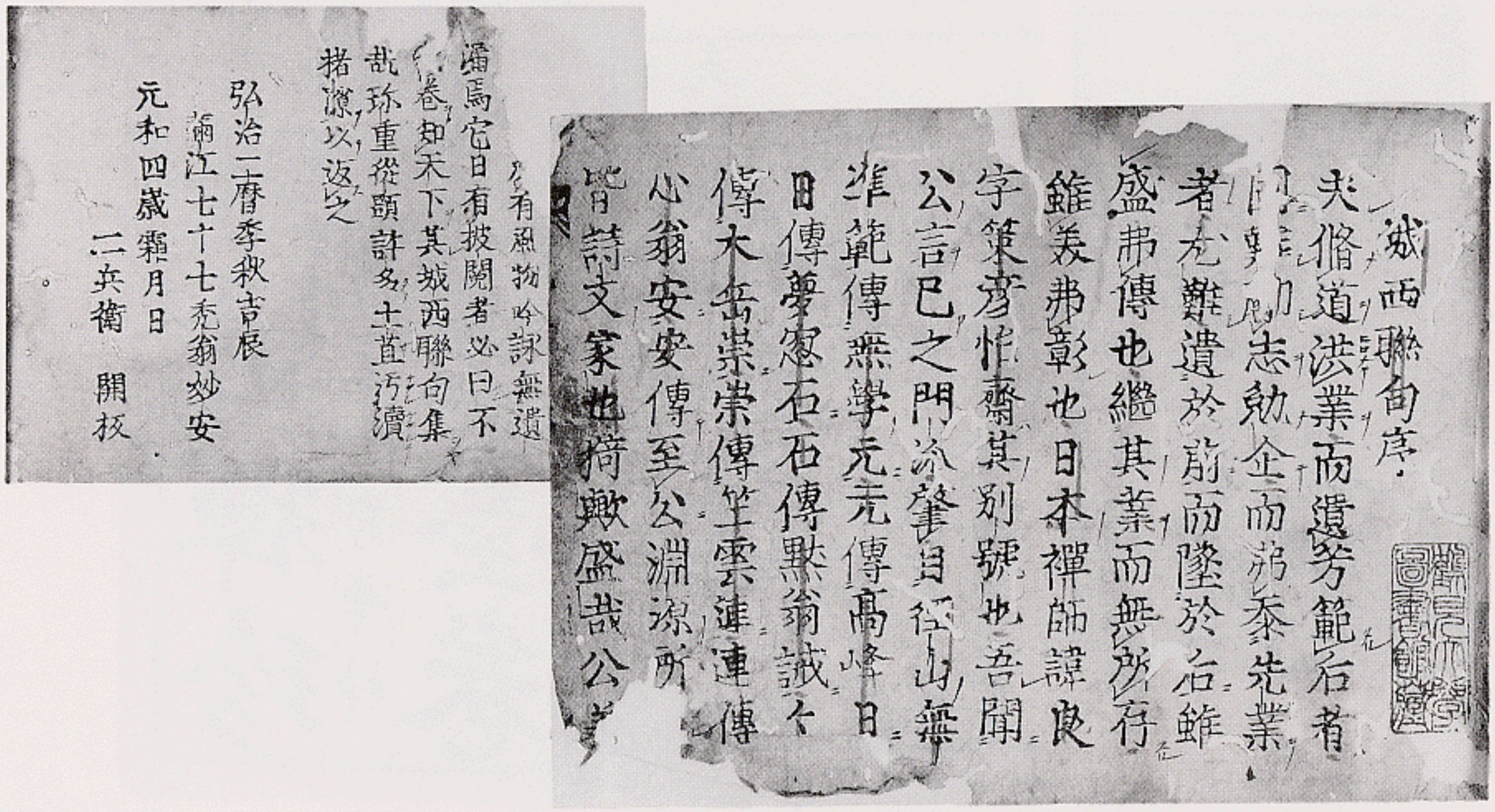
112　徒然草　巻上　古活字版



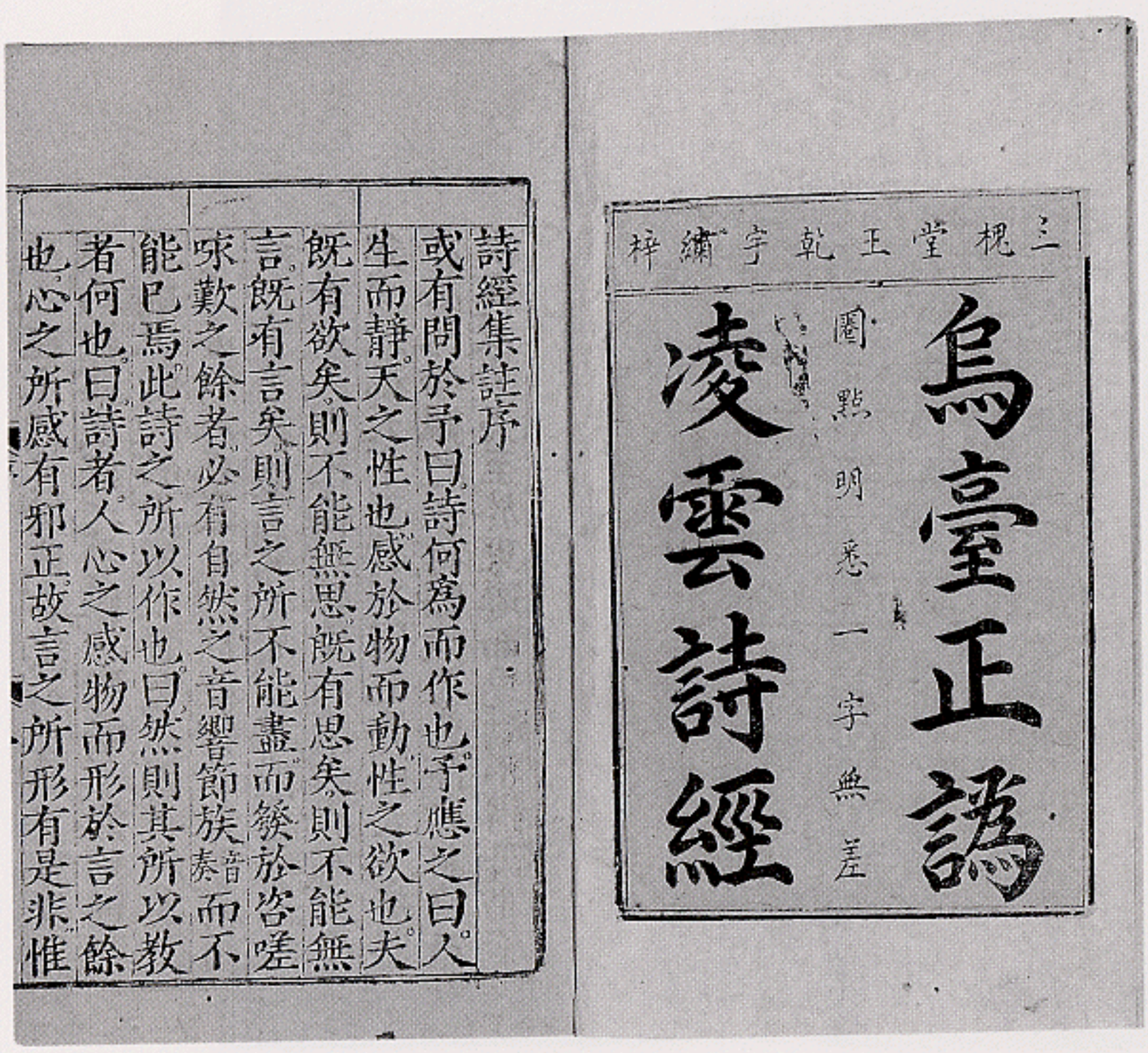
113　土佐日記　藤原定家筆臨模本（伝冷泉為広筆）



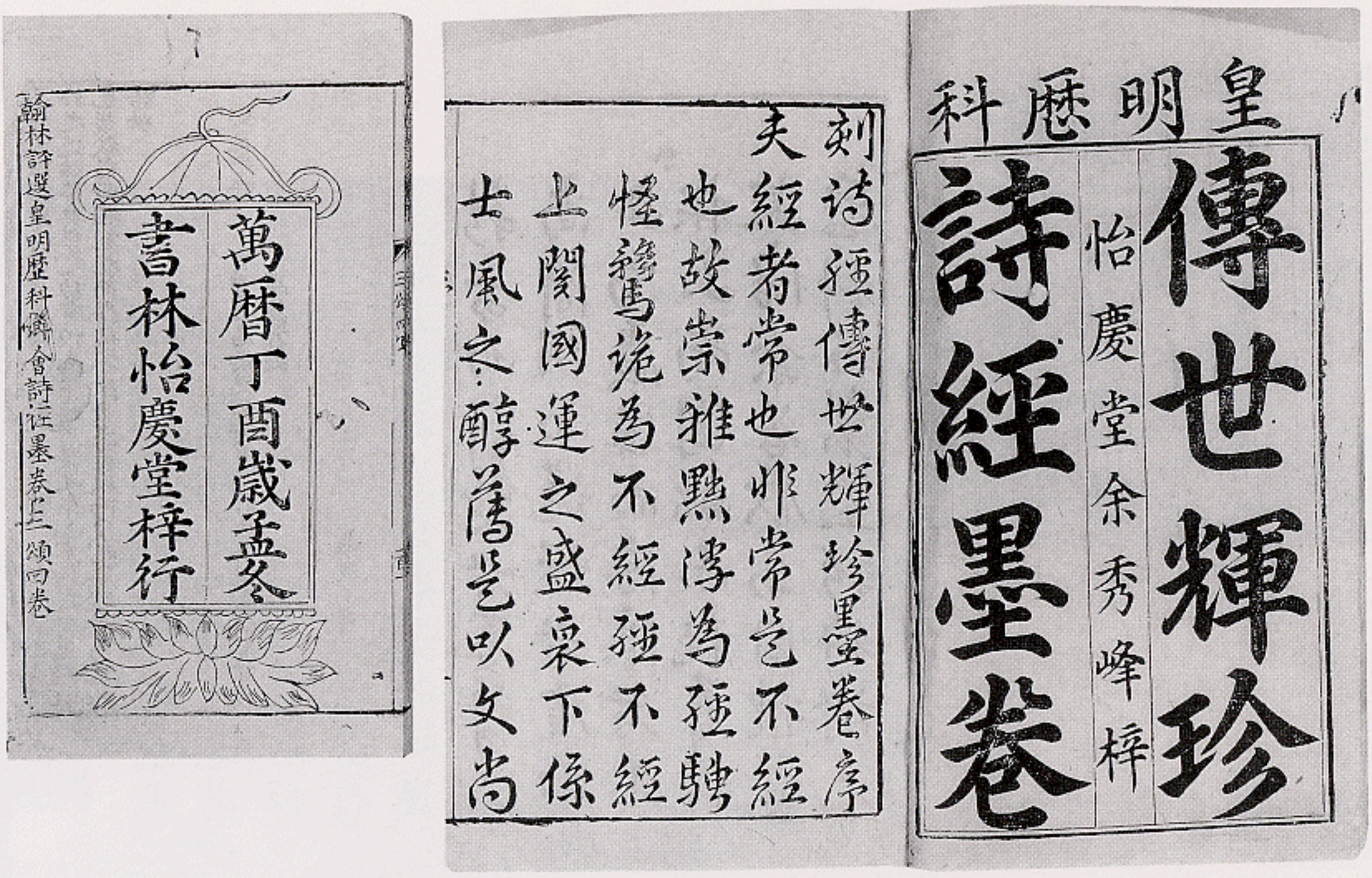
114　土佐日記　契沖自筆付箋縫付本



119　城西聯句　古活字版



121　烏台正譌凌雲詩経（詩集伝）　明版



122　翰林評選皇明歷科郷会墨卷　明版

子然後浩然有歸志魯平公駕將見孟子嬖人臧倉謂曰何哉君所謂輕身以先於匹夫者以爲賢乎樂正子曰克告於君君將爲來見也嬖人有臧倉者沮君君是以不果曰行或使之止或尼之行止非人之所能也吾不遇於魯侯天也臧氏之子焉能使予不遇哉又絕糧於鄒薛困殆甚退與萬章之徒序詩書仲尼之意作書中外十一篇以爲聖王不作諸侯恣行處士橫議楊朱墨翟之言盈於

天下天下之言不歸楊則歸墨楊氏爲我是無君也墨氏兼愛是無父也無父無君是禽獸也楊墨之道不息孔子之道不著是邪說誣民充塞仁義也仁義充塞則率獸食人人將相食也吾爲此懼閑先王之道距楊墨放淫辭正人心熄邪說以承三聖者予豈好辯哉予不得已也梁惠王復聘請之以爲上卿孫況齊威宣王之時聚天下賢士於稷下尊寵若鄒衍田駢淳于髡之屬甚衆號曰列大

120　風俗通残簡　元版

文選卷第一

梁昭明太子撰

五臣并李善注

賦甲 善曰賦甲者蓋題甲乙所以紀卷先後今卷既改故甲乙並除存其首題以明舊式

京都上

班孟堅兩都賦二首 善曰自光武至和帝都洛陽西京父老有怨班固恐帝去洛陽故上此詞以諫和帝大悅也

兩都賦序

班孟堅 銑曰漢書云班固字孟堅扶風安陵人九歲能屬文至明帝時爲蘭臺令史遷爲郎後竇憲出征匈奴以固爲中護軍憲敗坐免官死獄中明帝脩洛陽西土父老怨帝

123-1　文選　古活字版

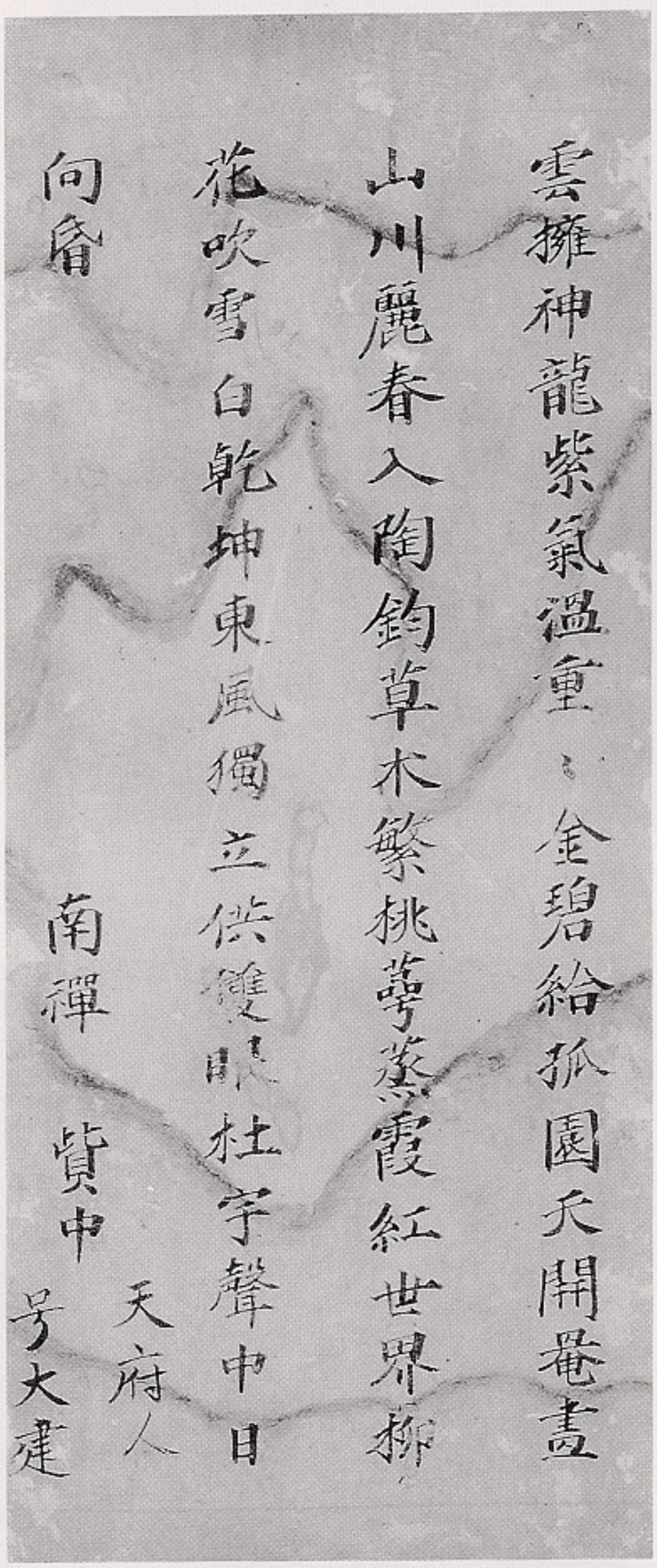
哉 銑曰歎歎悲也 善曰范曄後漢書曰蔡邕陶上疏曰帶長懷中幕而歎

文選卷第六十　終

右文選板歲久湧微殆甚紹興二十八年冬十月直閣趙公來鎮是邦下車之初以儒雅飾吏事首加修正字畫爲之一新俾學者開卷免魯魚三豕之訛且欲垂斯文於無窮云右迪功郎明州司法參軍兼監盧欽謹書

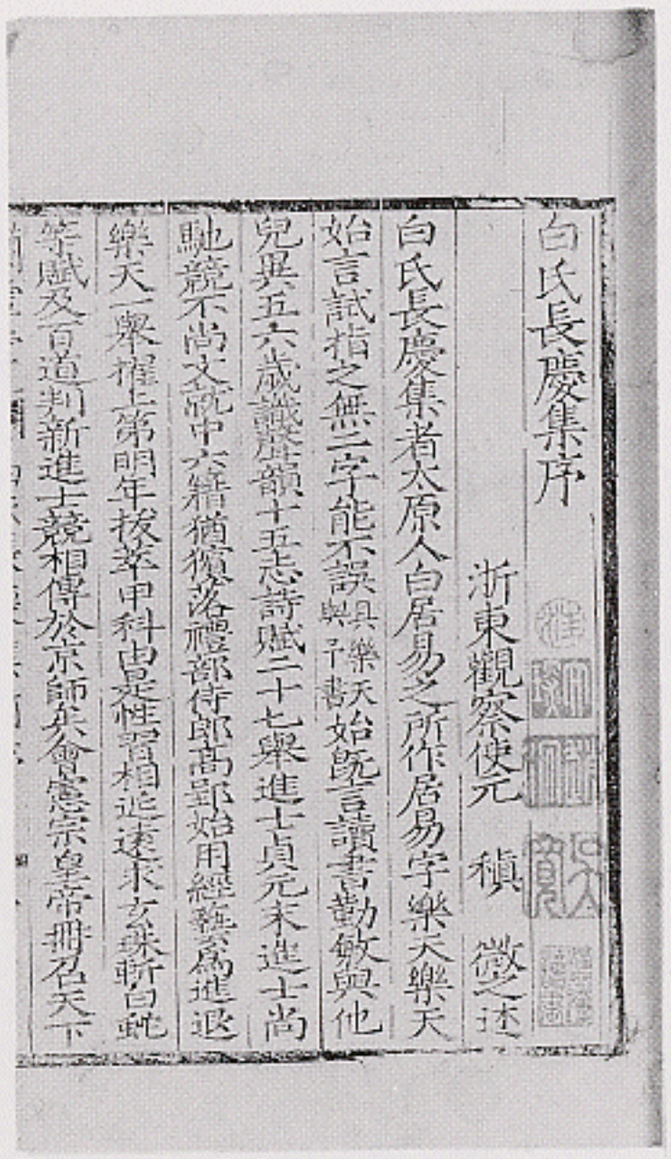
慶長丁未沽洗上旬八蕢　板行畢

123-2　文選



雲擁神龍紫氣溫重〻金碧給孤園天開畫畫
山川麗春入陶鈞草木繁桃蕚蒸霞紅世界新
花吹雪白乾坤東風獨立供雙眼杜宇聲中日
向昏　天府人　貲中　号大建
南禪

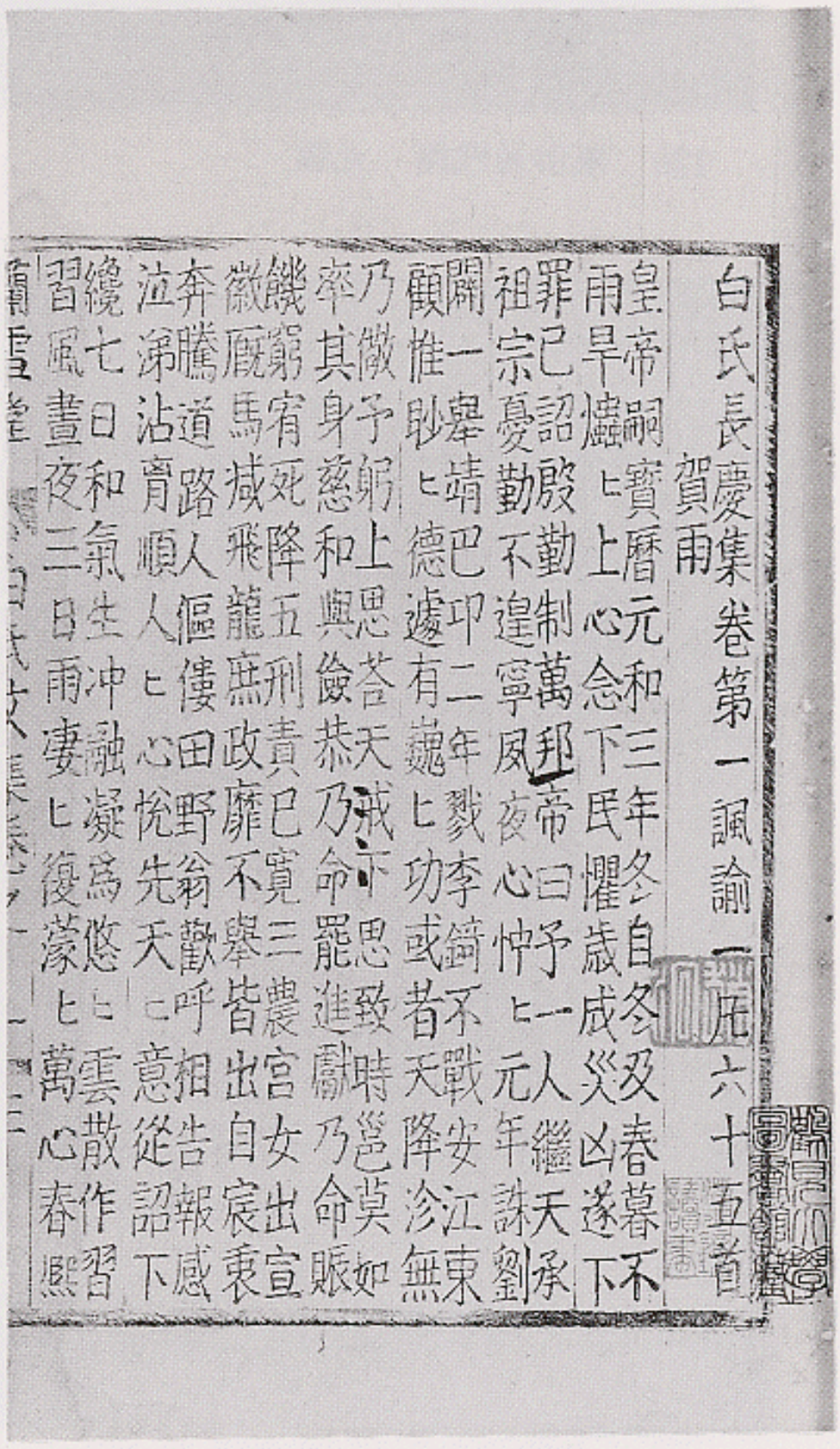
125　大慈寺八景詩歌断簡（伝二条良基筆）



白氏長慶集序

浙東觀察使元稹　微之述

白氏長慶集者太原人白居易之所作居易字樂天樂天始言試指之無二字能不誤具樂天始能言讀書勤敏與他兒異五六歲讀賦二十五志詩賦二十七舉進士貞元末進士尚馳競不尚文說中六籍猶獵涉禮部侍郎高郢始用經義爲進退樂天一舉擢上第明年拔萃甲科由是性習相近遠求玄珠斬百鈍等賦及百道判新進士競相傳於京師矣會憲宗皇帝冊召天下



白氏長慶集卷第一　諷諭一　六十五首

賀雨

皇帝嗣寶曆元和三年冬自冬及春暮不雨旱爍〻上心念下民懼歲成災凶遂下罪己詔殷勤制萬邦帝曰予一人繼天承祖宗憂勤不遑寧夙夜心怵〻元年誅劉闢一舉靖巴邛二年戮李錡不戰安江東顧惟眇〻德遽有巍〻功或者天降沴無乃微予躬上思荅天戒下思致時邕莫如率其身慈和與儉恭乃命罷進獻乃命賑饑窮宥死降五刑責己寬三農宮女出宣徽廐馬減飛龍庶政靡不舉皆出自宸衷奔騰道路人傴僂田野翁歡呼相告報感泣涕沾胸順人〻心悅先天意從詔下

124　白氏長慶集　明銅活字版

図録解説

1 〔五合書籍目録〕 平安時代末期写

巻子 一軸

継紙一軸。紙高二七・二糎。本文料紙、楮紙。巻初を欠く佚名の書籍目録であるが、端裏書に「法花経疏 顯章疏 二合目六（抹消） 倶舎 傳記 講式 五合目六」と分類が記される。最初、法花経疏（九部）・顯章疏（十二部）の二合（「合」は書櫃の単位であるが、ここでは分類名を指すか）の目録にとどめるつもりを、紙幅を継ぎ、倶舎論（六部）・傳記仏法（二十一部）・講式（十三部）を加えて五合六一部の目録としたのであるが、巻尾をも欠き、本来は更に続いたかも知れない。まず分類名に合点を打ち、各自、書名・巻帖数その他を注記するが、法花経疏に撰者名等の注記を若干見るのは注意される。「法花経釋文三帖上中下 中算撰／法花音訓一巻慈恩／法花経音義 匡房作」とあるのがそれで、中算（仲算）は平安中期の、観音の応化とも伝えられる法相宗の学僧で、『法花経釋文』は著作の一つとして醍醐寺蔵古鈔本三巻（重文）などが知られる。また慈恩とは、中国法相宗の開基たる窺基（単に基というが正しい）で、玄弉に師事して、百の疏主と呼ばれるほど多くの著述を残し、『法花音訓』はその一つである。一方、大江匡房は権中納言に至った平安後期の著名な漢学者で、仏籍に通じていたことも知られているが、数ある法花経音義なる書の中に、匡房の撰者名を見いだすことはできない。結局、法花経疏の合では、書名の肩に嘉祥や天親など唐代僧侶の名を記すので、彼我の経疏類が混在した目録である。目録編者は誰と知られないが、「倶舎論本頌」に「有注 先師御注也」とあるのを見るので、これに加注した者を師とした人物であろう。書名の下に「書」「摺」と注記して、写本か刊本（宋版なるべし）か区別したり、「唐書」と唐代古鈔本であることを示しているのも興味深い。しかし各合の中で最も注目されるのは、「傳記仏法」に見える諸書であろう。まず「扶桑略記抄三巻」とあるが、『扶桑略記』三〇巻は嘉保元年（一〇九四）以降の堀河朝、叡山の僧皇円の撰と推定されるので、三巻より成るという抄本の成立は、それを更に下らなければならない。しかし天理図書館所蔵の同名の書が、零本ながら平安朝末期の書写であるのを思い、この抄本が『水鏡』三巻の成立に何らかの関与をしたかと考えると、やはり一二世紀半ばには作られたのであろう。また「釋氏蒙求一帖複上中下」とある書名は、宋史芸文志には程謙撰とあり、続蔵経所載本には釋霊操撰とあって、いずれとも決しがたいが、『通憲入道蔵書目録』第廿七櫃に「釋氏注蒙求一帖」と著録されている。通憲目録成立年代に疑問なしとしないが、先師太田晶二郎の指摘のごとく、なお院政期における書籍目録とするのを妨げない。その他、傳記の合には、「日本霊異記一部三帖上中下／日本感霊録一部二帖上下」と往時の体裁をさながら伝える記事や、「一結四巻」（「一結十巻」のような表示は通憲目録にも見られる）とある中に「宋朝往反消息等一通 寂昭往反消息一通 良史書札一通 玄弉歴見國一通」と細目までが記されている。『御堂関白記』寛弘二年（一〇〇五）十二月十五日の記事に「入唐ノ寂照上人ノ書持チ来ル、憐ムベシ」、長和二年（一〇一三）九月十四日の条には「入唐ノ寂昭ノ弟子念救、入京ノ後初メテ来ル。摺本ノ文集并ビニ天台山ノ図等ヲ志ム」などと見えるのが想起される。『小右記目録』長保五年（一〇〇三）六月十八日の項「寂照入唐ノ首途ヲ為ス事」とある尻書きに「許サレズシテ入唐ノ事」と注記されているのと併せ考えると、その往復書簡は感慨に満ちたものであったろう。また「大唐三蔵取経記一部三帖／感通賦一帖／清涼傳一巻／三寶繪一部三巻」とある書目にも興味をそそられる。さてこの目録の書写成立年次がいつか、たとえ、あるいは鎌倉時代初頭の書写にせよ、その王朝風にのびやかな筆法は、深い魅力を湛えていると言えよう。なお、この目録の存在については、牧野和夫が既に言及（雑誌『春秋』一九九一・六、和漢比較文学叢書14『説話文学』所収論考）し、講式の合など一部を翻印している。

（池田）

2 本朝書策目録 江戸時代初期写

巻子 一軸

我国最古の国書の伝存書目。別称『本朝書籍目録』『本朝書目』『日本書籍総目録』『仁和寺書籍目録』『御室書籍目録』など。編者滋野井実冬という説もあるが未詳。成立は、和田英松『本朝書籍目録考證』によると、通行本の奥書から推して、永仁二年（一二九四）以前、弘安末、正応の始の頃の数年間とし、康安（南北朝）や永享・永正（室町）の成立を否とする。表紙、椽色紙表紙。紙高三一・四糎。本文料紙、薄様斐紙、一二紙を継ぐ。外題なく、内題「本朝書策目録」。編目は神道、帝紀、公事、政要、氏族、地理、類聚、字類、詩家、雑抄、和漢、管弦、医書、陰陽、人之伝、官位、雑々、雑鈔、仮名の合計一九。

収載書目は四四八部。仮名篇は最初の一紙（一四部収載）のみで大部分を欠き、伝本系統を明らかにする奥書も逸しているが、永仁（永正と誤記する伝本もある）奥書本に類似する。内容は書名と巻数のみを掲げて原姿に近く、その原本は透き写しの書体から判断して鎌倉末期に遡る。宝玲文庫旧蔵。なお、本学はこの他に池田亀鑑旧蔵の三本を含め同書の写本五本と寛文刊本を所蔵する。

（吉田）

3　大般若経　天平時代写

（永恩加点識語）　巻子　五軸

写経五軸。巻一七六～一八〇。紙高二五・三糎。本文料紙、黄麻紙。この写経は、永恩具経と呼ばれているように、奈良興福寺の蔵司であった永恩が、鎌倉時代前期の貞永・天福（一二三二～三）前後、かねて諸処より蒐集していた天平書写大般若経六〇〇巻に、全巻にわたって朱の句点を施し、一具として自分の氏神である河内国玉祖神社に奉納したものの一部である。その後、神仏分離に際して薗光寺竹之坊に引き取られたことなど、田中塊堂著『古写経綜鑒』に詳しい。

巻子本を一時折本に改装した形跡を見るが、現在は再び本来の原装風な巻子本に戻されている。近代の再改装にかかるものであろう。同じ永恩具経の中には、天平の書写奥書を残す巻々があり、最近（平五・十一）発行の『一誠堂創業九十周年記念即売会目録』筆頭にある巻第十八には「天平十三年歳次（七四一）辛巳七月十八日奉為四恩　写檀越／下村主廣麻呂」と見える。本学所蔵の五軸すべてにも朱の句点があり、巻一七六より一七九までには巻末に朱で「句切了永恩」と記されるのみであるが、巻一八〇には同じく朱書で、

天福元年癸巳五月廿六日興福寺上階馬道以東
為第二房句切了　永恩生年六十七

とある。こうした加点奥書は一〇巻ごとに記すのを原則としたらしいが、薗光寺にあった巻五九一には「貞永二年癸巳於興福寺上階句切了永恩年六七云々」との朱書があったという。貞永二年は四月十五日に天福と改元されているので、永恩の加点が巻序に従って施されたのでないことを知る。現在、永恩具経は各地に四〇巻ほどが遺存すると確認されるが、天平経特有の雄渾にして秀麗な書法は見事であり、特に五巻が並び揃っているのは極めて貴重である。横浜市指定文化財。

（池田）

4　〔律抄〕断簡　平安時代中期写

軸装　一幅

楮紙。縦二六・七、横五六・六糎。前後欠のため書名や奥書を欠き、その来歴なども明らかでない。ただ「篇聚釈名章第三」の下方に「愛宕神社」朱印があるので、愛宕神社旧蔵であったことがわかる。

内容は曇無徳（法蔵）部の『四分律』、摩訶僧祇（大衆）部の『摩訶僧祇律』、弥娑塞（化地）部の『五分律』、迦葉遺（飲光）部の『解脱戒経』などに対する中国における漢訳の実情――時期・訳者・訳場など――について述べているが、前欠の部分に薩婆多（説一切有）部の『十誦律』がとりあげられていたことは云うまでもない。また「篇聚釈名章」では比丘・比丘尼の具足戒を、罪の種類と軽重により、五科七類に類別した五篇七聚をあげ、これについて解釈しているが、五篇の第一で教団から追放される重罪「波羅夷」の途中で終っている。

その料紙や書体から平安中期の写本であることは間違いないが、あるいは南都における戒律研究の稀観資料かも知れない。

（納冨）

5-イ　〔第三重口決〕　鎌倉時代初期写

巻子　一軸

本文料紙、斐紙。紙高一八・二糎。東寺旧蔵。表紙を欠くが端裏書「保延記」と内容・奥書から、保延六年（一一四〇）三月十三日、定海があらわした第三重口決であることがわかる。早稲田大学図書館本（江戸時代写、『安祥寺流通用字輪観口訣』に合綴）と照合した場合、訓点などわずかに出入りが認められるが、その料紙や書体などから鎌倉時代初期の転写本と思われる。

定海（一〇七五―一一四九）は右大臣源顕房の子で、醍醐三宝院流の祖。醍醐寺座主・東大寺別当に補せられたが、天承元年（一一三一）護持僧となり、鳥羽上皇・崇徳天皇の病気平癒をはじめ、しばしば効験をあらわしている。また定海は本書のほかに『最秘口決』や『醍醐灌頂』をあらわしている。

なお早稲田大学図書館本には尾に成賢　道教　親快　親玄　澄禅　賢爾　玄海の「相承次第」がある。

（納冨）

（奥書）
保延六年三月十三日記之　定海

5-ロ　〔大次第口決〕　建暦元年写

巻子　一軸

本文料紙、斐紙。紙高一八・三糎。東寺旧蔵。仁

海(九五五―一〇四六)の口決を成尊(一〇一二―一〇七四)が記したもので、建暦元年(一二一一)三月二日、室生寺住の某が書写した旨の奥書があり、端裏書に「大次第口決」とある。

意生金剛など金剛界理趣会一七尊・を掲出し注釈しているから、「理趣会」や「理趣経法」に関するものと思われるが、『義述』を引文し注釈している。(納冨)

(奥書)
建暦元年三月二日書之
室生山寺住

右御正(聖)教之中不懸思検出了
小野僧正御房同僧都御房御
口御記也此　内可入之者也
秘蔵之外無他事
金剛佛子元初七十九 通五十九

應永十一年甲申卯月廿九日酉尅於
宀(室生)一山閑寂臺被見尅也(花押)

5-ハ **光明真言口伝**　弘長四年写(盛深筆)　巻子　一軸

本文料紙、斐楮混漉。紙高一七・八糎。東寺旧蔵。表紙を欠き正確な書名は明らかでないが、奥書から醍醐寺座主・東寺長者実賢(一一八〇―一二四九)の口受を、弘長四年(一二六四)二月八日、高野山尺迦院南房において盛深が書写したものであることがわかる。端裏書に「光明真言口伝実―」とあるが、「光明真言口伝」「光明真言法曼荼羅」「光明真言法護摩」からなる。

光明真言の功能について『不空羂索経』は、十悪五逆の重罪を犯したものでも、光明真言で加持した土沙をその屍や墓の上にかけると、罪障を除滅し無上菩提を得るとするが、白河院・美福門院・後白河院・鳥羽院・一条院妃・建春門女院の中陰にあたり、その得脱をねがい勝覚・源運・勝憲・実範・義範・勝憲によって修せられたことがわかる。(納冨)

(奥書)
本云
承久二年庚辰正月廿五日

私師云
比書ハ醍醐座主東寺一長者
前大僧正御房実賢御口受
也最秘々々努々

弘長四年甲子二月八日於高野
山尺迦院南房寫書了
求法沙門盛深

6 **仏果圜悟禅師碧巌録**　五山版　室町時代初期刊　袋綴　五冊

宋・雪竇重顕(せっちょうじゅうけん)(九八〇―一〇五二)頌古、圜悟克勤(ごこん)(一〇六三―一一三五)評唱。表紙は藍色紙で江戸時代の改装。外題なし。縦二六・一、横一五・三糎。左右双辺。郭内、縦一七・九、横一一・四糎。有界一一行、二一字詰。句点附刻。巻首は「仏果圜悟禅師碧巌録」、版心は「碧巌(巻数)(丁数)」とある。巻五末に長文の刊語、巻七・九・十末に「嵎中張氏書隠刻梓」、巻九末に「正琳刻梓」などの原木記を存し、さらに巻十末に「玉峯刻梓」の刊記がある。これは建仁寺天潤庵住の玉峯正琳が、南北朝初期に開版した本邦最古の覆宋版碧巌録の重版を意味しており、天下の孤本として貴重である。

碧巌録は圜悟の弟子大慧宗杲(一〇八九―一一六三)から学人を惑わすものとして焼却され、閲覧を禁止されてから、しばらく顧みられなかったが、元・大徳年間(一二九七―一三〇八)張明遠が「宗門第一書」と冠し刊行して以来、禅林でひろく読まれたが、とりわけ臨済宗で重視され、京・鎌倉の五山を中心にしばしば出版された。(納冨)

7 **〔対大己五夏闍梨法〕断簡**　道正庵切　寛元二年写(道元自筆)　額装　二葉

通常「対大己法」と呼ばれるこの著述は、道元禅師が定めた『永平大清規』第二篇として書かれ、入門して程たたぬ修行僧の、大己(先輩僧侶。修行五年は五夏、一〇年は闍梨)に対する礼法を、日常の起居振舞に即して、六二条にわたり説示されたものである。この断簡が道正庵切と呼ばれるのは、入宋した道元に随侍した俗弟子の木下道正が、帰国後京に薬舗を構えた庵(現在の京都市上京区道正町)に所蔵されていたとの伝えによるが、勿論定かではない。しかし本書巻末識語に当る断簡が出光美術館蔵国宝手鑑『見ぬ世の友』に収められ、「于時日本寛元二年甲辰三月二十一日」なる年記と「道元(花押)」と署名までも見られるので、同じく自署を有する永平寺蔵国宝『普観坐禅儀』と並び、極めて稀な道元真筆墨蹟の中で、自筆か否かを鑑定する上での根本真蹟資料となっている。道元四五歳、壮年期の筆である。

自筆原本は、斐紙の一面に白界六行を施し、共紙

表紙とも一〇丁二〇面より成っていた粘葉装の冊子と推定されるが、遺存するのは本学の二面（二頁）を含めて、わずか五面と三行である。そのうち本学の切㈠は縦二三・九、横一四・四糎、第二四末より第二八までを記し、京都国立博物館蔵国宝手鑑『藻塩草』所収の切の実に裏面に当り、㈡はやや四周を裁断して縦二三・二、横一二・七糎で、これは第六〇より本文大尾の第六二まで、一行を余白にして終わっている。またこれも、一丁両面書きの裏面に当ると判明したので、先の出光の見開き二面の切と隣り合って糊で接し、しかも㈢の次に当る見開き左の面が何も書かれていなかったという巻末の書誌的状態をも明らかにしたのである。なお他に遺るのはMOA美術館蔵国宝手鑑『翰墨城』に一行が、田中塊堂氏旧蔵手鑑『都地久連』に二行が収められている。気迫の漲る道元の、典雅のうちに圭角を備え、鋭利、透徹、清澄の風韻漂う孤絶ある唐様の筆法が、観る者を圧倒するであろう。

（池田）

8　才葉抄　（藤原教長口伝）　鎌倉時代末期写

（伝世尊寺行能筆）　巻子　一軸

書道伝書。萌黄色地に菱・牡丹唐草等を織出した緞子表紙。紙高一七・四糎。見返しは金布目紙でいずれも後補。本文料紙、斐楮混漉。墨付一三紙、礼紙一葉を介し牙軸に付く。元来は縦一四、横二二糎ほどの横本であったらしい。現在の一紙は当然冊子一面分に相当する。残欠本となってからの巻子改装であろう。外題なく、内題「宰相入道教長口伝」。

歌人としても聞えた能書家藤原教長（一一〇九―一一七八―？）の伝書で、冒頭の「安元三年（一一七七）七月二日於高野山庵密談」によって一応の成立年代が知られる。筆受者は藤原伊経（？―一二二七？）。保元の乱に坐して常陸配流、のち召還され高野山に住む教長のもとには様々の文化人が訪れたようで、伊経の他、『才葉抄』口受の翌年顕昭（一一三〇？―一二〇九？）も登山して『古今集註』の成立にあずかったらしい（京都大学蔵『古今集註』奥書）。なお教長は14今城切の筆者と推定されている。

『才葉抄』はその収載項目数によって大きく二四条本・四八条本・八八条本に分類され、掲出本は四八条本に属する。が、第四～二四・第二六・三四～三六条を欠き、逆に通行の四八条本には見えないもの二条を持つ。したがって現在二五条存。『才葉抄』中おそらく最古伝本か。しかも古写本の常としての字句の異同のみならず、たとえば、三七・三八・四六の如く通行本とは大きく配列が異なり、前記の脱落は勿論見のがせない欠陥だが、四八条本中の異本として意味の重い存在である。末尾に「五月八日　行能」と見え、伝称筆者はこれによったもの。ただし本奥書であるか、一種の偽跋であるかは、なお議論の余地を残す。

古筆了栄（一六〇七―一六七八）の極札の他鑑定紙片二葉、さらに桐箱蓋裏には古筆了仲（一八二〇―一八九一）の識語が見える。

（高田）

9　古今和歌集　（兼好古今）　室町時代中期写

列帖装　一冊

紺地に菊・牡丹唐草を織り出した金襴表紙。縦二五・〇、横一六・七糎。左肩に龍文を刷つたかと思われる題簽の一部（「古」一字分）が残る。金紙に牡丹唐草を空刷りした見返。本文料紙、斐紙。墨付一五七丁。

綴じから見てもともと一冊本、まま巻の変り目ごとに余白一丁または半丁をおく。室町中期以前の写で、毎半葉一〇行（仮名序九行・真名序八行）、歌一首一行書、詞書二字下げ、朱声点・合点の他、同筆と覚しき片仮名・平仮名書入、かなり詳しい勘物あり。

仮名序、本文、真名序の次に「比集家々所称」以下の貞応二年七月二二日本奥書を掲げ、改丁して、

「本云
　暦応二年（一三三九）六月廿四日壬子以
　宗匠御本書写訖
同廿九日校合之　兼好
　加朱点
　　判」

吉田兼好（？―一三五二―？）は、南北朝動乱の世にあって古典研究・書写に熱を入れ、古今集・拾遺集・八雲御抄・源氏物語を写し、『古今鈔』（現佚）の著もあった。掲出本は建武五年（一三三八）に続く古今集書写。なお金沢文庫には兼好の筆跡に似た朱点・朱注を持つ古今集序が蔵され（星野直隆「兼好法師筆古今集仮名序のこと」金沢文庫研究六―四）、古今集の名物切である熱田切の筆者に擬せられる。

（高田）

10　古今和歌集　室町時代中期写

列帖装　一冊

萌黄色地に鳳凰・鶴を織り出した緞子表紙。縦二二・八、横一五・八糎。外題なし。銀切箔を密に蒔いた斐紙の見返し。なおこの見返し裏面には高さ一九・三糎、幅一・六糎ほどの界が施され、古写経の反故を利用したものと推される。本文料紙、斐紙。

毎半葉九行(仮名序八行、真名序七行)、歌一首一行書、詞書一字下げとし、同筆と思われる漢字・平仮名・片仮名書入れあり。巻一七雑上885、作者名「あま敬信」に「よるかの朝臣母列子ニツカヘタテマツルナリ」は、珍しい注か。墨付一六六丁。仮名序・本文・真名序の次に貞応二年七月二二日本奥書を載せる。

箱書「古今全部　東山殿筆」。古筆了任の極札にも「公方　慈照院義政公古今和歌集全一冊〔守村〕」とあり、また足利義政(一四三六―一四九〇)の筆、外題は三条西実隆(一四五五―一五三七)の外題、価金十五枚と認めた元禄九年(一六九六)の古筆了仲の折紙を添えるが、無外題の掲出本とは対応せず。先の極札を検するに、裏面天地に金箔の跡が残り、かつて典籍に貼られていた――通常見返しか扉に押す――ことが判明する。しかも掲出本には、相当する装飾料紙部分を欠くので、大幅な改装による外題脱落・見返し交換を考えない限り、極札や折紙の示す書物と掲出本とは一致しない。おそらく典籍の入れかえがおこなわれたと思われるが、室町中期の闊達な書風や前記の注など、見所の多い写本である。川越敏子(敬楓)氏より寄贈された。

(高田)

11　**古今和歌集**　延宝貞享頃写(契沖筆)　列帖装　二冊

紺地に黄・白にて花菱を織り出した緞子表紙。縦二四・九、横一八・一糎。外題なし。見返し、金切箔・砂子を蒔いた斐紙。本文料紙、斐紙。毎半葉一〇行歌一首一行書、詞書三字下げ。上冊は仮名序より巻一〇まで、巻ごとに改丁しすべて丁の裏面から書写する統一のとれた形式。下冊は巻一一より真名序に至り、各巻丁の表よりの書写が多いけれど一貫してはいない。伝本系統を示す奥書はないが、貞応本系の本文である。ただし具体的に契沖写本の底本が何であったかはなお問題を残す。

下冊末に「此古今集全部二冊、契沖阿闍梨墨痕也、聊不渉議論者矣　文化元年(一八〇六)三月　賀茂季鷹」の鑑定識語が見え、季鷹(一七五二―一八四一)の証する通り、契沖(一六四〇―一七〇一)の筆跡と判断される。碩学の手写本として注目すべき点の多い典籍ではあるが、就中興味深いのは表記において所謂契沖仮名遣ではなく伝統的な定家仮名遣を用いていること、この書を底本として文化九年(一八一二)に清水浜臣門下川島蓮阿の模刻本が刊行されたこと、であろう。この模刻は本文から季鷹識語まで再現した版本ながら、真名序を略し、底本の仮名遣を契沖仮名遣に改めるなど、若干の手なおしが認められる。なお蓮阿の序文によれば、掲出本には上田秋成(一七三四―一八〇九)の極めが付せられていたらしい。惜しいことに現在これを欠く。

契沖の手写本はほぼ簡素な料紙の袋綴本に限られ、掲出本の如き緞子表紙列帖装、斐紙に丁寧な筆跡を見せて定家仮名遣で書写する点、学術的興味とは別の意図で作成されたものと推される。天和・貞享(一六八一―一六八八)頃の写か。

詳細な解題を付した複製(池田利夫編『契沖筆古今和歌集』)あり。

(高田)

12　**古今和歌集**　豆本　江戸時代中期写　袋綴　二冊

利久茛地銀襴表紙。縦八・五、横六・二糎。外題なし。見返し金紙。

間似合風薄手料紙の縦六糎横三・五糎ほどのスペースに、毎半葉九行二七字とごく細字の書写、類のない豆本と言えよう。手なれた筆で終始一貫写し続ける技は驚嘆に値する。歌一首一行書、詞書二字下げ、書入なし。上冊墨付七四丁、下冊八一丁。仮名序、本文と続き墨滅歌までを書く。真名序奥書等ないが、貞応本系統の本文と思われる。

書写年代も新しく、特異な本文を伝えているわけでもないが、古今集の多様な楽しみ方がうかがえる愛すべき写本である。

(高田)

13　**古今和歌集断簡**　平安時代後期写(伝藤原伊行筆)　軸装　一幅

金揉箔散らし斐紙。縦二一・二、横一三・八糎。手沢の状態から見て、列帖装の丁ウラ面か。巻五秋下293・294を一面五行に写した典雅な古筆。

畠山牛庵および古筆了任の極札を添え、いずれも藤原伊行(?―一一七五)の手とするが、伊行筆跡たる戊辰切・葦手下絵朗詠集と比較して明らかに別筆、むしろ伊行より若干古い、しかも相当な書き手のものではなかろうか。

品のよい装飾料紙と行間をゆったりとった名筆ぶり、伝藤原公任筆公忠集切と料紙・筆跡共に似るが現在のところツレは管見に及ばない。博雅の君子の垂教を乞う。

(釈文)

もみちはのなかれてとまるみなとには
くれなゐふかきなみやたつらん
　なりひらの朝臣
ちはやふる神よもきかすたつたかは
からくれなゐにみつくゝるとは

(高田)

14　**古今和歌集断簡**　今城切　治承元年写

（藤原教長筆）　軸装　一幅

藍漉染斐紙。縦二四・六、横一五・九糎。右端に糊付のあとが見え、粘葉装冊子本の丁のオモテ面に相当、縦二一・四、横一二・九糎の淡墨界中に六行書写を定式とするが、八行書きの断簡もある。掲出の切のように五行で余白の存する例は他にも報告されているが、これらのほとんどは文字特に詞書を削去して体裁をととのえたもので、古筆切にその例は多い。この切でもおそらく次の和歌の詞書「はくわかう　よみ人しらず」が削られたのであろう。古今集巻十物名462・463を写す。

力強く重量感のある書風で、江戸時代より飛鳥井雅経（一一七〇―一二二一）筆の名物切として珍重され一〇〇枚以上伝存する。現在では三井文庫蔵『たかまつ帖』所収の奥書部分や『諸雑記』の記述により、治承元年（一一七七）八月藤原教長（法名観蓮）の書写と考えられており、同筆と思われる資料には二荒山本後撰集・和漢朗詠集長谷切・伴大納言絵巻詞書などがある。

『新撰古筆名葉集』によると「白・浅黄・萌黄」の三種の料紙を用いたことになるが、現在白・黄・茶・藍の四色が認められる。しかし、黄・茶は保存状態もしくは経年変化の結果の呈色とも考えられるので、白・藍以外の料紙については確定しがたい。白のものに比べ勿論藍の料紙の方が少なく、全体の二割にも満たないであろう。

筆者教長は崇徳院の近臣として参議正三位に至るが保元の乱に連座、常陸国配流となる。後、召還され和歌や書の道で重きをなした。今城切の名は今城家（もと中山冷泉家）によるか。古筆別家了任の極札を添う。

（釈文）

なつくさのうへはしけれるぬまみつの
ゆくかたのなきわかこゝろかな
かつらのみや　源忠ホトコス
あきくれとつきのかつらのみやはなる
ひかりをはなとちらすはかりそ

（高田）

15　**古今和歌集断簡**　中山切　鎌倉時代初期写

（伝藤原兼実筆）　軸装　一幅

金銀箔散らし・霞引・緑青による下絵等を施した美麗な斐紙。縦一六・五、横一五・九糎。一面九～一一行、古今集二〇巻を上下二冊に分写するのが通例のところ、四帖に写した列帖装であった。『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八）一一月一八日の古今・後撰拾遺三代集を各五冊仕立てとした記事が参考となる。なお巻一一～一五を収めた九条家旧蔵の第三帖が、原態のまま伝存する。

掲出の分は巻二春下132下句～134詞書に相当し、新出の一葉である。金銀の華やかな装飾に加え、紺青・緑青等の顔料を用いた下絵はことに珍しく、後京極様の力強い書風と相俟って、鎌倉時代初期を代表する尤品となっている。久曽神昇『中山切　古今和歌集』によれば、俊成本系のうち特に建久二年本・永暦二年本に近い本文を持つ。

なおこの切を伝称通り兼実（一一四九―一二〇七）の筆と認め、治承三年（一一七九）頃の写しとする説も、前掲久曽神著によって強力に主張されているが、兼実自筆資料と比較してやはり別手とすべきであろう。

（釈文）

ちるはなことにたくふこゝろか
やよひのつこもりの日あめの
ふりけるにふちのはなをおり
て人につかはしける
なりひらの朝臣
ぬれつゝそしゐてをりつるとしのうちに
はるはいくかもあらしとおもへは
亭子院の哥合のはるのはて
の哥
みつねの

（高田）

16　**後撰和歌集**　零本　室町時代初期写

列帖装　一冊

松葉色地に卍小紋を織り出した緞子表紙。縦一四・五、横一三・七糎の升型本。外題なし。見返し金布目紙。本文料紙、斐紙。ただし巻首の一丁は後補。外側黒漆塗、内側梨地の箱に収む。

巻九までを存し、巻六・九に都合五丁の切取りが見られる。二〇巻を上下二冊に写したものの上冊で、元来一〇巻分六括あったか。現在五括墨付一五五丁を残す。歌一首二行書、詞書一字下げ、本文と別筆の朱書入りあり。

後半を欠くので当然奥書不明だが、巻八450の次の特異歌を持たない定家本系貞応本・天福本に属する。巻四200を欠くのは誤脱か。また巻六348左註を詞書と同じ高さに書き、次の歌との間に二行分すなわち歌一首分の空白を置くのは、左註を詞書と誤認し、当然ながら相当する歌がないので空けておいたものと考えられる。

上記の如き欠陥もあるものの、室町時代を下るこ

とのないと思われる朱勘物は注目に値するであろう。天福本系為相本墨書勘物に往々一致するが、たとえば巻一46左註勘物の藤原兼輔任参議「延喜廿一年正月参議左中将如元々蔵人頭」（為相本「延喜廿年正月参議中将如元」）のように、掲出本の方が詳しく、かつ史実としても正確（兼輔は延喜二一年正月に参議）である例が多い。

現在巻末となっている部分の余白左下に「すみつき□」と覚しき墨書を削去した跡あり。（高田）

17　**拾遺和歌集断簡**　筑後切　鎌倉時代後期写

（伏見天皇筆）　軸装　一幅

藍内曇斐紙。縦二七・九、横九・一糎。ツレが巻子本として存し、原態は明か。しかし多くの切に折り目が見られ、一時期折本となっていたらしい。また仏典が裏文学で写っている資料もあって、伝来過程に多くの問題を残す。

歌人として、また能書家として聞えた伏見天皇（一二六五―一三一七）の筆跡、広沢切と共に古くより喧伝される。筑後切は古今・後撰・拾遺の三代集を気品高い内曇料紙六〇巻に書写したもので、一巻分完全に残る後撰集巻二〇末に「永仁二年十一月五日書訖」（一二九四）とあり、天皇三〇才の折の筆と判明する。古今集の場合は巻一八の零本が、後撰集には前述の如く巻二〇の完本が伝存、しかし拾遺集では巻一六の九首分が一軸としてまとまるのみ（徳川美術館）で、あとはすべて断簡。ゆったりと温雅な書風で歌一首三行書写を定式とし、世上筑後切と称する散らし書きの資料もあるが、やや疑わしい。稀に後人が下絵を描き入れたものも存する。

掲出の切は巻二〇1311、左端に折り目の跡が残る。拾遺集巻末本奥書部分が伝えられており（たかまつ帖）、貞応元年（一二二二）九月七日藤原定家（一一六二―一二四一）の校訂書写した系統であることになる。貞応元年六〇才の定家は古典書写に力を尽し、三代集だけでも七部の書写が報告されている。筑後切の貞応元年九月七日本は、従来知られていなかった系統で、伏見天皇による若干の取捨改変も想定される（杉谷寿郎「拾遺集定家貞応元年九月七日書写本考」『語文』七八）。古筆了珉（一六四五―一七〇一）の極札を付し、その裏面に「切歌一首丁丑七」とあるのは元禄一〇年（一六九七）丁丑七月の謂。（高田）

（釈文）

はるは花あきはもみちと
ちりはてゝたちかへるへき
このもともなし

18　**千載和歌集断簡**　日野切　文治四年頃写

（藤原俊成筆）　軸装　一幅

斐紙。縦二一・五、横一四・八糎。料紙欠損少々あって綴穴が確認しにくい。列帖装、丁オモテ面か。巻一九釈教1235～1237を写す。第二首目「あか□き」は料紙の欠損。

藤原俊成（一一一四―一二〇四）の古筆切中、自ら撰した千載集の断簡ゆえにひときわ珍重されるものの一。現在巻一〇以下のみが存し、上下二帖のうち下帖分の分割と知れる。『明月記』天福元年（一二三三）七月三〇日の「家本之下帖」と関係あるか。一帖一四〇丁ほどと推定（田村悦子「藤原俊成自筆千載集断簡日野切の考察とその集成」『美術研究』二三三）され、その半分程度が発見されている。烏丸光広（一五七九―一六三八）識語を持つ切や冷泉為頼（一五七二―一六二七）の箱書ある資料も見え、江戸初期にはすでに断簡となっていた。切名称は日野家伝来たることによるか。

千載集成立を序文にしたがって一応文治三年（一一八七）とすれば、俊成七〇代以降の老筆となるが、鋭い転折やよどみない墨痕は、源平動乱の世を生きぬいた巨匠にふさわしい迫力に満ちている。

日野切は、その書写形態から、千載集の草稿ではなく、一種の撰者手控本と判断され、掲出の切にはないが作者名に細字注を付す例など、撰者自筆資料であるだけに注目すべき点が多い。

二重箱入。内箱蓋表に「日野切　おとろかぬ」、蓋裏に「藤原俊成卿筆　義（花押）」と墨書するのは吉沢義則（一八七六―一九五四）の手。古筆本家の極札「五条三位俊成卿（おとろかぬ）（琴山）」を脇に貼る。（高田）

（釈文）

おとろかぬわかこゝろそうかりけれ
はかなきよをはゆめとみなから
高野にまいりてよみ待ける
寂蓮法し
あか□きをたかのゝやまにまつほとや
こけのしたにもありあけの月
煩悩即菩提のこゝろをよめる
式子内親王の中将
おもひとくこゝろひとつになりぬれは
こほりもみつもへたてさりけり

19　**新古今和歌集断簡**　西山切

鎌倉時代中期写（伝高倉清範筆）　軸装　一幅

斐紙。縦一六・五、横九・七糎。元来縦一七、横